要素となるのである。そこで生産の範圍は不變であつても、生産物の商品形態が獨立化し固定化して成る在庫商品は資本制生産の發達につれて增大することとなる。だが、この現象は在庫品の形態變化に過ぎないことは、既に述べた通りである。換言すれば、一方に商品形態を採つた在庫品が增大することは、他方に直接的の生産機關及び消費資料なる形態を採つた在庫品が減少する結果であつて、要するに在庫品の社會的形態が變化するだけである。社會的總生産物に對する在庫品の相對量が增大するのみではなく、絶對量も同時に增大することとなるのは、これ畢竟するところ、資本制生産の發達につれて生産物の總量が增大する結果である。」

資本制生産が發達するにつれて、生産物に對する直接的の需要に依つて生産の規模が決定されることはます〳〵少なくなり、それが個々の資本家の支配に屬する資本の大さや、斯かる資本の價値增殖衝動や、生産行程の連續竝びに擴大の必要などに依つて決定されることはます〳〵著しくなる。その結果、特殊の各生産部門の商品として市場に存在する生産物、換言すれば販賣を求めつつある生産物の量は、必然的に增大することとなる。大なり小なりの期間、商品資本なる形態のもとに固定した資本の量は增大して來る。かくして在庫商品も增大することとなるのである。」

最後に、社會の大部分の人々は賃銀勞働者に轉化される。然るに賃銀勞働者なるものは、その日暮らしをしてゐる人々である。每週賃銀を受けて、日々それを支出してゆく人々である。隨つて彼等から見れば、その生活資料は在庫品として豫め準備され得ることを要するのである。この在庫品の個々の要素は如何に流動し得るものであるにしろ、在庫品が不斷に流動を續け得るためには、その一部が絶えず停滯されてゐることを必要とする。」

以上すべての要件は、生産の形態と、それに含まれてゐる所の、生産物が流通行程に於いて通過せねばならぬ轉形とに基因するものである。

在庫生産物の社會的形態は如何なるものであるにしろ、これを保管するためには、生産物の保藏具たる建物や容器其他の物や、有害なる影響防止の目的を以つて支出されねばならぬ生産機關及び勞働——生産物の性質に從つて量を異にする所の——などについての費用を要する。在庫品が社會的に集積されること著しければ著しき程、この費用は相對的にます〳〵小となる。」斯かる支出は常に、對象化された形態なり、生きた形態なりに於ける社會的勞働の中、生産物の形成それ自體には關與することなく、寧ろ生産物の減除を意味する所の一部を代表し、隨つて資本制的形態の場合について言へば資本支出を代表するものである。」それは必要なる支出であり、社會的富の經費を代表するものである。」それは社會的生産物の保存に必要な費用であつて、この生産物が在庫商品の要素として存在するに至るのは生産の社會的形態にのみ、隨つて商品形態と其必要なる轉形とにのみ基く結果であるか、それとも在庫商品なるものは在庫生産物の流通行程所屬の形態たる在庫商品としてではないにしても、兎にかく凡ゆる社會に共通する所の在庫生産物の特殊の一形態に過ぎないものと見られるか、といふことは、この點に差異を生ぜしめるものではない。」

然らば斯かる費用は、如何なる程度まで商品の價値に入るかといふ問題が生じて來る。

資本家が生産機關及び勞働力のために前貸した資本を一定量の生産物（販賣に充用すべき完成商品）に轉化して、而もその商品量が販賣されずにあるとすれば、斯かる販賣不能の期間、彼れの資本の價値增殖行程が停滯を來たすといふのみではなく、この在庫品の保存に要する建物、追加勞働などについての支出は積極的の損失となるのである。彼れが若し『自分の商品は六ケ月間賣れなかつた。それでこの六ケ月間商品を保存するために、自分は斯々量の資本を寢かしたのみではなく、更にX額の經費をも負擔した』と言つたとすれば、彼れの商品の最終消費者たるべき人は笑つて答へるであらう。——『それは尙更ら不利益な事だ。君の隣りには、一昨日商品を作り上げたばかりの販賣

者がゐる。所が君の商品は店晒らしの古い品である。それは多分、時間の齒に掛つて多かれ少なかれ損はれてゐるであらう。だから君は、競爭者よりも安く賣らなければならない譯だ」と。

商品生產者が彼れの商品の現實的な生產者であるか、それとも資本家的の生產者であつて、實際のところ現實的生產者を代表するに過ぎないか否かといふ問題は、商品の生命條件の上に影響する所はない。生產者はその生產物を貨幣に轉化せしめなければならない。生產物が商品形態に固定されることに依つて生ずる經費は、彼れの個人的冒險に屬する事であつて、商品の購買者には關係する所がないのである。購買者は、この商品の流通期間の代價をも支拂ふものではない。現實的又は想像的の價値革命に際して、資本家が故意にその商品を市場に出さないで置く場合にも、彼れが追加費用を實現するか否かといふ問題は、この價値革命が行はれるか否か、彼れの思惑が當るか外づれるかの如何に依つて決定されるのである。然し價値革命なるものは、彼れの費用の結果ではない(6)。故に在庫品の成立が流通の停滯を意味する限り、これに伴ふ費用は商品に何等の價値をも追加するものではないのである。

他方に又、商品が流通部面に滯留することなく、資本が大なり小なりの期間その商品形態を把持することなくしては、何等の在庫品も存在し得るものではない。卽ち如何なる在庫品も流通の停滯なくして存在し得るものではないのであつて、この點、貨幣基金の成立なくしては何等の貨幣も流通し得ないのと同樣である。要するに、在庫商品なくしては何等の商品流通も行はれ得るものではないといふことになる。資本家は W—G なる轉形に於いては此必然に逢著しないとしても、G—W なる轉形に於いてはこれに逢著することとなるであらう。尤も此場合には、彼れの商品資本は問題とならずして、彼れの使用すべき生產機關と、彼れの勞働者の消費すべき生活資料とを生產する他の資本家たちの商品資本が問題となるのである。

在庫品が任意的に形成されるか、不任意的に形成されるかといふ事、換言すれば商品生產者が故意に在庫品を準備するか、それとも流通行程そのものの事情のため販賣が抵抗に逢著する結果彼れの商品が在庫品となるに至るかといふ事は、問題の本質の上に何等影響し得るものではないやうに見える。然し任意的の在庫品が如何なる原因に依つて不任意的の在庫品から區別されるかを心得て置くことは、この問題を解決する上に有用な事である。不任意的な在庫品形成は、商品生產者の知識から獨立し彼れの意志に逆つて行はれる所の流通停滯に基くものであり、又は斯かる流通停滯と同一のものである。然らば、任意的な在庫品形成の特徵となるものは何であるか？　この場合にも、販賣者は出來得る限り迅速に商品を賣り飛ばさうと努めてゐる。彼れは常に、生產物を商品として提供するのである。彼れが生產物を販賣から引き上げた場合にも、それは單に在庫商品の可能的要素たるに過ぎないのであつて、現實的の要素となるものではない。彼れから見れば、商品それ自體は依然交換價値の負擔者たるに過ぎないものであり、而して商品は價値形態を脫し貨幣形態を採ることに依つてのみ、また此事實が行はれた後にのみ、斯かる負擔者として作用し得るに過ぎないのである。

與へられたる期間に亙つて一定量の需要を充たす爲には、在庫商品が一定の大さを有して居ることを必要とする。これに就いては、購買者の範圍の間斷なき擴大といふ事が計算に入るのである。例へば一日の需要を充たす爲には、市場に存在する商品の一部が流動を續け、貨幣に轉化されつつあるとき、他の部分は絕えず商品形態を把持して居らねばならない。他の部分が流動を續けつつあるとき停滯狀態に止まつてゐる商品部分は在庫品それ自身が範圍の縮小を來たし、終に全く販賣し盡されるに至るまで不斷に減少してゆくことは事實である。かくて商品停滯なるものは、この場合商品販賣の必要條件と考へられることになるのである。更らに在庫商品の範圍は、中位的の販賣よりも、換

言すれば平均需要の範圍よりも大でなくてはならぬ。然らずんば、此平均範圍以上に出づる需要分は充たされ得なくなるであらう。他方に在庫品は絶えず分解される故に、絶えず更新される事を要する。此更新は終極に於いては、ただ生產に、商品の供給に基くのみである。而して此供給が外國から來るか否かといふ事は、問題の上に何等の變化をも與へるものではない。此更新は商品の再生產に要する期間に依つて左右される。在庫商品は此期間內における需要を充たすに足る程度に達して居らねばならない。在庫品が本來の生產者の手に止まる事なく、卸賣商人の手から小賣商人の手に至る種々樣々の保藏所を通過するといふ事實は、單に現象を變更するのみであつて、實體その者の上には影響する所がない。商品が生產的又は個人的の消費に歸する事なき限り、資本の一部は社會的に觀察すれば在庫商品として存在してゐるのである。生產者自身も直接生產に倚存する事を避け、間斷なき顧客範圍を確保する目的を以つて平均需要に照應した在庫品を準備しようと努める。生產期間はそれに照應した購買期限を齎らすものである。而して商品は、同一種類の新たなる供給品に依つて代位され得るに至る迄の間、大なり小なりの期間在庫品を形成する。かくの如き在庫品形成に依つてのみ、流通行程と、それを包含する再生產行程との不易及び永續が確保されるのである。

Wが尙ほ市場に止まつてゐるに拘らず、その生產者は既に W—G—W′ を完成し得るといふことは、念頭に置かねばならない事實である。商品が終極的の消費者に販賣される迄の間、生產者自身これを保藏して置かうとすれば、彼れは二つの資本を運轉しなければならぬこととなるであらう。卽ち商品生產者として運轉する資本と、商人として運轉する資本とがそれである。個々の商品たると社會的資本の組成分としての商品たるとを問はず、兎にかく商品それ自體から見れば、斯かる保藏の費用が生產者自身の負擔に歸するか、それともAからZに至る一列の商人の負擔に歸するかといふ事は、問題の上に何等影響する所がない。

在庫商品なるものが、與へられたる規模の社會的生產のもとに於いて、在庫商品としては存在せざるとき生產在庫品（潛伏的な生產基金）なり消費基金（消費資料の準備）なりとして存在するであらう在庫品の商品形態に外ならざる限り、在庫品の保存及び形成に必要な費用（換言すれば、その目的に利用される對象化された勞働又は生きた勞働）は、社會的生產基金なり社會的消費基金なりの保存に必要な費用の變調されたものに過ぎないのである。斯かる費用は、それに基く商品價値の增臈に依り、按分比例を以つて種々異なつた商品に配分されるに過ぎない。この費用は、商品の種類に應じて種々異なるからである。在庫品の形成に必要な費用は、社會的富の存在條件の一つであるとはいへ、而もその減除を意味するといふ點には變りがない。

在庫商品が商品流通の條件であり、甚しきは商品流通に依つて必然的に生じ來たる一形態である限り、換言すれば貨幣準備の形成が貨幣流通の條件である如く、それと全く同樣に一見停滯の如く思はれる此現象が流動そのものの形態となつてゐる限り、その限りに於いてのみ商品流通は順當に行はれてゐるのである。反對に、流通の貯溜に置かれてゐる商品が續いて迫り來たる生產の波に位置を讓ることなく、そのため流通貯溜が過充するに至るや否や、流通は停滯して在庫商品の擴大を來たすこと、恰も貨幣流通の停滯するとき退藏貨幣が增大するに至る如くである。この場合、斯かる停滯が產業資本家の保藏所の內部に生ずるか、それとも商人の倉庫の內部に生ずるかといふ問題は、關係する所がないのである。いづれにしても、在庫商品は間斷なき販賣の條件ではなく、寧ろ商品の販賣せられざる結果となるのである。費用そのものは變化する所がない。けれども、それは今や全く形態上の作用、換言すれば商品を貨幣に轉化せしめる必要と此轉形の困難とに基くものであるから、商品價値の形成要素となることなく、寧ろ實現さるべき價値の減除卽ち損失を代表するものとなる。在庫品が順當のものであるか變則的のものであるかといふことは、形

態の上から區別されるものではなく、いづれの在庫品も流通の停滯を意味するものであるから、此等の現象は相互混同され得るものである。且つ又、生産者の立場から見るとき、商人の手に移轉された商品の流通行程は停滯するに拘らず、資本の流通行程は進行し得るものであるから、隨つて此等の現象はます〳〵生産擔任者の目を欺瞞し得るものとなるのである。生産竝びに消費の範圍が擴大されるとすれば、他の事情に變化なき限り、在庫商品の範圍も亦擴大される。それは從前と同じく迅速に更新され、吸收されるとはいへ、その範圍はヨリ大となるのである。かくて流通の停滯が在庫商品の範圍を擴大せしめるといふ現象は、再生産行程擴大の一徴候と誤認され得るやうになる。而して此傾向は、信用制度が發達して現實的の運動が神祕化され得るに至るとき、特に著しくなるのである。

在庫品の形成に必要な費用は、(一)生産物の量的減少（例へば、麥粉の保藏における如き）と、(二)質の惡化と、(三)在庫品の保存に必要な對象化された勞働竝びに生きた勞働と——此等の三要素から成るものである。

(三) 運輸上の費用

玆には流通費用の凡ゆる細目(例へば、荷造、品別等に於ける如き)について述べる必要はない。商品の轉形にのみ基く一切の流通費用は商品に何等の價値をも附加するものではないといふことが、普遍律となるのである。かくの如き流通費用は、價値の實現又は一つの價値形態から他の價値形態への推轉に伴ふ費用に過ぎないのである。この費用に投ぜられる資本(その命令の下に立つ勞働も含まれる)は、資本制生産に伴ふ空費の範圍に屬するものである。斯かる費用は餘剩生産物の中から回收されねばならぬものであつて、資本家階級全體の立場から見れば、餘剩價値又は餘剩生産物からの控除を意味してゐる。それは丁度、勞働者の生活資料の購買に必要な時間が、彼れにとつて損失時間を意味してゐるのと同樣である。だが、運輸上の費用は極めて重要な役割を演ずるものであるから、玆に簡單な考察を與へないで看過する譯には行かない。

資本の循環と其一節たる商品轉形との內部には、社會的勞働の代謝機能が行はれるのであつて、この機能は生產物の位置變動、卽ち一つの場所から他の場所への生產物の現實的運動を必要とするものである。然るに商品の流通は、商品の物理的運動なくしても行はれ得るものであり、生產物の運輸は商品の流通なくしても、甚しきは生產物の直接的交換なくしても行はれ得る。Aが Bに販賣する家屋は、商品として流通するが、位置を變動するものではない。棉花又は鑛鐵の如き動的な商品價値は、幾多の流通行程を通過し、投機師の手で購買されては販賣されつつある時、同一の保藏所に在留してゐる(十七)。この場合現實的に運動する所のものは、物の所有名義であつて、物それ自身ではない。反對に、例へばインカ國に於いては、社會的生產物が商品として流通することなく、また直接的交換に依つて分配されることなきに拘らず、運輸業は大なる役割を演じてゐたのである。

(十七) ストルとは、この後ちの流通を『人爲的』(künstlich)の流通と呼んだ。

されば資本制生產の基礎上における運輸業は流通費用の原因として現はれるとしても、斯かる特殊の現象形態は問題の上に何等影響する所はないのである。

生產物の量は運輸に依つて增大するものではない。また運輸に依つて生產物の自然的性質が變化を受けるやうなことがあるとしても、それは若干の場合を除くほか、何等豫期的の利用效果を意味するものではなく、寧ろ不可避的の惡を意味するのである。けれども物の使用價値は、物の消費に依つてのみ實現されるものであり、而して物の消費なるものは位置の變化と、隨つて運輸業の追加的生產行程とを條件とする。かくして運輸業に投ぜられる資本は、一部

的には運輸機關からの價値移轉に依り、一部的には又運輸勞働に基く價値追加に依つて、輸送生産物に價値を附加することとなる。この價値追加は、資本制生産の他の凡ゆる場合におけるが如く、勞銀の回收分と餘剩價値とに分割されるのである。

各生産行程の內部に於いて、勞働對象の位置變化と、それに必要なる勞働要具竝びに勞働力とは——例へば、棉花が梳刷室から紡績室へ移轉され、石炭が炭坑の內部から地表へ送り出される場合に於ける如き——大なる役割を演ずるものである。完成生産物が完成商品として、一つの獨立した生産場所から空間的に隔在してゐる他の生産場所に移轉される事は、同一の現象がヨリ大なる規模を以つて行はれることを示すに過ぎない。生産物が一つの生産場所から他の生産場所に輸送されることに續いて尙ほ、完成生産物が生産部面から消費部面に輸送されるといふ事實も行はれる。生産物は此運動を完了したとき、玆に初めて消費され得る位置に置かれたものとなるのである。

曩に示した如く、勞働の生産力と價値造出力とは互ひに逆比例するものであつて、この法則は商品生産の普遍律となつてゐるのである。斯かる法則は他の凡ゆる產業に於ける如く、運輸業の上にも通用し得るものであつて、一定の距離における商品の運輸に必要な勞働——死勞働たると活勞働たるとを問はず——の量が小なれば小なる程、勞働の生產力はますゝ大となり、これと反對の場合には反對の事が言ひ得るのである（十八）。

（十八）商業は運輸上の費用に依つて生產物の價格を增騰せしめ、又は價値を增進せしむるものであつて、之れは商業の天職の一つと見るべきである。とセーは說いてゐるが、リカルドは此セーの所論を左の形に引抄してゐる。『セーの主張に依れば、商業なるものは商品を其發生場所に獲て他の消費場所に輸送することを可能ならしめる。卽ち商品の價値は、商業に依つて右の第一の場所に於ける價格と第二の場所に於ける價格との全差額だけ增大され得るのである』と。リカルドはこれに附け加へて曰く、『成る程さうも言へやう。だが、この追加價値は如何にして與へられるか？　それは第一に、運輸上の費用を生產費に追加することに依り、第二に、商人の爲す資本前貸に對する利潤を生產費に追加することに依つて與へられるのである。この商品の價値がヨリ大となるは、他の商品におけると同一の理由に依る。卽ち消費者がこれを購買する以前、その生產及輸送にヨリ多くの勞働が支出される結果である。これは商業に伴ふ利益の一つと言ふべきではない』（リカルド著『經濟原論』第三版、ロンドン、一八二一年刊、第三〇九——三一〇頁）。

運輸に依つて商品に追加せられる價値絕對量は、他の事情に變化なき限り、運輸業における生產力に逆比例し、通過すべき距離に正比例する。

他の事情が不變であるとの條件のもとに、運輸上の費用に依つて商品の價格に追加せられる價値相對量は、商品の容積と重量とに正比例する。然し之れを變更せしめる事情は多々ある。例へば、物品の相對的な可碎性、腐滅性、爆發性等の如何に從つて、運輸上に大なり小なりの豫防策、隨つてまた勞働及び勞働要具の大なり小なりの支出を要する。これに就いて、鐵道經營者たちは想像上の種屬を造り出す點に、植物學者や動物學者以上の才能を發揮する。イギリスの鐵道における貨物分類は數卷の書を充たすほど複雜に亙つたものであるが、之れは大體に於いて貨物の種々雜多なる自然的性質をば、同樣に數多き運輸上の缺點と、不可避的なる詐僞理由とに轉化せしめんとする傾向に基くものである。『硝子は從前、一クレート（一定の容積を有する荷箱）につき十一磅であつたが、今や產業が發達し、硝子稅が撤廢されたため、二磅に下落した。而もその鐵道運賃の高きことは從前と異なる所なく、水上運輸の費用を超過してゐるのである。バーミンガム市を中心として半徑五十哩の地域に於ける製鉛に充用すべき硝子及び硝子器の運賃は、從前に於いては一噸當り十志であつたが、今や硝子は破碎し易く危險を伴ふといふ口實のもとに三倍の率に引

き上げられた。而も物が破碎すればとて、鐵道經營者はそれを辨償しないこととなつてゐるのである』（十九）。

（十九）『勅令鐵道委員』第三一頁、第六三〇頁。

更らに、運輸上の費用が物品に追加する價値相對量は、その物品の價値に逆比例するものであつて、この事實は鐵道經營者たちをして物品の價値に比例して運賃を課せしめる特殊の口實となるのである。この事實に對する產業資本家や商人の側からの怨嗟は、上記鐵道委員報告中における證述の每頁に反復されてゐる。

資本制生產方法は、交通運輸機關の發達と運輸の集中（規模擴大）とに依つて、個々の商品に對する運輸費を節減せしめる。資本制生產方法の下に於いては、先づ凡ゆる生產物の大部分を商品に轉化せしめることに依り、次には其地方の市場に代ふるに遠隔市場を以つてすることに依つて、商品の運輸に支出さるべき社會的勞働部分——生きた勞働と對象化された勞働との兩者を含む——は增大せしめられることとなるのである。

商品の流通、換言すれば事實上における商品の空間的流動とは、畢竟するところ商品の運輸に外ならないものである。運輸業なるものは、一方に、獨立した一生產部門、隨つて又生產資本の特殊の一放下部面を構成すると同時に、他方には又、生產行程が流通行程の內部に、且つ流通行程の爲に延長されたものとして現はれるといふ事實に依つて他の生產部門から區別されるものである。

第二編　資本の回轉

第七章　回轉期間及び回轉度數

與へられたる一資本の總循環期間が、流通期間と生產期間との和に等しいことは、曩に述べた通りであつて、要するにそれは、資本價値を一定の形で前貸した瞬間から、循環資本價値が同一の形態を以つて復歸するに至る迄の期間を包含するものである。

資本制生產の決定目的は常に、前貸價値を增殖することに在るのであつて、前貸價値が獨立した形態である貨幣形態を以つて前貸されるにしろ、又は商品として前貸され、その價値形態は前貸商品の價格に於いて單なる觀念的の獨立を有するに過ぎないものとなるにしろ、いづれにしても此點に異なる所はないのである。いづれの場合にも、前貸資本價値は循環中に種々なる存在形態を通過する。それは如何なる形態を採るにしろ、常に同一の資本價値であるといふ事實は、資本家の帳簿なり、又は計算貨幣の形態なりに依つて確かめられる所である。

G……G′ なる形態を見ても、P……P なる形態を見ても、此等はいづれも(一)前貸價値が資本價値として作用し增殖したといふ事實と、(二)前貸價値は其行程を完了した後、行程開始當時の形態に復歸したといふ事實とを含む。前貸價値Gの增殖と資本が此貨幣形態に復歸する事實とは、G……G′ に於いては明瞭に認められ得る。が、P……P

なる形態に於いても同様である。Pの起點となるものは、生產要素たるべき、一定の價値を有する商品の存在であるからである。この公式は、前貸價値の增殖（W及びG′）と本來の形態への復歸とを含む。蓋し、前貸價値は第二のPに於いて、前貸の行はれた當初の生產要素といふ形態を再取するからである。

『生產が資本制的形態を採つてゐるとすれば、再生產も同樣である。資本制生產行程のもとに於いては、勞働行程なるものは單に價値增殖行程の一手段たるに過ぎないのであるが、同樣に再生產も亦、前貸價値を資本として、自己增殖的の價値として再生產する所の一手段たるに過ぎない』ことは、曩に（第一卷、第七四七頁）述べたところである。

（一）G……G′　（二）P……P　（三）W′—W′　なる三つの形態は、次の事實に依つて互ひに區別される。卽ち第二形態P……Pに於いては、行程の更新（再生產行程）は現實的のものとして言ひ現はされるに過ぎないといふ事がそれである。然るに此第一及び第二形態は又、貨幣形態におけると素材的生產要素なる姿容におけるとを問はず、兎にかく前貸資本價値が起點であり、隨つて復歸點でもあるといふ事實に依つて、第三形態から區別される。G……G′における復歸點G′は G+g に等しい。若し行程が同一の規模を以つて更新されるとすれば、Gは再び起點となるが、gは此起點に入ることなく、單にGが資本として增殖を遂げ、餘剩價値gを造り出して放出したことを示すに止まる。P……P なる形態に於いては、生產要素Pなる形態を以つて前貸された資本價値が同樣に起點となる。この形態は斯かる資本價値の自己增殖を含むものである。單純なる再生產が行はれるとすれば、同一の資本價値はPなる同一の形態を以つて新たに行程を開始する。蓄積が行はれる場合には P′（價値量として見ればG′又はW′に等しきもの）は增大した資本價値として行程を開始することになる。けれども此行程は從前よりも大なる資本價値を以つて開始されるとはいへ、その前貸資本價値の形態は從前と同樣である。然るに第三形態に於いては、資本價値は前貸價値としてではなく、寧ろ既に增殖を遂げた價値として、前貸資本價値を包含する所の、商品形態における富の總體として、行程を開始するのである。この最後の形態は、個別的資本の運動をば社會的總資本の運動と關聯させて考察することを目的とする所の本書第三編にとつては重要なものであるが、資本回轉の說明には利用し得るものでない。蓋し資本の回轉なるものは常に、貨幣なり商品なりの形態を採つた資本價値の前貸を以つて開始され、且つ循環資本價値が前貸當時の形態を以つて復歸することを必然的に伴ふからである。第一及び第二循環の中、前者は回轉が餘剩價値の形成に及ぼす影響を研究の主眼とする場合に問題となり、後者は回轉が生產物の形成に及ぼす影響を研究の主眼とする場合に問題となるのである。

經濟學者は循環の種々なる形態を區別しなかつた如く、また資本の回轉に對する循環の種々異なつた關係をも相互に分離して考へなかつた。彼等が通常考察する所の形態は G……G′ である。蓋し此形態は個々の資本家を支配するものであつて、貨幣がただ計算貨幣なる形態に於いてのみ起點となる場合にも、彼れの計算の基礎として役立つからである。また他の經濟學者は、生產要素なる形態を以つてなされる支出から出發して、回收に至る迄の經過を辿るのであるが、この回收が如何なる形態を採るか、卽ちそれが商品形態を以つてなされるか、貨幣形態を以つてなされるかといふ問題については、些かも顧慮しないのである。一例——『經濟上の循環……語を換へていへば、支出の與へられた時から回收の得られる迄に至る生產の全經過。農業に於いては、播種期は發端、收穫は卽ち結末である』（サミュエル・フキリップス・ニューマン著『經濟學要義』アンドヴァー及ニュー・ヨーク發行、第八一頁）。他の學者はまたW′（第三形態）から出發する。——『生產取引の世界は 循環の形態を以つて流通しつつあるものと見ることが出來る。我々は之れを經濟上の循環と呼びたいのである。營業が其の逐次的の取引を通過して、起點に復歸するや否や、各循環は

完了する。資本家が彼れの資本を回收すべき收入を得た所を起點とすることも出來る。この點から出發して、彼れは新たに勞働者を雇入れ、勞銀なる形態を以つて彼等に生活（或は寧ろ生活を得る力）を分配することに著手するのである。彼等は資本家のために營業品を製造する。然る後、資本家は此製品を市場に送つて販賣し、その販賣價格に依つて支出資本の全部を回收する。かくして彼れは、この取引列の循環を結了するのである」（トマス・チアーマーズ著『經濟學』第二版ロンドン、一八三二年刊、第八四頁以下）。

個別的の一資本家に依つて何等かの生產部門に投ぜられた總資本價値は、その運動の循環を遂ぐるや否や、最初の形態に復歸して更らに同一の行程を反復し得る。それは資本價値として永久に存續し自己增殖を遂げる爲には、かく同一の行程を反復する必要があるのである。個々の循環は、資本の生涯における不斷反復的の一節たり一期たるに過ぎない。G……G′なる期間の終末に於いては、資本はその再生產行程又は價値增殖行程を含む一列の轉形を、新たに通過する所の貨幣資本なる形態を再取するが、P……Pなる期間の終末に於いては、その循環の更新の前提條件たるべき生產要素なる形態を再取するのである。個々の事象としてではなく週期的の行程として觀察した資本の循環は即ち資本の回轉たるものである。この回轉の持續期間は、資本の生產期間と流通期間との總和に依つて與へられる。斯かる總期間が卽ち資本の回轉期間となるものであつて、それは總資本價値の一循環期間から次の循環期間に至る中繼期間を、資本の生命行程の週期性を、或は同一なる資本價値の自己增殖行程又は生產行程が更新され反復されるとも言ひ得べき期間を秤量する所の尺度となるのである。

個別的資本の回轉期間を速かに進行せしめ短縮せしめ得べき個々の冒險を問題外に置いて考へるならば、資本の回轉期間なるものは、投資部面の如何に從つて種々異なることとなるのである。勞働力の機能を測るには一勞働日が自然的の單位となる如く、循環資本の回轉を測るには一年が自然的の單位となる。斯かる秤量單位は、資本制生產の母國たる溫帶地に生ずる最も重要な土地果實が年一回の作物であるといふ事實の內に自然の基礎を有するものである。

回轉期間の秤量單位たる一年を示すにUを以つてし、與へられたる一資本の回轉期間を示すにu、その回轉度數を示すにnを以つてすれば、$n=\frac{U}{u}$となる。そこで回轉期間が三ケ月である場合を例に採れば、$n=\frac{12}{3}=4$（卽ち四回轉）となり、資本は一年に四回轉を遂げることとなる。uが十八ケ月に等しいとすれば、$n=\frac{12}{18}=\frac{2}{3}$となり、資本は一年に回轉期間の三分の二を通過するに過ぎない。隨つて資本の回轉期間が數年に亙るとすれば、それは一年の倍加を以つて計算されることとなるのである。

資本家の立場から見れば、資本の回轉期間なるものは、價値の增殖と本來の形態を以つてする回收とを目的として資本を前貸しなければならぬ期間を意味する。

資本の回轉が生產行程及び價値增殖行程の上に及ぼす影響を更らに立ち入つて攻究するに先だち、尙ほ流通行程から生ずる所の、資本回轉の形態に影響する二つの新たなる資本形態を考察しなければならない。

第八章　固定資本及び流通資本

(一)　形態上の區別

不變資本の一部は其關與に依つて造られた生産物に移轉せられずして、生産行程に入つた當初の一定の使用形態を保持することは、第一卷第六章に述べた通りである。卽ちこの不變資本部分は、大なり小なりの期間、絶えず反復される勞働行程に於いて、絶えず同一の機能を反復するものであつて、例へば勞働建物や機械など（約して言へば、勞働要具なる名稱の下に總括される一切の物件）がそれである。かくの如き不變資本部分は、その使用價値と同時に交換價値をも喪失する程度に比例して生産物に價値を移讓する。斯種の生産機關から共關與に依つて造られる生産物への斯かる價値移讓（又は價値移轉）は、平均計算に依つて測定される。卽ちそれは、斯種の生産機關が生産行程に入つた瞬間から、全く消耗し死滅して、同じ種類の新たなる生産機關を以つて代位され再生産されねばならぬ瞬間に至る迄の平均的な機能持續に依つて測定されるのである。

要するに、この不變資本部分――嚴密の意味の勞働要具――の特質は左の如きものである。

資本の一部は不變資本卽ち生産機關なる形態を以つて前貸される。而してこの生産機關は、それが勞働行程に入つた時の獨立した使用形態を保持する限り、勞働行程の因子として作用するものである。完成生産物、隨つて又それに轉化された生産物形成要素は、生産行程から放出され、商品として生産部面から流通部面に移轉される。然るに勞働要具なるものは、一度び生産部面に入るや決して其處を出で去るものではない。それは自己の機能に依つて、生産部面に固く拘束されてゐるのである。前貸資本價値の一部は、生産行程の內部における勞働要具の機能に依つて限定される所の、斯かる形態に固定されてゐる。勞働要具が機能を盡して消耗を來たす毎に、勞働要具の價値の一部は生産物に移轉されるが、他の部分は依然として勞働要具と、隨つて又生産行程とに固定されてゐる。かく固定された價値は絶えず減少して、遂には勞働要具が消耗し盡され、隨つて大なり小なりの期間內に勞働要具の價値が、間斷なく反復される所の勞働行程全一列に基く生産物量の間に配分し盡される狀態に達するのである。けれども勞働要具が尙ほ作用力を維持し、同じ種類の新たなる勞働要具に依つて代位されることを要しない限り、不變資本は絶えず勞働要具に固定されてゐる。同時に、最初勞働要具に固定された價値の他の部分は、生産物に移轉され在庫商品の一部分として流通することとなるのである。勞働要具が長期間持續すればする程、卽ちその磨滅が緩漫であればある程、不變資本價値は益々長期間この使用形態に固定される。けれども勞働要具の耐久程度の如何に拘はらず、勞働要具が價値を移讓する比率は、常に其機能期間の全部に逆比例する。玆に價値の相等しき二つの機械があつて、一方は五年間に磨滅し盡し、他方は十年間に磨滅し盡すとすれば、前者は後者に比して同一期間に二倍量の價値を移讓することとなる。

勞働要具に固定した此資本價値部分は、他の總べての資本價値部分と同樣に流通する。一切の資本價値は絶えず流通しつつあるものであつて、此意味に於いては如何なる資本もみな流通資本となることは、既に概述した通りである。けれども玆に考察する資本部分の流通は、一種特別のものである。第一に、この資本部分はその使用價値形態を以つて流通するものではなく、寧ろその價値のみが、商品として流通する所の生産物に移轉される程度に比例して漸次的に、斷片的に、流通するに過ぎないのである。かくの如き資本部分の機能が持續する全期間を通じて、その價値の一部

は絶えず同一の資本部分に固定され、この資本部分の關與に依つて生産された商品から獨立してゐる。斯かる特質に依つて、この不變資本部分は固定資本(1)なる形態を與へられる。これに反して、生産行程に前貸された資本の他の凡ゆる素材的成分は、流通（又は流動）資本(2)を構成するのである。

生産機關の一部——卽ち勞働要具自身に依つて消費される助成材（蒸汽機關に依つて消費される石炭の如き）、又は單に勞働行程を支持するといふに止まる助成材（燈用瓦斯などの如き）——は、その素材を生産物に移轉するものではなく、ただその價値が生産物價値の一部となるに過ぎないのである。斯かる助成材の價値は、生産物自身の流通を通して流通せしめられる。この點は固定資本の場合と共通する所である。けれどもこの助成材はそれが關與する如何なる勞働行程に於いても、全部的に消費されるものであり、隨つて新たなる勞働行程が行はれる毎に、同じ種類の新たなる助成材に依つて全部的に代位されねばならないものである。それは作用中、獨立した使用價値形態を保持するものではない。隨つてこの助成材の機能の持續中、資本價値の如何なる部分も同じ助成材の舊來の使用價値形態に、現物形態に固定されるものではないのである。かくの如き助成材部分は、その素材を生産物に移轉するものではなく、ただその價値を生産物價値の一部として移轉するに過ぎないといふ事實、及びそれに關聯して生ずる所の、この助成材の機能は生産部面の內部に固く拘束されるといふ事實に惑はされて、ラムセーの如き經濟學者たちは助成材をも固定資本の範疇に含めてしまつた。（同時に又、彼等は固定資本と不變資本とを混同してゐるのである）。

生産物に素材を移轉する所の生産機關部分たる原料其他の物の一部は、この移轉に依つて、後に至り享樂資料として個人的消費に歸し得べき形態を與へられる。固定資本の素材的負擔者たる嚴密の意味における勞働要具は、ただ生産的にのみ消費され得るものであつて、個人的消費に歸し得るものではない。なぜならば、斯くの如き勞働要具は、その關與に依つて造られる所の生産物たる使用價値に入るものではなく、寧ろそれと對立して、磨滅し盡される時に至るまで獨立した形態を保持してゐるからである。尤も運輸機關は例外となつてゐる。運輸機關なるものは、それが生産的機能を盡しつつある間に、場所の變化といふ利用效果を齎らすものであるが、斯かる利用效果は又同時に、例へば旅客の如き人々の個人的消費に歸するものであつて、彼等は他の消費資料の使用の代價を支拂ふと同樣にして、この運輸機關の使用の代價をも支拂ふのである。例へば化學工業の如きに於いては原料と助成材とが互ひに融合することは曩に述べた所である。同樣に、勞働要具と助成材と原料とが互ひに融合する場合もあり得る。例へば農業上土地改善の目的に使用された物質の一部は、生産物形成要素として農作物に移轉された素材と同時に價値をも生産物に移轉するのであるが、殘餘の部分は舊來の使用價値形態を保持し、かかる形態のもとに價値を固定せしめることとなるのである。この後ちの部分は生産機關として存續し、かくして固定資本なる形態を與へられる。牡牛は勞働家畜として見れば固定資本であるが、食用される場合には勞働要具として作用することなく隨つて固定資本なる機能を盡すものではなくなるのである。

生産機關に投ぜられた資本價値の一部に固定資本なる性質を附與せしめる原因は、一に此價値の流通する獨特の樣式に存するものであつて、かくの如き獨特の流通樣式は、勞働要具が生産物に價値を移讓し、生産行程の持續中、價値形成要素として作用する一種特別の樣式に基くものである。而してこの後ちの樣式は又、勞働要具が勞働行程の內部に盡す機能の特殊の性質に基くものである。

生産物として一つの勞働行程から出て來る使用價値が、更らに生産機關として他の勞働行程に入ることは、我々の

知る所である。一つの生産物は、それが勞働要具として生産行程の内部に盡すところの機能に依つてのみ固定資本となるのであつて、それ自身生産行程から出て來た儘の形について言へば、決して固定資本となるものではないのである　例へば機械製造業者の供給する生産物（又は商品）としての機械は、彼れの商品資本の領域に屬するものであつて、それが固定資本となるのは、此機械を生産的に使用する所の購買者たる資本家の手に入つたとき初めて行はれる所である。

他の總べての事情に變化なき限り、資本固定の程度は勞働要具の耐久力が進むにつれて增進する。蓋し勞働要具に固定された資本價値と、この價値の中勞働行程が反復される都度生産物に移讓される部分との差の大小は、勞働要具の耐久力の如何に懸るからである。この價値移讓が緩漫であればあるほど——而して同一の勞働行程が反復される毎に、勞働要具は其價値の一部を移讓するのである——固定資本はます〳〵大となり、生産行程に充用される資本と生産行程に於いて消費される資本との差はます〳〵大となる。この差が消滅するや否や、勞働要具は消耗し盡されて、その使用價値と同時に價値をも喪失したこととなる。それは最早、價値負擔者ではなくなるのである。勞働要具なるものは、不變資本の素材的負擔者たる他の總べての生産機關と同樣に、使用價値と並んで價値をも喪失する程度に於いてのみ、生産物に價値を移讓するものであるから、その使用價値の喪失が緩漫であればあるほど、卽ち生産行程における勞働要具の持續が長期に亙れば亙るほど、不變資本がそれに固定される期間はます〳〵大となることは明かである。

嚴密の意味の勞働要具ではない生産機關、例へば助成材や、原料や、半製品などが、勞働要具におけると同樣にしてその價値の移讓及び流通を行ふものとすれば、斯かる生産機關も亦固定資本の素材的負擔者となり存在形態となる。

この事實は、數度の生産期間に亙り又は數ケ年に亙つて作用する所の化學的成分を土地に附與する如き上述の土地改善に於いて見られる所である。かくの如き生産機關の價値の一部は、他の價値部分が生産物に移讓されて生産物と共に流通しつつあるとき、生産物から獨立した形態（固定資本なる形態）のもとに存續する。この場合、生産物に移轉されるものは單に固定資本價値の一部のみではなく、斯かる價値分が依つて存在する所の實體たる使用價値も亦、同時に移轉されることとなるのである。

固定資本及び流通資本なる範疇を、不變資本及び可變資本なる範疇と混同することの根本的錯誤は暫く措き、從來經濟學者の間に行はれた概念決定上の混亂は、先づ左の事實に基くものである。

勞働要具の素材に屬する一定の性質（例へば、家屋などの場合における物理的不動性の如き）を固定資本の直接的性質たらしめること。だが斯くする時は又、それ自體として固定資本である他の勞働要具が反對の性質（例へば、船舶などの場合における物理的可動性の如き）を有するに至ることも、つねに容易に論證し得る所である。

又は價値の流通に基く經濟上の限定された形態をば、物それ自體の性質と混同すること。卽ちそれ自身に於いては決して資本ではなく、ただ一定の社會的事情のもとに置かれた時にのみ資本となる所の物が、それ自身に於いて、本來的に、一定の形態を採つた資本（固定資本又は流通資本）であり得るかの如く信ずること。如何なる社會的條件の下に行はれる如何なる勞働行程に使用される所の生産機關も、勞働要具と勞働對象とに區分されることは、第一卷第七章に述べた通りである。けれども此等の兩者が資本となり、前編に定義した如き『生産資本』となるのは、資本制生産方法のもとに初めて行はれる所である。勞働行程の性質に基く勞働要具と勞働對象との區別は、資本制生産方法の內部に於いてのみ固定資本と流通資本との新たなる區別に反射し、勞働要具として作用する所の物は資本制生産方

法のもとに初めて固定資本となるのである。若し此物が素材的性質の上から見て勞働要具たる以外の他の機能にも役立ち得るとすれば、斯かる場合それが固定資本となるか否かは、行はれる機能の如何に依る事である。家畜は勞働家畜として見れば固定資本である。然し食用家畜として見れば原料であつて、終極に於いては生産物として流通に入るものである。卽ち食用獸としての家畜は、固定資本ではなく流通資本であるといふことになる。

相互に關聯した連續的な、隨つて一つの生産期間——換言すれば、生産物を完成するに必要な生産時間の總體——を構成する、反復的に進行する所の諸勞働行程に、生産機關が長期間固定されるといふ事實は、資本家をして大なり小なりの期間に亙つた資本前貸をなす事を必要ならしめるものであつて、この點は固定資本と異ならないのであるが、然し單に斯かる事實のみに依つて、彼れの資本は固定資本となるものではない。例へば、種子は固定資本ではなく、約一年間生産行程に固定される所の原料に外ならないのである。一切の資本は生産資本として作用する限り、生産行程に固定されるものである。隨つて生産資本の一切の要素も亦——その素材的形態や、機能や、價値の流通樣式などの如何に拘らず——同樣に固定されるのである。生産行程の種類に依り、又は所期の利用效果の如何に從つて、固定期間に長短の差が生ずるとしても、斯かる事實は固定資本と流通資本との區別を生ぜしめるものではない(二十)。

(二十) 固定資本及び流通資本を定義することが困難であつたため、この區別は畢竟するところ說明を容易ならしむる爲に與へられるものに過ぎない、とロレンツ・シュタイン君は考へるやうになつた。

一般的の勞働條件を含む勞働要具の一部は、勞働要具として生産行程に入るや否や、又は生産的機能に準備される や否や、場所的に固定されるものである。或はまた最初より、斯かる固定的の、場所に拘束された形態を以つて生産されるものである。例へば機械の如きは前者に屬し、土地に加へられた改良や、工場建物や、鑛鑛爐や、運河や、鐵道などの如きは後者に屬する。この場合、勞働要具が其作用部面たる生産行程に間斷なく拘束されることとなるのは同時にまた斯かる勞働要具の感性的存在樣式の上から必要とされることである。他方に又、物理的に絕えず場所を變更し、絕えず運動して、而も間斷なく生産行程の內部に在留し得る勞働要具もある。機關車、船舶、勞働家畜などの如きは、卽ちそれである。勞働要具は右の第一の場合における不動性に依つて固定資本なる性質を附與されるものではなく、また第二の場合における可動性に依つて此性質を剝脫されるものでもない。けれども或種の勞働要具が場所的に固定され、大地に堅く密著してゐるといふ事實は、國民經濟上における特殊の役目をこの固定資本部分に割り當てるものである。卽ち斯種の勞働要具は外國に輸出し得るものではなく、隨つて商品として世界市場に流通し得るものでもない。勿論、斯かる固定資本の所有名義は移動され得る。卽ち此資本は賣買し得るものであり、その意味に於いて觀念的に流通し得るのである。しかのみならず、その所有名義は例へば株式の形を以つて外國市場に流通し得る。けれどもその所有者たる人は斯く變動し得るとはいへ、これがため、一國に存在する富の物質的に固定した不動部分と可動部分との關係は變動を來たすものではないのである(二十一)。

(二十一) 以上第四稿、以下第二稿。

固定資本の獨特の流通は、また獨特の回轉を伴ふものである。その現物形態の磨滅に依つて失はれる價値分は、生産物の價値分として流通する。生産物は流通に依つて商品から貨幣に轉化されるものであつて、生産物を通して流通する所の勞働要具價値も亦同樣の轉化を遂げる。而して又實に、此價値は勞働要具が生産行程の下に價値を喪失するのと同一の比例を以つて、流通行程から貨幣として滴下し來たるものである。かくして、勞働要具の價値は二重の存在を與へられることとなる。卽ち其一部は依然として、生産行程の領域に屬する使用價値形態（現物形態）に拘束さ

れ、他の部分は貨幣として此形態から分離されるのである。勞働要具の機能が進むにつれて、現物形態のもとに存在する價値分は絶えず減少し、反對に貨幣形態に轉化された價値分は絶えず增大する。かくして遂には、勞働要具が全く消耗し盡されて、その死體から分離された總價値が貨幣に轉化される狀態に達するのである。この事實の內に、斯かる生產資本要素の回轉の特質が認められる。卽ち斯かる生產資本要素の價値の貨幣化は、その價値負擔者たる商品の貨幣蛹化と步調を揃へて進むのである。けれどもそれが貨幣形態から使用價値形態に再轉化されることは、商品が他の生產諸要素に再轉化されることから分離されて行はれるものであつて、寧ろ勞働要具それ自身の再生產期間、換言すれば勞働要具が消耗し盡され、同一種類の他の勞働要具に依つて代位されねばならぬ期間に依つて決定される。假りに一萬磅の價値ある一機械の機能期間が十年であるとすれば、最初この機械のために前貸された價値の回轉期間も同樣に十年である。この期間の經過以前に於いては、機械は更新される必要なく、その現物形態を以つて作用を續けるのである。けれどもその間、機械の價値は、この機械に依つて連續的に生產される商品の價値部分として斷片的に流通し、かくして次第に貨幣化され、遂には十年末に於いて全部貨幣に轉化され、貨幣から更らに又一つの機械に再轉化されることとなる。換言すれば、回轉が遂げられることとなるのである。斯かる再生產の時期に達する迄の間、機械の價値は貨幣準備金として次第に蓄積されてゆく。

自餘の生產資本要素の一部は、助成材及び原料として存在する不變資本要素から成り、他の一部は又勞働力に投ぜられた可變資本から成るものである。

此等の諸要素が生產物竝びに價値の形成者として作用するところは、全く相異なるものであることは、勞働行程及び價値增殖行程の分析（第一卷、第五章）に依つて知られたところである。助成材及び原料から成る不變資本部分の價値は、勞働要具から成る不變資本部分の價値と同樣に、ただ移轉された儘の價値として生產物の價値に再現されるものであるが、勞働力の方は勞働行程を通して己れの等價たる價値を生產物に附加する。卽ち勞働力なるものは、現實的に其價値を再生產するものとなるのである。更らに、助成材の一部たる燃用石炭や燃用瓦斯などは、その素材を生產物に移轉することなくして、勞働行程の內部に消費し盡されるものであるが、他の助成材部分は其素材を生產物に移轉するものであつて、生產物の實體要素となる。だが此等の差異は總べて、流通の上にも、隨つて又回轉樣式の上にも、關係する所はないのである。助成材及び原料は生產物の形成上全部的に消費されるものであつて、この方面から見れば、その價値の全部は生產物に移轉されることとなる。隨つて又、その價値は生產物に依つて全部的に流通せしめられる。それは全部的に貨幣に轉化され、貨幣から更らに商品の生產諸要素に再轉化されるのである。この價値の回轉は、固定資本の回轉の如く中斷されるものではなく、絶えずその各形態の全循環を通過する。かくして此等の生產資本要素は、絶えずその現物形態を以つて更新されることとなるのである。

生產資本中の勞働力に投ぜられる可變資本部分について言へば、この資本は一定の期間に亙つて勞働力を購買する。勞働力なるものは、資本家に依つて購買され生產行程に合體せしめられるや否や、彼れの資本の一部たる可變成分となるものであつて、その購買された期間に亙つて日々作用するのである。それは此作用に依つて、自己の日價値の全部を再生產するのみではなく、更らに其超過分たる餘剩價値をも生產物に附加する。尤も此餘剩價値のことは、今のところ問題外に置く。

例へば一週間分の勞働力が購買されて機能を盡し了へると、その購買は慣例の期間絶えず更新されねばならない。連續的な生產の循環を中絶せしめまいとすれば、勞働力の作用中勞働力から生產物に附け加へられ、生產物の流通に

依つて貨幣に轉化される所の、勞働力價値の等價が、間斷なく貨幣から勞働力に再轉化されて絕えず其各形態の完全なる循環を通過することを要する。換言すれば、絕えず回轉することを要するのである。

卽ち勞働力のために前貸される生產資本價値部分は、全部的に生產物に移轉され（この場合にも尙、餘剩價値のことは問題外に置く）、生產物を通して流通部面に屬する兩轉形を通過するものであり、斯かる不斷の更新に依つて常に生產行程に合體されてゐるのである。要するに、價値形成の點に於いては、勞働力と固定資本を構成することなき不變資本要素との間に如何なる差異があらうとも、右の如き價値回轉樣式は兩者に共通する所であつて、兩者を固定資本から區別する所のものとなるのである。生產資本の此等の要素——勞働力と固定資本たる以外の生產機關とに投ぜられる生產資本價値部分——は、斯かる共通の回轉性質に依り、流通（又は流動）資本として固定資本に對立するものとなるのである。

勞働力使用の代價として資本家が勞働者に支拂ふところの貨幣は、事實上、勞働者の生活必需品に對する一般的の等價形態に外ならないことは、曩に述べた通りである。この意味に於いて、可變資本は素材的の方面から見れば生活資料より成る譯であるが、回轉を考察する當面の場合に於いては形態が問題となるのであつて、資本家が購買する所のものは勞働者の生活資料ではなく、勞働者の勞働力そのものである。彼れの資本の可變部分を構成する所のものは、勞働者の生活資料ではなく、勞働者の現實的な勞働力である。資本家が勞働行程に於いて生產的に消費する所のものは、勞働者の勞働力そのものであつて、勞働者の生活資料ではないのである。勞働力の代價として受領した貨幣を生活資料に轉化するものは勞働者自身である。彼れは此生活資料を勞働力に再轉化せしめる。卽ち彼れは、これに依つて生命を維持してゆくのである。これは例へば、資本家が商品の販賣に依つて實現した餘剩價値の一部を己れ自身の生活資料に轉化せしめる場合と異なる所はない。この場合、資本家の商品の購買者が彼れに生活資料を支拂ふとは言ひ得ないのである。勞働者の受ける賃銀の一部が生活資料として、現物を以つて支拂はれるとしても、それは今日に於いては第二の取引となつてゐる。彼れは自己の勞働力を一定の價格で販賣するのであつて、ただ其場合斯かる價格の一部が生活資料を以つて支拂はれる事に同意するに過ぎないのである。これは支拂の形式に變化を與へるのみであつて、勞働者が現實的に販賣する所のものは彼れの勞働力であるといふ事實を變化せしめるものではない。それは最早、勞働者としての當事者と資本家としての當事者との間に行はれる取引を意味するものではなく、商品購買者としての勞働者と商品販賣者としての資本家との間に行はれる所の取引たる第二の取引を意味するに過ぎない。然るに第一の取引に於いては、勞働者は商品（自己の勞働力）の販賣者であり、資本家は購買者である。勞働者が勞働力を賣つて生活資料を買ふのは、資本家が一つの商品を賣つて他の商品を買ふ場合と全く同じである。要するに、固定資本に對立した意味の流通資本なる性質を與へられるものは、勞働者の生活資料でもなく勞働力でもない。寧ろ此勞働力に投ぜられる生產資本價値部分こそ、その回轉の形態に依り斯かる性質を與へられるのであつて、この點は不變資本の若干の要素と共通する所であり、他の若干の要素と對立する所である。

勞働力及び生產機關に投ぜられる流通資本の價値は、生產物の完成に必要な期間に亙つてのみ前貸されるものであつて、固定資本の大小に依つて決定される生產規模の如何に從ひ、この點に種々なる差異が生じて來る。この價値は全部的に生產物に移轉されるものであり、隨つて又生產物の販賣に依り、全部的に流通內部から復歸して新たに前貸され得る。流通資本要素の依つて存在すべき勞働力及び生產機關は、完成生產物の生產及び販賣に必要なる限度に於いて流通の內部から引き上げられるものである。然し又それは再購買に依つて、卽ち貨幣形態から生產諸要素への再

轉化に依つて、絶えず代置され再新されねばならない。流通資本要素が一括して市場から引き上げられる量は、固定資本要素の場合に比してヨリ小であるが、然しそれだけ又ヨリ頻繁に引き上げられる事を要する。而して流通資本要素に投ぜられる資本の前貸は、ヨリ短小の期間に更新されるのである。斯かる不斷の更新は、流通資本要素の總價値を流通せしめる生産物の不斷の回轉に依つて媒介される。最後に又、流通資本要素なるものは、單に價値の方面からばかりではなく、また素材的形態に於いても、間斷なく各轉形の全循環を通過する。それは總えず商品から生産諸要素に再轉化されるのである。

勞働力はそれ自身の價値と同時に、又絶えず不拂勞働の體化たる餘剩價値をも生産物に附加する。かくしてこの餘剩價値も亦、絶えず生産物の他の價値要素と同樣に、完成生産物を通して流通せしめられ、貨幣に轉化されることとなるのである。けれども玆に先づ問題となることは資本價値の回轉であつて、資本價値と同時に回轉する所の餘剩價値は問題となるものでないから、餘剩價値については今のところ考慮しないこととする。

以上說く所に依つて左の結論が生じて來る。

（一）固定資本と流通資本との形態差異は、生産行程の內部に作用する資本價値又は生産資本の回轉の差異にのみ基くものである。而して資本回轉の差異は又、生産資本の種々なる要素が共價値を生産物に移轉する樣式の差異に基くものであつて、此等の要素が生産物價値の生産上に關與することの差異、若しくは價値增殖行程の上に演ずる特徵的な役割の如何に基くものではない。最後に價値が生産物に移轉される差異、隨つて又この價値が生産物に依つて流通せしめられ、生産物の各轉形に依り本來の現物形態を以つて更新される樣式の差異は、生産資本が依つて存在する素材形態の上の差異に基くものである。蓋し生産資本の一部は、個別的生産物の形成中全部的に消費されるが、他の部分はただ漸次的にのみ消費し盡されるからである。要するに、固定及び流通の兩部に分割され得るものは生産資本のみである。かくの如き對立は、產業資本の他の二つの存在樣式たる商品資本及び貨幣資本に於いては存在するものでない。また此等兩資本と生產資本との對立として存在するものでもない。それはただ生產資本にとつてのみ、又その內部にのみ存在するものである。貨幣資本及び商品資本は、それが如何に資本として作用し、また如何ほど活潑に流通しやうとも、生產資本の流動成分に轉化されない限り、固定資本に對立して流通資本となり得るものではない。然るに此等二つの資本形態は、流通の內部に在留するといふ事實に依つて、アダム・スミス以降の經濟學者たちは、後に述べる如く此等の資本をば流通資本なる範疇のもとに屬せしめて、生產資本の流動部分と混同するやうになつたのである。實際のところ、此等の資本は生產資本に對立させて考へれば流通資本たるものであるが、固定資本に對立した意味の流通資本ではないのである。

（二）固定資本部分の回轉、隨つて又それに必要なる回轉期間は、流通資本部分の數度の回轉を含む。固定資本が一回轉を遂げる時間を以つて、流通資本は數度回轉する。生產資本を組成する價値部分の一つは、それが依つて存在する所の生產機關が、生產物を完成し商品としてこれを生產行程から放出する期間內に消費し盡されることなき限りにおいてのみ、固定資本なる限定された形態を受けるのである。その價値の一部は舊來の使用價値形態に拘束されて居らねばならないのであるが、他の部分は完成生產物に依つて流通せしめられる。然るにこの生產物の流通は又同時に流通資本部分の總價値を流通せしめるのである。

（三）固定資本に投ぜられる生產資本價値部分は、固定資本を構成する生產機關部分の機能期間の全部に亙り一括して前貸される。卽ち資本家は、この價値を一括して流通の內部に投入するのである。けれども此價値は、固定資本が

斷片的に商品に附加する價値部分の實現を通して、ただ斷片的、漸次的にのみ流通の內部から引き上げられるものに過ぎない。他方に、生產資本の一成分を固定せしむる生產機關そのものは、一括的に流通の內部から引き上げられ、その機能期間の全部に亙つて生產行程に合體せしめられる。けれどもそれは、この期間內に同じ種類の新たなる生產機關を以つて代位されることを、再生產されることを必要とするものではなく、それ自身の更新要素を流通の內部から引き上げることなくして、流通の內部に投ぜらるべき商品の形成に對し大なり小なりの期間貢獻を續けて行くのである。隨つてまた此期間內に、資本家は斯かる生產機關のため前貸を更新する必要はないのである。最後に固定資本に投ぜられる資本價値は、それが依つて存在する生產機關の機能持續中に採る諸形態の循環を通過する。尤も之れは素材的に行はれるものではなく、ただ價値についてのみ、それもただ部分的、漸次的にのみ行はれるのである。語を換へて云へば、この資本價値の一部は、絕えず商品の價値部分として流通し、貨幣に轉化されるものであつて、この貨幣から更らに又本來の現物形態に再轉化されることを伴ふものではない。貨幣が斯く生產機關の現物形態に再轉化されることは、生產機關が全く消費し盡される時、卽ち生產機關の機能期間の終末に及んで初めて行はれる所である。

（四）流通資本の要素は絕えず生產行程に固定されてゐるものであつて、この點は固定資本の要素と異なる所はない。これは生產行程を連續的ならしめる上に必要な事である。けれども斯く固定された流通資本要素は絕えず現物形態を以つて（生產機關は同じ種類の新たなる生產機關に依り、また勞働力は不斷に更新される購買に依つて）更新されるのであるが、固定資本要素の方は存續中それ自身の更新を要することもない。原料及び助成材は、絕えず生產行程の內部に存在してゐる。けれどそれは常に、舊來の原料及び助成材が完成生產物の生產に消費された後に供給される同一種類の新たなる品として存在するのである。同樣に勞働力も亦絕えず生產行程內に存在してゐるが、それはただ其購買の不斷更新に依つてのみ行はれる所であつて、勞働者たる人の變更を伴ふ事が屢々ある。然るに建物や機械などは、反復的に進行する同一生產行程の內部に流通資本が反復的に回轉しつつある時、同一の實體を以つて作用を續けるのである。

（二）固定資本の成分、代置、修繕、蓄積

同一の投資における固定資本の個別的要素の存續期間は、種々樣々である。隨つて共回轉期間の上にも、種々なる差異が生ずることとなる。例へば一鐵道における軌條や、枕木や、土壘や、停車場建物や、橋梁や、隧道や、機關車や、車輛などの機能持續及び再生產期間は種々樣々であり、隨つて又これらの物の爲に前貸さるべき資本の回轉期間も種々異なつて來るのである。停車場建物、プラットフォーム、水槽、高架橋、隧道、切通、土陂など、約して言へばイギリスの鐵道に於いて『技術工作』[3]と稱せられてゐる一切の物は、多年に亙つて何等の更新をも必要とせざるものである。最も著しく磨滅するのは、軌道及び輪轉材料である。

近世鐵道の敷設については、その初め、鐵道の壽命は一世紀に亙るものであつて、軌條の磨滅は財政上及び實際上の凡ゆる目的から見て顧みるに足らざるほど極微なものであるとの見解が專ら行はれてゐた。卽ち佳良なる軌條の壽命は、一百年乃至一百五十年に亙るものと見られてゐたのである。この見解は、當時における最も卓絕した實地經驗ある技師たちに依つて涵養されたものである。然るに其後間もなく、軌條の壽命——それは機關車の速力や、列車の重量及び個數や、軌條そのものの厚みや、その他幾多の附帶事情に依つて左右されることは言ふ迄もない所であるが——は平均二十年以上に出づるものでないことが明かとなつた。しかのみならず、大交通の中心たる若干の停車場に

在つては、軌條は年々磨滅し盡されるのである。一八六七年の頃、銅製の軌條が採用され始めた。この軌條は鐵製の軌條に比して、約二倍の費用を要するものであつたが、その代り壽命は二倍以上であつた。枕木の壽命は、十二年乃至十五年であつた。車輛の磨滅については、客車よりも貨車の方が遙かに著しいことが明かとなつた。機關車の壽命は、一八六七年の計算に依れば十年乃至十二年であつた。

磨滅は先づ、使用それ自身に依つて生ぜしめられる。總じて軌條の磨滅は、列車の數に比例するものである（R・C・第一七六四五號）（二十二）。速力が高められた時、磨滅は速力の二乘以上の高率を以つて增進した。語を換へていへば列車の速力が二倍に高められた時、磨滅は四倍以上の率を以つて增進したのである（R・C・第一七〇四六號）。

（二十二）R・C・なる記號を附した引抄は『勅令鐵道委員報告、委員に對する證述要錄、兩院提出、ロンドン、一八六七年』の中から得たものである。この證述要錄に含まれる問答には番號が附してある。本文に掲げた所のものは卽ちそれである。

磨滅は更らに諸種の自然力の影響に依つても生ずる。例へば鐵道の枕木は、現實的の磨滅のみに基くものではなく、腐朽に依つても生ずるものである。『鐵道の維持に要する費用は、鐵道交通に伴ふ磨滅よりも寧ろ大氣に曝されてある木材や鐵や石造設備などの品質の如何に依つて、ヨリ多く左右されるものである。嚴多の一ケ月に依つて線路の被むる損害は、一ケ年間の鐵道交通に依つて被害する所よりも大である。（アール・ビー・ウォリアムズ述『鐵道路盤の維持に就いて』[5]。これは一八六七年秋、土木技師學會に於いて講述されたものである）。

最後に、他の總べての大產業における如く、鐵道に於いても亦、道德的の磨滅といふ事實が役割を演ずる。卽ち現在四萬磅に價するものと同一量の車輛及び機關車が、十年後には通常三萬磅で購買し得るものとなる。かくして此等の材料の使用價値は毫も減損しないとしても、その市場價格は二五パーセントの低減を來たすと見做さなければならなくなる（ラードナー著『鐵道經濟』）[6]。

『現在の形態における管橋は、もはや更新されないであらう』（なぜならば、今やヨリ優良な形態の管橋が存在してゐるからである）。『その通例の修繕や、個別的部分の除去及び組み換へなどは行はれ得るものではない』（ダブリュー・ビー・アダムズ著『道路及び軌條』ロンドン、一八六二年刊）。勞働要具なるものは、總じて產業の進步に依り絕えず革命されるものである。隨つて、それは本來の形態ではなく革命された形態を以つて代置されることとなる。一方に、固定資本が一定の現物形態を以つて放下され、而して此形態のもとに一定の平均期間に亙つて存續しなければならないといふ事實は、新たなる機械などの採用をただ漸次的にのみ行はしめる一原因となるものであり、隨つて又、改良勞働要具の迅速な普遍的採用を妨げる一原因ともなるものであるが、他方には競爭戰の結果、舊來の勞働要具がその自然的壽命を全うするに先だち、新たなる勞働要具に依つて代置されることを餘儀なくされるのである。而して此後ちの事實は、勞働要具の上に重要なる革命の生じた場合、特に著しく行はれるのである。勞働要具がその自然的壽命を全うするに先だち、斯く新たなる勞働要具を以つてこれを大なる社會的規模に更新することを餘儀なくせしむるものは、主として產業上の大變災たる恐慌である。

磨滅（道德的の磨滅は暫く措き）とは、固定資本が消費されたため其使用價値が失はれる平均程度に比例して、固定資本から漸次生產物に移讓される所の價値部分を謂ふのである。

この磨滅は一部的には、固定資本をして一定の平均壽命を有せしめるやうに行はれる。固定資本は斯かる平均壽命につき全部的に前貸されるのであつて、その經過後また全部的に更新されねばならない。生きた勞働要具（例へば馬）について言へば、その再生產期間は自然そのものに依つて規定され、それが勞働要具として有すべき平均壽命は自然

律に依つて決定されるのである。この期間を經過するや否や、消耗した勞働要具は新たなる勞働要具に依つて代置されねばならない。馬は斷片的に更新され得るものではなく、ただ他の馬に依つてのみ代置され得るのである。

他の固定資本要素に在つては、週期的又は部分的の更新が行はれ得る。この場合、我々は部分的又は週期的の代置といふ事を、營業の漸次的擴大といふ事から區別して考へなければならない。

固定資本の一部は、持續期間が相等しくなく各異なつた期間に斷片的に更新される所の同質的な諸要素から成るものである。例へば停車場における軌條の如きがそれである。蓋し停車場における軌條は他の線路場所におけるものよりもヨリ頻繁に代置されねばならぬからである。鐵道の枕木についても同樣である。ラードナーに依れば、一八五〇年代におけるベルギー諸停車場の枕木は、年々八パーセントづつ更新された。即ち十二年間にその全部が更新されたのである。この場合には、次の關係が行はれることとなる。即ち一定種類の固定資本について、例へば十年間一定の貨幣額が前貸される。けれども斯かる固定資本の中、價値が生產物の價値に移轉され、生產物の價値と共に貨幣に轉化される所の一定部分は、年々現物形態を以つて回收されるのであるが、同時に他の部分は本來の現物形態を以つて存在を續けてゆく。かくの如く一度に支出されて、ただ斷片的にのみ現物形態を以つて回收されるといふ事實こそ、この資本を固定資本として流通資本から區別する所のものである。

固定資本の他の部分は、不等の期間に消耗し隨つて回收されねばならぬ不等の諸要素から成るものである。この事實は特に、機械について行はれる所である。一つの固定資本を構成する樣々な要素の種々異なつた壽命について右に述べた事は、今また、此固定資本の一部として作用する一機械の種々異なつた成分の壽命についても言ひ得る所である。

部分的更新の進行中漸次に行はれる營業擴大については、左の事實を注意すべきである。——曩に述べた如く、固定資本なるものは現物形態を以つて生產行程の內部に作用を續けるとはいへ、平均磨滅に照應した其價値部分は生產物と共に流通し、貨幣に轉化されるものであつて、この資本が現物形態を以つて回收される時期に至る迄、更新上に充用すべき貨幣準備金の要素として存在するのである。かくの如き、貨幣に轉化された固定資本價値部分は、營業を擴大し、又は機械に能率增進的改善を施すことに役立ち得る。かくして大なり小なりの期間內に再生產、而も社會の見地からすれば規模の擴大された再生產が行はれるのである。即ち再生產の規模は、生產範圍の擴張される場合には外延的に擴大され、生產機關の能率が高まる場合には、內包的に擴大されることとなる。かくの如き規模の擴大された再生產は、蓄積（餘剩價値の資本化）に基くものではなく、固定資本體から分岐して貨幣形態に獨立した價値が、追加的な、或は少なくとも作用力のヨリ高い、同一種類の新たなる固定資本に再轉化される事に基因するものである。營業の經營が如何なる程度まで、又如何なる範圍に於いて、かくの如き規模擴大に堪へ得るか、隨つてこの方面に再放下する目的を以つて幾許の準備金を蓄積して置かねばならないか、又それが如何なる期間に行はれ得るかといふ事は一部的には營業經營の特殊の性質に依存することは言ふ迄もない。他方に又、如何なる程度まで現存機械に部分的の改良を施し得るかといふ事は、言ふ迄もなく改善の性質及び機械そのものの構造の如何に懸るのである。この事實が例へば鐵道敷設の如きに於いて、最初から如何に良く著眼されてゐるかと云ふ事は、アダムズの說く所に依つて明かである。彼れは曰く『全構造は蜂房式の原理に從はねばならないほどヨリに堅固な、最初から均齊的に仕組まれてゐる一切の構造は、始末に了へぬものである。かくの如き構造は、擴張の場合取り壞されてしまはねばならないからである』（前揭、第一二三頁）。

これは主として利用し得べき場所の如何に懸ることである。若干の建物に於いては、階層を追加することが出來る。

また他の建物に於いては、側面擴張が行はれる。この場合には、制生産の內部に於いて營業を漸次的に擴張せんとする場合、一方には多額の資金が浪費されると同時に、他方には斯種の幾多非實用的な側面擴張が（一部的には勞働力を犧牲にして）行はれる。蓋し資本制生産のもとに於いては、何事も社會的計畫に從つては行はれず、總べては限りなく異なつた事情に懸り、個々の資本家の運轉すべき資金その他の條件に懸るからである。かくして、生産力の大なる浪費が行はれることとなる。

貨幣準備金（換言すれば、貨幣に轉化された固定資本部分）の斯かる斷片的に進行する再投資は、農業に於いて最も容易に行はれる。蓋し農業に於いては、與へられたる廣さの生産範圍が最大の漸次的資本吸收に堪へ得るからである。これは、飼畜の如き自然的再生産が行はれる所に在つても同樣である。」

固定資本は其保存について特殊の費用を必要ならしむるものである。この保存の一部は、勞働行程そのものに依つて行はれる。固定資本は勞働行程の內部に作用しないとき損傷を來たすのである（第一卷二三八頁、及び五二一頁、使用しないために生ずる機械磨滅についての叙述を見よ）。されればイギリスの法律では、國內の習慣に從つて小作地が耕作されないとき、明文を以つて之れを消耗と見做すことになつてゐる（辯護士ダブリュー・エー・ホールヅウォース著『地主及借地人法』ロンドン、一八五七年刊、第九六頁）[8]。勞働行程上の使用に基く此保存は、生きた勞働に自然に具はつた無料の賜物である。而して勞働の生產機關保存力は、二樣に作用するものである。卽ち勞働は一方に、勞働材料の價値を保存する。この保存は、勞働材料の價値を生產物に移轉せしめることに依つて行はれるのである。他方に又、勞働は勞働要具の價値をも生產物に移轉せしめるものであるが、この方法以外にも尙生產行程における活動に依つて勞働要具の使用價値を保存し、以つて同時にその價値をも保存するものである。

固定資本の保存には、更らに積極的の勞働支出をも必要とする。機械は絕えず掃除されることを要する。卽ちそれを使用不能に陷らしめないために必要な追加勞働が支出されるのである。斯かる勞働は生產行程と不可分的に結合してゐる有害な天然的影響を防止することを目的とするものであつて、機械を最も嚴密な意味の使用可能狀態に維持する上に必要なものである。固定資本の平準的壽命なるものは、言ふ迄もなく、固定資本が此期間順當に作用し得るに必要な條件が充たされるといふ事實に基いて計算される。これ恰も、人の平均壽命を三十年とする計算の中には、彼れが自ら其身體を洗ひ淸めるといふ事實が條件として含まれる如くである。機械に含まれる勞働の再生產も、玆には問題とならない。玆に問題となるのは、機械の使用上に必要な不斷の追加勞働である。機械に依つて爲される勞働ではなく、機械の上に加へられる勞働が問題となるのであつて、この勞働の立場から見れば、機械は生產能因となるものではなく寧ろ原料に相當するものである。斯かる勞働に支出される資本は、生產物を生ぜしむる嚴密の意味の勞働行程に入るものではないとはいへ、それでも流通資本の一部となるのである。この勞働は絕えず生產上に支出されねばならない。隨つて又、その價値は絕えず生產物の價値に依つて回收されることを要する。斯種の勞働に支出される資本は、一般的經費に充用すべき流通資本分の部類に屬するものであつて、年平均計算に從つて價値生產物の上に配分されるのである。曩にも述べた如く、嚴密の意味の產業に於いては、かくの如き機械掃除の勞働は勞働者に依つて休息中無料でなされるものであり、かくして又しば〳〵生產行程そのものの進行中にもなされることとなるのであつて、生產行程中に生ずる災厄の大半は斯かる勞働に基くものである。この勞働は、生產物の價格に算入されるものではない。この意味に於いて、消費者はこれを無料で與へられる譯である。他方に資本家も亦、かくして機械の保存費を無料で與へられることとなる。勞働者は已れの一身を以つて此費用を支拂ふ。而してこの事實こそ、機械に對する勞働

者の法律上の權利を實際に構成し、且つブルヂョア的な法律上の立場から見ても勞働者を機械の共同所有者たらしめる所の、資本の自己保存神祕の一つとなつてゐるのである。されど掃除の際、機械を生產行程から分離することを要する所の、隨つて休息中窃かに其掃除を行ふことが不能となる所の種々なる生產部門（例へば機關車の如き）に於いては、斯かる保存勞働は經營費に算入されて流通資本の要素となるのである。機關車は高々三日間も使用された後、これを車庫に入れて掃除する。汽鑵を損傷せずに洗ひ拔くには、先づこれを冷却せしめなければならないのである。（R・C・第一七八二三號）。

嚴密の意味の修繕卽ち補綴勞働には、資本及び勞働の支出を要する、この方面に要する資本及び勞働は、最初に前貸された資本の中に含まれるものではなく、隨つて必ずしも固定資本の漸次的な價値回收に依つて回復され補償され得るものとは限らないのである。いま、固定資本の價値が一萬磅に等しく、その總壽命が十年に等しき場合を例に採つて見るに、十年後に至り全部貨幣に轉化される此一萬磅は、本來の投資價値に取つて代るのみであつて、その間修繕のため新たに追加された資本又は勞働に取つて代はるものではない。斯かる支出は、一時に前貸されず寧ろ必要に應じて斷片的に前貸される所の、追加的の價値成分を代表するものであつて、その種々異なつた前貸期間は當然に偶然的のものとなるのである。如何なる固定資本も、かくの如き、後に至つて勞働要具(10)及び勞働力の形で少量づつ追加される所の資本支出を必要とするものである。

機械などの個々の部分に生ずべき損傷は、當然に偶然的のものであり、隨つてこれがため必要となる諸種の修繕も亦同樣に偶然的のものである。然るに此等の修繕の中から、多かれ少なかれ固定した性質を有し而して固定資本の各異なつた年齡期に屬する二種の修繕勞働が分岐して來る。其一つは幼少期の故障に關するものであり、他は中年以後に生ずる所の遙かに數多き故障に關するものである。例へば一つの機械は、完全なる構造を以つて生產行程に入るがこれを現實的に使用するとき諸種の缺點が現はれて來るといふ場合があり得る。他方に又、機械が中年期を經過すればする程、卽ちその通例の磨滅が累積されて、組成材料が消耗し老衰すればする程、機械を其平均壽命の最後まで保存するに必要な修繕勞働はます〳〵數多く且つ顯著なものとなつて來る。これ恰も、人が平均壽命を全うせずして死亡することを防ぐには、血氣盛んな青年の場合よりも老人にヨリ多額の醫藥支出を要する如くである。かくの如く修繕勞働なるものは元來偶然的性質のものであるにも拘らず、それが固定資本の各異なつた年齡期に配分される程度は不等となるのである。

この事實に依り、また機械修繕勞働の他の偶然的性質に依つても、次の結論が生じて來る。一方に、修繕勞働に伴ふ勞働力及び勞働要具についての現實的支出は、この勞働を必要ならしむる事情そのものと同樣に偶然的のものである。必要なる修繕の量は、固定資本の各異なつた年齡期に對し異なつた比例を以つて配分される。他方に固定資本の平均壽命を計算するに當つては、一部的にはその掃除（場所の掃除をも含む）に依り、一部的には又必要の場合與へられる修繕に依つて、この資本が絕えず使用可能の狀態に維持されるといふ事實を假定するものである。固定資本の磨滅に依る價値移轉は、固定資本の平均壽命を基礎として計算される。而して此平均壽命そのものは又、固定資本の維持に必要な追加資本が絕えず前貸されるといふ事實を基礎として計算されるのである。

他方に、資本及び勞働の斯かる追加支出に依つて附け加へられる價値は、その支出が現實的に與へられると同時に商品の價格に入り得るものでないことも明かである。例へば、今週、一紡績業者の使用する機械の齒車が破損し、又は調革が裂斷した場合、彼れは斯かる理由に依つて、前週販賣したよりも高價に其絲を販賣し得るものではない。紡

續業の一般的費用は、個別的の一工場に生ずる斯くの如き災厄に依つて變化を受けることはないのである。他の總べての價値決定に於ける如く、この場合にも亦平均が決定を與へる。一定の營業部門に放下される固定資本の平均的生涯の中に生ずる斯種の災厄と、その爲に必要となる保存及修繕上の勞働との平均範圍は、經驗に依つて知られるものである。かくの如き平均支出は、平均的の生涯に亙つて配分される。それは按分して生産物の價格に追加されるものであつて、生産物の販賣に依つて回收されることとなるのである。

かくして回收される追加資本は、その支出の方法が不規則的であるとはいへ、流通資本の部類に屬するものである。機械に故障の生ずる毎に、卽時これを修理することは極めて重要な問題であるから、各工場には嚴密の意味の職工以外に尙ほ他の人員たる技師、指物師、機械師、錠工等が使用されてゐるのである。彼等の賃銀は可變資本の一部となり、彼等の勞働の價値は生産物の上に配分される。

他方に又、生産機關のために必要な支出は上述の如き平均計算に依つて決定され、この計算に從つて絶えず生産物の價値部分を構成する。尤もこの支出は、事實上、不規則的な各時期に前貸されるものであり、隨つて勢ひ不規則的な各時期に生産物又は固定資本に移轉されることとなる。かくの如き、嚴密の意味の修繕を目的として放下される資本は、多くの點に於いて一種特別の資本——流通資本の部類にも固定資本の部類にも加へられ得ないが、經常費の一部たる意味に於いては寧ろ前者に屬する所の——を構成するものである。

簿記の對象たる物件の現實的關係は、簿記の方法の如何に依つて何等の變化をも受けるものでないことは、言ふ迄もない。けれども玆に注意を要することは、修繕上の費用をば左の如くに固定資本の現實的磨滅と一括して計算することが、多くの營業部門における習慣となつてゐるといふ一事である。今、前貸固定資本は一萬磅、その壽命は十五年であるとすれば、この場合一年間の磨滅は六百六十六磅三分の二となる。然るに固定資本の磨滅は、十年についてのみ計算される。換言すれば年々六百六十六磅三分の二の代りに一千磅なる額が固定資本の磨滅分として生産品の價格に追加される。かくして三百三十三磅三分の一といふ額が、修繕勞働その他の爲に準備されることとなる（玆に揭ぐる十及び十五なる數字は、ただ一例として採用したものに過ぎない）。つまり固定資本を十五年間持續せしむるには、平均して之れだけの額が修繕の爲に支出される譯である。斯かる計算は、勿論、固定資本と修繕に支出される追加資本とが各異なつた範疇に屬することを妨げるものではない。この計算に基いて、例へば汽船の保存及び再生産に必要な最低豫算費用は年々一五パーセントに上り、隨つて再生産期間は六年三分の二に等しくなるものと假定されてゐるのである。一八六〇年にイギリスの政府は此費用として年々一六パーセントの額をペニンスラー・アンド・オリエンタル會社に辨償してゐた。卽ち六年三分の一なる再生産期間が生ずることとなつた譯である。鐵道における機關車の平均壽命は十年である。けれども修繕を計算に入れて考へると、磨滅は一二パーセント半に上り、壽命は八年に低減する。客車及び貨車の磨滅は九パーセントと見積られてゐる。卽ちその壽命は十一年九分の一となるのである。

所有者にとつては固定資本であり、且つ固定資本として賃貸される所の家屋その他の物件の賃借契約については、時間や、天然の影響や、通例の使用それ自身などに基く順當な磨滅と、家屋を順當に利用しつつ通例の壽命を維持せしめるため時々必要となる修繕との間に、立法上區別が認められることとなつた。通常、前者は所有者の負擔に歸し、後者は賃借人の負擔に歸するものである。修繕は又、通例の修繕と實體的修繕との二種に區別される。實體的修繕とは固定資本の現物形態を部分的に更新することであつて、これも亦、契約上明文を以つて反對の規定を與へざる限り、所有者の負擔に歸するものである。これについて、例へばイギリスの法律は次の如き規定を與へてゐる。

『建物の實體的修繕を伴はずして可能である限り、賃借人は年々これを風雨に耐へ得るやうに保存し、總じてただ通例の部類に屬するものとして知られてゐる修繕のみを處理するの義務あるに止まる。而して此點についても、建物が賃借人の占有に歸する當時における年齡段階及び一般狀態を考慮に入れなければならない。なぜならば、賃借人は古き材料又は磨滅し盡した材料に代ふるに、新たなる材料を以つてするの義務なく、また時の經過と通例の使用とに伴ふ不可避的な價値消滅を賠償するの義務を負ふものではないからである』(ホールヅウォース著『地主及借地人法』第九〇——九一頁)。

天變地異(火災、洪水等)に基く破壞に關する保險は、磨滅の回復や保存及び修繕上の勞働とは全く異なるものである。それは餘剩價値の中から補償されるものであつて、餘剩價値からの控除を意味するものとなるのである。或は又、全社會の立場から觀察すれば次の如く言ひ得る。即ち偶然と自然力とに基く異常なる破壞を補償すべき生產機關を支配するには、不斷の過剩生產が、換言すれば人口增殖の問題は暫く措き、現存してゐる富の單純な回收及び再生產に必要であるよりも大規模の生產が行はれなければならない。

實際のところ、かくの如き補償に必要な資本の中、貨幣準備金として存在する部分は極小のものであつて、その最重要な部分は、一部的には現實的の擴張を意味し、一部的には又固定資本を造る生產部門の通例の範圍に屬する所の生產規模それ自身の擴大として存在するものである。かくて例へば、一つの機械製造工場は、顧客の工場が年々擴大されるといふ事實、竝びに其一部が絕えず全部的又は一部的の再生產を要するといふ事實を見込んで經營されるのである。

『社會的平均に依る磨滅竝びに修繕費用の決定については、同一の條件を以つて同一の生產部門に投ぜられる同一量の諸資本間にも必然的に大なる差異が生じて來る。實地の上に於いて、機械其他の物の持續は一つの資本家にとつては平均壽命以上に出づるが、他の資本家に在つては平均壽命に達せずして磨滅してしまふ。かくて前者に必要な修繕費用は平均以上に出づるのが、後者の必要とする所は平均以下に止まる等の結果が生ずるのである。けれども磨滅及び修繕費用に基く商品の價格追加は、いづれの場合にも同一であつて、平均に依つて決定されるのである。隨つて一方の資本家は、この價格追加に依つて自己が現實的に追加した以上の額を受け、他方の資本家はそれ以下の額を受けることとなる。この事實は、勞働力の搾取程度が同一である場合にも同一の營業部門に屬する異なつた資本家たちの利得を不等ならしめる他の總べての事情と同樣に、餘剩價値の眞の性質についての理解を困難ならしめることに與つて力あるものである。

嚴密の意味の修繕と再生產、換言すれば保存費用と更新費用との間の限界は、多かれ少なかれ流動的のものである。そこで例へば鐵道方面に於いて、一定の支出が修繕用のものであるか、再生產用のものであるか、即ち經營費中から支辨さるべきものか、基本資金中から支辨さるべきものかとの、不斷の論爭が生ずるに至つたのである。修繕上の支出をば收入計算に繰り入れないで資本計算に繰り入れるといふ事は、鐵道經營者が人爲的に其配當を釣り上げる周知の手段となつてゐる。然し此點についても、經驗は既に最も重要な手掛りを與へた。例へば鐵道の幼少期に與へられる追加勞働は『修繕の部類に屬するものではなく、鐵道敷設上の本質的組成分と見做すべきであり、隨つて資本計算に繰り入るべきものである。なぜならば、それは磨滅又は交通上の通例の作用に基くものではなく、鐵道敷設上の本來的な不可避的な不完全に基因するからである』(ラードナー前揭、第四〇頁)。他方に於いて『年々の收入を齎らす取引に必然隨伴する所の價値消滅をば、それが現實に於いて支出されると否とに拘らず此收入に繰り入れる事は、唯

一の正當な方法である』(『マネ・マーケット・レヴュー』誌一八六七年刊所載、カレドニア鐵道調査委員フィツモーリス大佐所論)(10)。

固定資本の再生産と保存とを分離して考へることは、農業に在つては、少くとも農業上尚いまだ蒸氣を應用せざる所に在つては、實際上不可能にして且つ意味のないことである。『諸器具(凡ゆる種類の農具其他の作業要具及び家具類)の供給が過大ではないにしても十分である場合、此等の器具の年々の磨滅及び保存を、現存事情の差異に從つて大體購買資本の平均一五乃至二〇パーセントと見積ることが習慣となつてゐる』(キルヒホフ著『農業經營學提要』ベルリン、一八六二年刊、第一三七頁)(11)。

鐵道の車輛及び機關車について、修繕と再生産とを分離して考へる事は全く不可能である。『我々の會社では、車輛及び機關車を數の上で維持することにしてゐる。幾臺の機關車があるにしても、存在するだけの臺數は之れを維持してゆくのである。時經るうちに一臺の機關車が使用不可能となつて、新たに造り換へた方が有利となれば、收入を犧牲として造り換へることにするのであるが、斯かる場合には舊來の機關車から殘される材料の價値は、言ふまでもなく收入の貸方に記入されるのである。……かくして殘される材料は、常に可なりな量に達してゐる。……車輪や、車軸や、汽鑵など、約して言へば舊來の機關車中の可なりな部分が殘されることとなるのである』(グレート・ヴェスターン鐵道會社取締役會長ティー・グーチ證述、R・C・第一七三二七——二九號)。

『修繕は更新を意味する。「再生産」などといふ言葉は私にとつては存在しないのである。……一度び車輛なり機關車なりを購買した以上、鐵道會社は其修繕を怠らず永久に之れを使用し得るものとしなければならない(第一七七八四號)。我々は機關車の費用を一英哩當り八片半と見積つてゐる。この八片半に依つて、我々は機關車を永久に保存するのである。我々は機關車を更新する。新たに一臺の機關車を購買しようとすれば、必要以上の貨幣を支出することとなるのである。……使用不可能となつた機關車に於いても、尚ほ、使用し得べき狀態に在る若干の車輪や、車軸や、其他の斷片が常に見出され得るのであつて、我々は此等の物に依つて全く新たなるものと同樣な機關車をヨリ價安く造ることが出來るのである。現在私は毎週新たなる一機關車を生産してゐるが、それは新規のものと些かも選ぶ所はない。なぜならば、その汽鑵や、シリンダーや、車臺などは新たに造られたものであるから』(グレート・ノーサーン鐵道會社機關車監督アーチバルド・ステウロック證述、R・C・一八六七年刊、第一七八二三號)(12)。

車輛についても同樣である。『時經るうちに、機關車及び車輛の在庫品は絶えず更新される。或時は新たなる車輪が据ゑつけられ、或時は又、新たなる車臺が造られる。列車の運動の條件となつてゐる最も磨滅し易い諸部分は、漸次に更新される。かくして機關車及び車輛は幾多の修繕を加へられ、遂には舊來の材料の痕跡を、毫も止めないやうになるのである。……舊來の車輛及び機關車が最早修繕し得ないやうになつた場合にも、その斷片的部分は尚ほ加工して他の鐵道用品に造り換へ得るのであつて、鐵道から全然消滅し去るといふことは決してないのである。かくの如く、車輛及び機關車は不斷に再生産されつつあるものであり、線路にとつては一括的に爲されねばならぬ事が、車輛及び機關車にとつては年々次第に爲されて行くのである。車輛及び機關車は不斷性のものであつて、絶えず若返りつつあるのである』(ラードナー前揭、第一一六頁)。

ラードナーが玆に鐵道を以つて說明してゐる行程は、個々の工場には通用し得るものではないが、一生産部門全體の內部、更らに進んでは社會的規模の上に立つ總生産の內部に、修繕と錯交して間斷なく行はれる固定資本の部分的再生産の例解とするには適してゐるのである

老練な經營者が修繕及び再生產なる概念を如何なる範圍まで、配當獲得の目的に細工し得るかといふ事について、玆に一つの證左を揭げる。曩に引抄したアール・ビー・ウキリアムズの講演に依れば、イギリスの種々なる鐵道會社は線路や建物の修繕及び保存に必要な費用として左の金額を收入計算に繰り入れた。（これは何年間かの平均を採つたもので、線路一英哩當り年所要額を示したものである）。

ロンドン・アンド・ノースウエスターン鐵道	三七〇磅
ミツトランド鐵道	二二五磅
ロンドン・アンド・サウスウエスターン鐵道	二五七磅
グレート・ノーサーン鐵道	三六〇磅
ランカシーア・アンド・ヨークシーア鐵道	三七七磅
サウス・イースターン鐵道	二六三磅
ブライントン鐵道	二六六磅
マンチエスター・アンド・シエフイールド鐵道	二〇〇磅

斯かる差異の中、現實における支出の差に基く分は極めて微々たるものであつて、その殆んど全部は、計算方法の差（卽ち問題の支出額が資本計算に繰り入れられるか、それとも收入計算に繰り入れられるかの相違）に基因するものである。ウキリアムズは端的に曰く、『收入計算に少額を繰り入れるのは、かくする事が好配當を得る上に必要であるからであり、多額を繰り入れるのは、それに耐へ得べきヨリ大なる收入が存在してゐる結果である』と。

若干の場合に在つては、磨滅の程度隨つて又その回復に要する費用は實際上極微のものとなり、これがため修繕上の費用のみが計算に入ることとなる。鐵道の『技術工作』について左にラードナーの述ぶる所は、總じて運河、船渠、鐵橋及石橋等の如き一切の固定構造物についても言ひ得る事である。——『長期の時間が固定構造物の上に及ぼす影響に基因する所の磨滅は、短期間について見るならば殆んど識別し難き程度のものである。それにも拘らず、長期間（例へば數世紀）の經過後に於いては、最も固定的な構造物についても、斯かる影響の結果、一部的又は全部的の更新を要することとなるであらう。斯種の識別し難き磨滅と、鐵道の他の部分に生ずるヨリ識別し易き磨滅との差は、天體の緩漫運動と週期運動との差に比すべきものである。鐵道における棧橋や、隧道や、高架橋などの如き大量構造物の上に及ぼす時間の影響は、緩漫磨滅と稱し得るものの例解となるものであり、また短期間内における修繕に依つて補償される所のヨリ急激にして識別し易き價値消滅は、週期變化に相當するものである。最も固定的な構造物に在つても、その外面は絶えず偶然的の損傷を受けるものであるが、斯くの如き被害の補償も亦、修繕費中に包括されるのである。然し斯種の修繕は暫く問題外に置くとするも、此等の構造物は年齡の影響を受けない譯には行かないのであつて、遂には新たなる築造を必要とするの時期に達することを免れないのである。財政上竝びに經濟上の見地からすれば、斯かる時期は事實上餘りに遠き將來に横はつてゐるので、實地の上の考慮には入らないこととなるであらう』（ラードナー前揭、第三八及三九頁）。

以上の事實は、前貸資本を磨滅に應じて漸次的に回收することを要せず、ただ保存及び修繕上の年平均費用のみを生產物の價格に移轉すれば足る所の、斯種の凡ゆる緩漫持續性構造物について言ひ得る所である。

固定資本の磨滅を回復するために回流して來る貨幣の大部分が、一年、甚しきはヨリ短小の期間を以つて、その現物形態に再轉化されることは、我々の既に見た所であるが、それにも拘らず各資本家は、數年を經過した後初めて一

括的に再生産さるべき時期に達し、かくして全部的に代置さるべきものとなる固定資本部分の爲に、償却基金を準備して置く必要がある。固定資本の中には、その構性上斷片的に行はるべき再生産を不可能とする部分が少なからず在る。尙また、價値の消滅した部分の補充として絶えず新たなる部分を追加するといふ風に、再生産が少しづつ行はれる所に在つては、かくの如き代置の實現され得る以前豫め一定量の貨幣蓄積を準備して置くことが必要になつて來る。斯かる貨幣蓄積の大小は生産部門の特殊性質の如何に懸るものであつて、この目的の爲には如何なる貨幣額でも十分であるといふ譯ではなく、一定量の貨幣額を必要とするのである。

若し以上の事實をば、後に說く信用制度を顧慮するところなく、單純なる貨幣流通が行はれるとの假定のもとにのみ考察するものとすれば、この運動の機構は、結局次の如くになる。——一社會に存在する貨幣の一部分が常に退藏貨幣として休用狀態に置かれ、他の部分が流通要具たる機能、又は直接流通しつつある貨幣の直接的準備金たる機能を盡すものとすれば、斯かる場合、貨幣總量が退藏貨幣と流通要具とに分割される比例は絶えず變動するものであることは、第一卷（第三章、第三節a）に示したところである。所で現在の場合について考へて見るに、大資本家の手に退藏貨幣として蓄積さるべき多額の貨幣は、固定資本を購買する際一括して流通內に投ぜられるものであつて、この貨幣は又更らに流通要具及び退藏貨幣として社會に配分されることとなる。固定資本の磨滅の程度に準じて其價値をば起點に回流せしむる償却基金の助けに依り、流通貨幣の一部は、曩に固定資本を購買するため退藏貨幣を流通要具に轉化して我が手から遠ざからしめた同じ資本家の許に歸り、彼れの手の中で大なり小なりの期間再び退藏貨幣を形成することとなるのである。卽ち社會に存在する退藏貨幣の配分が間斷なく變化するわけであつて、この貨幣は或時は流通要具として作用し、或時は又退藏貨幣として流通貨幣量の中から分離されるのである。大產業及び資本制生產の發達と必然に竝行する信用制度の發達に伴ひ、貨幣はもはや退藏貨幣としては作用せず、寧ろ資本として、だが然し貨幣所有者の手に在ることなく、貨幣利用者たる他の資本家の手に在る所の資本として、作用するやうになるのである。

第九章　前貸資本の總回轉、回轉循環

生産資本の固定部分と流通部分とは、相異なつた様式を以つて相異なつた時期に回轉するものであり、而して同一の營業における固定資本の各異なつた部分も亦、その壽命隨つて再生産期間の如何に從ひ、種々異なつた回轉期間を有するに至ることは、曩に述べた通りである。（同一の營業における流通資本の各異なつた部分の回轉の現實的又は外觀的差異については、本章末第六項を見よ）。

（一）前貸資本の總回轉は、此資本の種々異なつた組成分の平均回轉である。これが計算方法については後に尙ほ述べる。相異なつた期間が問題である限り、其平均を計算するといふ以上に單純なる事なきは論を俟たない。けれども（二）これに就いては、單に量的の區別のみでなく、また質的の區別も問題となるのである。

生産行程に入る流通資本は、その價値の全部を生産物に移轉する。隨つて生産行程を間斷なく進行せしめようとすれば、生産物の販賣に依り此流通資本が絶えず現物形態を以つて再生産されることを要するのである。生産行程に入る固定資本の方は、その價値の一部（磨滅分に相當せる）のみを生産物に移轉するに過ぎない。それは磨滅を受けても尙、生産行程の内部に作用を續けるのである。隨つて此資本は、大なり小なりの期間を經過した後に、現物形態を以つて再生産されれば可いのであつて、如何なる場合にも流通資本の如く頻繁に再生産されることはないのである。かくの如き回復の必要、換言すれば再生産の期間は、單に固定資本の各異なつた組成分にとつて量的に異なるのみではなく、曩にも述べた如くヨリ永續的な多年性固定資本の一部は、一年又はヨリ短小な期間に再生産され、現物形態を以つて舊來の固定資本に附加せられ得るものであるが、他の構性を有する固定資本に在つては、其生涯の終末に達した後初めて一括的に再生産が行はれ得るのである。

そこで、固定資本の各異なつた部分の特殊回轉をば同質の回轉形態に約元して、ただ量的にのみ、即ち持續期間の點に於いてのみ、差異あるものとしてしまふことが必要になつて來る。

斯樣な分量上の同一性は、連續的生産行程の形態であるP…P'を起點に採る場合には與へられるものでない。なぜならば、Pの一定要素は絶えず現物形態を以つて再生産されねばならぬのに、他の要素はさうではないからである。けれども C……C' なる形態に於いては、この同一性が與へられることとなる。今、一萬磅の價値ある一機械を例に採らう。この機械は十年間持續するものと假定する。然る場合、この價値の十分の一、即ち一千磅なる額が年々貨幣に再轉化されるわけである。この一千磅なる額は、一年間に貨幣資本から生産資本及び商品資本に轉化され、斯かる形態を通して更らに貨幣に再轉化される。即ちそれは最初の貨幣形態に復歸するのであつて、この點に於いては、同一見地のもとに考察した流通資本と選ぶ所はないのである。而してこの場合、一千磅なる貨幣資本が、一年の終末に至り更らに機械の現物形態に再轉化されるか否かといふ問題は關係する所がないのである。されば前貸生産資本の總回轉を計算するに當り、我々は此資本の凡ゆる要素をば貨幣形態に固定せしめ、かくして貨幣形態への復歸が回轉の終結となるやうにするのである。價値はつねに——その貨幣形態が、計算貨幣なる形態に過ぎない連續的生産行程の場合に於いても——貨幣形態を以つて前貸されるものと見る。かくして我々は、平均を算出し得るやうになるのである。

（三）前貸生産資本の極めて大部分が、多年に亙つた循環を包括する所の再生産（隨つて又回轉）期間を有する固定

資本から成る場合にも、尙ほ一年間に回轉する資本價値は、同一年間に反復回轉する流通資本の作用に依つて前貸資本の總價値よりも大なるを得るといふ結論が生じて來る。

今、固定資本は八萬磅、その再生產期間は十年に等しく、隨つて此資本の中年々八千磅なる額が貨幣形態に復歸するものと假定する。換言すれば、此資本が年々回轉の十分の一を通過するものと假定する、更らに流通資本は二萬磅であつて、それが年に五度回轉するものと假定する。然る場合、總資本は十萬磅、一年間の回轉固定資本は八千磅、回轉流通資本は 5×2000 卽ち十萬磅であつて、一年間に回轉する資本は十萬八千磅となり、前貸資本よりも八千磅だけ多くなる。卽ち資本に對する $1+\frac{2}{25}$ といふ額が回轉したこととなるのである。

（四）かくの如く、前貸資本の價値回轉は、此資本の現實的な再生產期間、又はその諸成分の現實的な回轉期間から分離されるわけである。例へば四千磅なる一資本が年に五度回轉するとせよ。然る場合、回轉資本は 5×1000 卽ち二萬磅となる。けれども回轉末毎に復歸して新たに前貸されるものは、最初に前貸された四千磅といふ資本であつて、その大さは此資本が新たに資本として作用する回轉期間の數に依つて、變化を受くるものではない。（餘剩價値の事は暫く問題外に置く）。

かくて右の（三）に揭げた例解の假定に依れば、一年末には、（a）資本家が新たに流通資本分として放下する所の二萬磅なる價値額と、（b）磨滅に依つて前貸固定資本の價値から離れ去つた八千磅なる額とが、彼れの手に復歸することとなる。同時に、從前におけると同一の固定資本が生產行程の內部に存續する。尤も其價値は、八萬磅から七萬二千磅に低減するのである。されば前貸固定資本が其壽命を全うし、生產物形成上竝びに價値形成上の機能を盡し了へて代置されねばならなくなる迄には、生產行程が尙ほ九年間持續することを要する。かくの如く、前貸資本價値は諸回轉の一循環（現例に就いて言へば、十年間に亙る諸回轉の一循環）を通過せねばならぬのであつて、この循環は充用固定資本の壽命、隨つて再生產期間又は回轉期間に依つて決定されるのである。

要するに、資本制生產方法の發達に伴ひ充用固定資本の價値量と壽命とが增進するにつれて、特殊の各投資部面における產業竝びに產業資本の一生は多年（例へば平均して十年）に亙つたものとなる。而して此一生は、一方に、固定資本の發達に依つて延長するものであるが、他方に、それまた資本制生產方法の發達につれて絕えず增進する所の、生產機關の間斷なき革命に依つて短縮するのである。かくて資本制生產方法の發達は、生產機關の變化と、生產機關が道德的の磨滅を蒙むる結果、その物質的生涯を全うする久しき以前に絕えずそれを代置せねばならない必要とを伴ふものであつて、大產業の最重要部門について見るに、この生命循環は今や平均十ケ年に亙るものと假定することが出來る。然し玆には、斯かる一定の數字が問題となるのではない。

兎にかくそれだけの事實は明かである。卽ち何年かを包括するその固定資本部分のために通過することを餘儀なくされる所の——相互關聯した諸回轉の斯くの如き循環——資本が度なる激動と、恐慌との相次いで生ずべき各時期を含む週期的恐慌の物質的基礎が生じて來る。資本の放下期間が、場所的にも時間的にも極めて異なることは事實である。けれども恐慌は常に、大規模なる新投資の起點となる。隨つて又それは、社會全體について見るならば、多かれ少なかれ、次に來るべき回轉循環の新たなる物質的基礎となるのである（二十二）。

（二十二）『都市に於ける生產は日の循環に結合されてゐるが、農村における生產は年の循環に結合されてゐる』（アダム・ゲー・ミュラー著『政治學要義』ベルリン、一八〇九年刊第二卷、第一七八頁）(1)。これは工業及農業に關する浪漫派の素朴な見解

である。

（五）回轉の計算方法については、アメリカの一經濟學者の言ふ所を聽かう。

『若干の營業部門に於いては、前貸資本の全部は一年間に數度の回轉又は流通を遂げる。また他の營業諸部門に於いては、前貸資本の一部は一年に一回以上回轉するが自餘の部分はそれほど頻繁に回轉するものではない。全資本が資本家の手を通過し又は一回の回轉を遂げるに必要な平均期間こそ、資本家が其利潤を計算する所の基礎となるのである。今、一定の營業に從事する一資本家が、その資本の二分の一を十年毎に更新すべき道具及び其他の物の購入に投ずるものとし、更らに殘餘の四分の一を賃銀の支拂と原料の購入とに投じて、それが一年に二度回轉するものと假定しよう。彼れの年支出は次の如くになるであらう。

十年間に　50,000/2　＝　二五、〇〇〇弗、卽ち一年間に　二、五〇〇弗
二年間に　50,000/4　＝　一二、五〇〇弗、卽ち一年間に　一二五〇弗
半年間に　50,000/4　＝　一二、五〇〇弗、卽ち一年間に　二五、〇〇〇弗
一年間の合計　三三、七五〇弗

『かくて、彼れの全資本が一回の回轉をなす平均期間は十六ケ月となる。……更らにいま一つの例を採らう。五萬弗なる總資本の四分の一が十年毎に流通し、他の四分の一が一年毎に流通し、殘餘の二分の一が一年に二回流通するものとする。然る場合には、次の如き年支出が生ずることとなるであらう。

12,500/10　＝　一、二五〇弗
12,500　＝　一二、五〇〇弗
25,000 × 2 ＝ 五〇、〇〇〇弗
一年間の回轉額合計　六三、七五〇弗』

（スクローブ著『經濟學』、アロンゾ・ポッター編、ニュー・ヨーク、一八四一年刊、第一四一及一四二頁）[3]。

（六）資本の種々異なつた部分の回轉における、現實的竝びに外觀的の差異。スクローブは又同じ場所で左の如く述べてゐる。――『製造業者なり、地主なり、商人なりが賃銀の支拂に投ずる資本は、最も急速に流通するものである。若し毎週賃銀を支拂ふものとすれば、斯かる資本は販賣なり送狀に對する支拂なりに基く一週間の收入に依つて、恐らく毎週一回の回轉を遂げることとなるであらう。原料及び完成品の購入に投ずる資本は、かく急速に流通するものではない。それは資本家が――等一の信用條件を以つて賣買するといふ假定のもとに――甲品を購買して乙品を販賣する迄の間に經過する期間の如何に從つて、一年に二度若しくは三度回轉し得るのである。道具及び機械の購買に投ずる資本の流通は、尙ほ一層緩漫である。それは恐らく、五年又は十年毎に一回の平均を以つて回轉するからであり、換言すれば消費され更新されるからである。尤も一列の諸作業を經るのみで使用し盡される道具も少なからず存在してゐるのである。諸種の建物、例へば工場や、店舖や、保藏室や、倉庫や、納屋や、街路や、澁水設備などに投ずる資本は、殆んど識別し得ざるほど緩漫に流通する。されど此等の構造物も亦、それが生產上に役立つ限り他の生產機關と同樣に磨滅し去るものであつて、生產者をして其作業を持續せしめ得る爲には結局更新されねばならぬものであることは論を俟たない。ただ他の生產機關よりも緩漫に消費され再生產されるといふ點が異なるのみである。……此等の構造物に投ずる資本は、恐らく二十年又は五十年毎に回轉するであらう。』

以上の叙述に於いて、スクローブは、支拂條件と信用事情とが個々の資本家にとつて、彼等の流通資本の一定部分の流動の上に齎らす差異をば、資本の性質に基く諸回轉と混同してゐる。彼れは曰く、勞働なるものは、販賣又は送狀に對する支拂に基く週收入を以つて毎週支拂はれねばならないと。これに就いて第一に注意すべきことは、支拂期限の長短、換言すれば勞働者が資本家に賃銀支拂上の信用を與へねばならぬ期間の長短に從ひ、卽ちそれが一週であるか、一ケ月であるか、三ケ月であるか、半年であるか等に從つて、勞銀それ自身に關しても、諸種の區別が生じて來るといふ事實である。この問題については、曩に（第一卷、第三章b、一四九頁）說いた『支拂要具（隨つて又一度に前貸さるべき貨幣資本）の必要量は、支拂期間の長短に逆比例する』といふ法則が適用されるのである。

第二に、週生産物に移轉されるものは、その生産上週勞働に依つて追加される新價値の總量のみでなく、週生産物の生産に消費される原料及び助成材の價値も同樣に移轉されるのである。生産物に含まれる此價値は、生産物と共に流通する。それは生産物の販賣に依り貨幣形態を受けるのであつて、然る後ち新たに同一の生産諸要素に轉化されねばならない。この事實は、勞働力についても原料及び助成材についても、等しく當て嵌る所である。けれども曩に（第六章、第二節A）述べた如く生産を連續的ならしめる爲には在庫生産機關の保存が必要になつて來る。この保存は營業部門の如何に從つて異なるものであり、また同一の營業部門に於いても、流通資本要素の差異に依り、例へばそれが石炭であるか棉花であるかの如何に從つて、差異を生ずることとなるのである。隨つて、此等の材料は絶えず現物形態を以つて更新されねばならないとはいへ、而も絶えず新たに代置されることを要するものではない。購買が如何に屢々更新されるかは、保存在庫品の大小、換言すれば、それが使用し盡される迄に必要とされる期間の長短に懸ることである。勞働力の場合には、斯かる在庫品の保存は行はれない。勞働に投ぜられた資本部分の、貨幣への再轉化は、助成材及び原料に投ぜられた資本部分の斯かる再轉化と相竝んで進行する。この貨幣は、一方に於いては勞働力に再轉化され、他方に於いては原料に再轉化されるものであるが、此等の再轉化は相分離して行はれる。原料と勞働力とは、購買上竝びに支拂上各特殊の期限を有するからである。卽ち原料の方は生産上の在庫品として長期的に購買されるに反し、勞働力の方は短期的に（例へば一週間を期限として）購買されるのである。他方に於いて、資本家は生産上の在庫品と同時に又完成商品の在庫品をも有しなければならない。販賣上の困難等は暫く措き、例へば一定量の商品を註文に應じて生産せねばならぬ場合がある。斯かる場合には、その最終部分が生産されつつある期間、既製の部分は、註文を完全に果たし得る時に至るまで倉庫内に保存されてゐる。流通資本の回轉における他の諸差異は、この資本の若干要素が他の要素に比して長期間生産行程の豫備段階（木材を乾燥するなどの如き）に滯留せねばならなくなるとき生じて來るのである。

スクローブが右の叙述の中に言及してゐる信用制度も、商業資本と同樣に、個別的資本家の立場から見た回轉に變化を與へる。社會的規模における回轉の方は、此等の物に依つて生産のみではなく消費までも速かならしめられる限りに於いてのみ、變化を受けるのである。

第十章　固定資本及び流通資本に關する諸學說、フキジオクラット派竝びにアダム・スミス

ケネーの所論に於いては、固定資本及び流通資本として區別される所のものが原前貸(1)及び年前貸(2)として現はれてゐる。彼れは此區別をば、生產資本（卽ち直接の生產行程に合體される資本）の內部における區別として論究してゐる。此點に於いて、彼れの說く所は當を得てゐるのである。けれども彼れは、農業上に充用される資本、卽ち小作農業者の資本のみを唯一の現實的資本と見做すのであるから、右の區別も亦勢ひ小作農業者の資本についてのみ與へられることとなる。資本の一部は年々回轉し、他の資本部分は一年以上（十年）を經過する每に回轉するといふことになるのも、畢竟するところこの事實に基くのである。ついでに一言すべきは、フキジオクラット派は其見解が發展するにつれて、右の區別をば他の資本種類たる產業資本一般の上にも應用するやうになつた。年前貸とヨリ多年に亙る前貸との區別は、その後尙ほ幾多の經濟學者に依り——甚しきはアダム・スミス以後の學者に依つてさへも——再び採用された程、社會にとつては極めて重要たものとなつてゐたのである。

此等二種の前貸間の區別は、前貸貨幣が生產資本の諸要素に轉化されたとき初めて與へられるものである。それは專ら生產資本の內部にのみ存在する所の一區別である。隨つて、貨幣を原前貸なり年前貸なりの部類に屬せしむる事は、ケネーの思ひ至らなかつた所である。此等の前貸は生產上の前貸——換言すれば生產資本——たる資格に於いては、いづれも市場における商品に對立するからである。尙また、ケネーは生產資本の此

等兩要素間の區別をば左の差異に歸せしめた點に於いて當を得てゐる。卽ち此等の要素が完成生產物の價値に移轉される樣式の差異。換言すれば此等の要素の價値が生產物の價値と一體を成して流通する樣式の差異がそれであつて、これは畢竟するに、一方の要素の價値は年々全部的に更新されるが、他方の要素の價値はヨリ長期間に亙つて斷片的に更新されるといふ、代置卽ち再生產の樣式における差異を意味するものである(二十三)。

(二十三)　ケネーについては、その著『經濟表の分析』（フキジオクラット、デール編、第一部パリー、一八四六年刊）を參照せよ。彼れはこの書の中に例へば次の如く述べてゐる。——『年前貸は年々耕作上に要する費用から成るものであつて、農經營の開始基金たる原前貸から區別すべきものである』（第五九頁）。ヨリ後年のフキジオクラットの間には、前貸をば直接に資本と稱してゐるものが旣に往々見出されるのである。チュポン・ド・ネムールはその著『新科學の起原竝びに進步』（一七六七年刊、デール編、第一部、第二九一頁）(3)の中に『資本卽ち前貸』なる言ひ現はしを與へ、更らにル・トローヌは『大なり小なりの期間、筋肉勞働を使用することに依つて、一國民は其年々の再生產から獨立した著大なる富の基金を有するやうになる。而して此基金は長期間蓄積された一資本であり、絕えず持續し增進する所の生產的活動に依つて本來支拂はれるものである（デール編、第二部、第九二八頁）と述べてゐる。チュルゴーは前貸といふ言葉の代りに、寧ろ資本といふ言葉の方をヨリ常則的に使用し而して更らに著しく製造業者の前貸をば小作農業者の前貸と同一視してゐる。（チュルゴー著『富の形成及び分配に關する考想』一七六三年刊）。

フキジオクラットに對するアダム・スミスの唯一の進步は此等の諸範疇を普遍化した點にある。卽ち彼れの論究に於いては、此等の範疇はもはや特殊の一資本形態たる小作農業者資本についてのみ適用されるものではなく、如何なる形態の生產資本についても當て嵌るのである。その當然の結果として、彼れは農業から採用した一年每に行はれる回轉と一年以上に亙る回轉との區別に代ふるに、種々異なつた期間を含む回轉についての一般的區別を以つてするに至

つた。隨つて彼れの見る所に依れば、流通資本の回轉期間の如何を問はず、卽ちそれが一年に亙るか、一年以上に亙るか、それとも一年以下に止まるかに論なく、固定資本の一回轉は常に流通資本の一回轉以上を含むこととなる。かくして彼れは、年前貸をば流通資本に轉化し、原前貸をば固定資本に轉化したのである。けれども彼れの進歩は、かくの如き範疇の普遍化といふ一點にのみ限られてゐる。說明の點に於いては、寧ろケネーよりも遙かに劣つてゐるのである。

アダム・スミスの說明の不明瞭は、彼れが其研究を開始した粗硬に實驗的な仕方に依つても既に明かである。彼れは曰く『使用者の手に收入又は利潤を齎らすやうに資本を使用し得る二つの異なつた方法がある』（『諸國民の富』第二部、第一章、第一八九頁、アバーデーン編、一八四八年刊）と。

價値を資本として作用せしむべく（換言すれば、その所有者の手に餘剩價値を齎らす目的を以つて）放下し得る方法は、投資部面と同樣に種々異なるものである。それは要するに、資本を放下し得べき種々なる生產部門の問題に外ならぬのである。斯かる方面から觀察するとき、問題は更らに一步を進めることとなる。卽ち價値が生產資本として投ぜられることなき場合にも、尙ほ且つ其所有者にとり資本（例へば利附資本や、商業資本など）として作用し得るといふ事は、如何にして行はれるかとの問題を含むこととなるのである。此點に於いて、我々は既に研究の現實的對象たる左の問題から遙かに遠ざけられてしまふ。卽ち種々なる要素への生產資本の分割は、此等の要素の種々なる放下部面は暫く措き、その回轉の上に如何なる影響を及ぼすかとの問題がそれである。

アダム・スミスは更らに語を續けて言ふ。——『資本は先づ、財貨を生產し、製造し、又は購買して更らに販賣し、以つて利潤を獲ることに使用され得るものである』と。彼れが玆に謂ふ所は、要するに、資本は農業、製造業及び商業に充用され得るといふ事に外ならぬのである。卽ち彼れは、種々なる投資部面（資本が直接の生產行程に合體せしめられることなく、隨つて生產資本たる機能を盡すことなき投資部面たる商業をも含む）について語つてゐるのである。これに依つて、彼れは既にフィジオクラットが生產資本の區別と、斯かる區別が回轉上に及ぼす影響とを說明せる基礎を放棄したこととなる。しかのみならず、彼れは更らに商業資本をば、生產物形成及び價値形成上の行程における生產資本の不等——この不等は又、生產資本の回轉及再生產上の不等を生ぜしめるものであるが——に專ら關聯した問題の例解として採用してゐるのである。

彼れは語を續けて曰く、『かく使用された資本は、それが使用者の所有に屬してゐるか、又は同一の形態を保持してゐる限り、彼れの手に何等の收入若しくは利潤を齎らすものではない』と。かく使用された資本！　けれどもスミスは、農業に投ぜられる資本のことを、產業に投ぜられる資本のことを言つてゐるのである。而して彼れは又後に至りかく放下された資本が固定資本及び流通資本に分割されることを述べてゐる！　要するに、斯種の投資に依つて、資本は固定資本とも流通資本ともなり得るものではないといふことになるのである。

それとも彼れは、商品を生產して販賣し、以つて利潤を得べく充用した資本が、商品に轉化された後ち販賣せられこの販賣に依つて第一に販賣者の所有から購買者の所有に移動し、第二に商品としての現物形態から貨幣形態に轉化されねばならないといふ事、隨つてそれは所有者の手に止まつてゐるか、又は（彼れから見て）同一の形態を保持してゐるかの限り、彼れにとつては不用のものであるといふ事を謂はんとしてゐるのであるか？　けれども此場合には、彼れの謂はんとする所は結局左の點に歸するのである。卽ち從前、生產行程所屬の一形態たる生產資本なる形を以つて作用してゐた資本價値は、今や流通行程所屬の形態たる商品資本及び貨幣資本として作用することとなり、かくし

てもはや固定資本でもなく流通資本でもないといふことになつてしまふ。而して此事實は、原料及び助成材（換言すれば流通資本）に依つて附加せられる價値要素についても、勞働要具の消費（換言すれば固定資本）に依つて附加せられる價値要素についても、等しく言ひ得ることである。されば此方法に依つても、我々は固定資本と流通資本との區別に向つて一歩も接近するものではないのである。

更らに『商人の財貨は、彼れがそれを賣つて貨幣に換へる迄は、彼れの手に何等の收入又は利潤を齎らすものではない。而して此貨幣も亦、更らに財貨と交換されない中は、彼れにとつて同樣に益する所がないのである。彼れの資本は絶えず一つの形態を以つて彼れの手から遠ざけられ、他の形態を以つて彼れの手に復歸しつつある。而して斯くの如き流通卽ち逐次的交換に依つてのみ、この資本は彼れの手に何等かの利潤を齎らし得るのである。されば斯かる資本は、當然に之れを流通資本と呼ぶことが出來る。』

アダム・スミスが玆に流通資本と呼ぶ所のものは、私が流通上の資本と名づけんとする所のものに相當する。この流通上の資本といふのは、交換に依る形態變化（素材竝びに所有者の變化）たる流通行程所屬の形態を採つた資本、換言すれば商品資本及び貨幣資本を意味するのであつて、生産行程所屬の資本形態たる生産資本なる形態に對立する所のものである。斯かる資本形態は產業資本家が其資本を分割する特殊の樣式を意味するものではなく、寧ろ同一の前貸資本價値が一生涯の中に絶えず新たに採つては捨つる相異なつた形態を意味するのである。アダム・スミスは斯かる形態差異をば、資本價値が生產資本なる形態を保持してゐる時、その流通の內部に、逐次的諸形態を通して行はれる循環の內部に生ずる所の形態差異（これは相異なつた生產資本要素が價値形成行程に關與して、その價値を生產物に移轉する樣式の差異に基くものである）と混同してゐる。而して此混同は實に、フキジオクラットに對するアダム・スミスの一大退歩を意味するものである。一方における生產資本と流通部面に存在する資本（商品資本及び貨幣資本）との關係、他方における固定資本と流通資本との間の根本的差異をば、斯く混同する事の結果については後段更らに說く。固定資本として前貸される資本價値は、流通資本として前貸される資本價値と同樣に、生產物を通して流通するものであつて、いづれも商品資本の流通に依つて貨幣資本に轉化されるのである。ただ固定資本の價値は斷片的に流通し、隨つて又大なり小なりの期間內に、斷片的に更新され現物形態を以つて再生產されねばならぬといふ事實に依つてのみ、區別が生ずるのである。

アダム・スミスの謂ふ流通資本なるものが、實は流通上の資本、換言すれば流通行程所屬の形態を採つた資本價値（商品資本及び貨幣資本）を意味するに外ならない事は、彼れの選んだ格段に見當違ひな例解に依つて證明される所である。彼れは一例として、生產行程に關係する所なく唯流通部面にのみ在留し、流通資本のみから成る所の資本種類たる商業資本を擧げてゐる。

資本が毫も生產資本として作用することなき一例を以つて說明を開始することが如何に不條理であるかは、彼れ自身に依つて證明されてゐる所である。彼れは右の叙述に次いで曰く、『商人の資本は全く流通資本である』と。けれども彼れが後に述べてゐる如く、流通資本と固定資本との區別は、生產資本そのものの內部における本質的區別に基くものである。彼れは一方に、フキジオクラットの主張する區別を念頭に置くと同時に、他方には又、資本價値が共循環中に通過する所の形態差異を念頭に置いた。而して此等の兩區別は、彼れの腦裡に雜然と入り亂れて錯綜してゐたのである。

けれども貨幣及び商品の形態變化に依り、換言すれば價値が此等兩形態中の一方から他方に轉化されるといふ事實

のみに依つては、利潤なるものが如何にして生じ來たるかといふ事は到底解し得べからざる所である。又その說明を彼れにとつては全く不可能となるのである。なぜならば、彼れは此場合、流通部面の內部にのみ運動する所の商業資本を以つて研究を開始してゐるからである。この問題については後に尙ほ述べる。玆には先づ、固定資本について彼れの言ふ所を聽くことにしよう。

『第二に、それ（資本）は土地の改良や、營業上の有用なる機械及び器具の購買や、または所有者を變更することなく或は更らに流通することなくして、牧入なり利潤なりを齎らす如き、右と類似の諸物件の購買などに使用し得るものである。故に斯かる資本は極めて正當に之れを固定資本と呼ぶことが出來る。職業の異なるに從つて、それに使用すべき固定資本對流通資本の比例も亦極めて異なつたものとなるのである。……手工業又はマニュファクチューアにおける各親方の資本の若干部分は、彼等の營業上の器具に固定されねばならない。けれども此資本部分は、若干の親方に在つては極めて小であり、又他の親方に在つては極めて大である。……されど手工業における斯くの如き一切の採つて流通するものであり、而して製作品の價格を通して利潤を含んで回收さるべきものである。』

斯かる敍述の薄弱と混亂とは（利潤の源泉についての無邪氣な論證は暫く措き）左の事實に依つて直ちに明かとなる。一例として、機械製造業者の立場から見れば、機械は商品資本として流通する所の生產物である。即ちアダム・スミスの言葉を借りていへば『手放されて所有者を換へ、又は更らに流通する』所のものである。故に彼れ自身の與へた定義に依れば、斯かる方面から見た機械は固定資本ではなく、流通資本となるであらう。この混亂は又、左の事實に基くものである。即ちアダム・スミスは、生產資本の種々異なつた要素の流通差異に基く固定資本對流通資本の區別をば、同一の資本が生產行程の內部に於いては生產資本（換言すれば商品資本又は貨幣資本）として作用するといふ形態上の區別と混同してゐる事がそれである。かくてアダム・スミスの見地に依れば、同一の物件は、それが資本の生產行程の中に占むる位置の如何に從ひ、或は固定資本（勞働要具又は生產資本要素）として、或は『流通』資本即ち商品資本（生產物）として作用し得ることとなるのである。

然るに、アダム・スミスは突如として其分割基礎の全部を變更し、僅か數行前に全研究を開始すべく述べた所と矛盾する結果に陷つてゐる。これは就中、左の敍述に於いて見られる所である。『使用者の手に牧入又は利潤を齎らすやうに、資本を使用し得べき二つの異なつた方法がある。』即ち流通資本又は固定資本である。かくて此場合には、相獨立した別個の諸資本（或ものは例へば工業上に充用され、或ものは又農業上に充用され得る所の）の相異なつた充用方法といふ事が問題となるのである。然るに今や彼れは『職業の異なるに從つて、それに使用する固定資本對流通資本の比例も亦、極めて異なつたものとなる』と述べてゐる。即ち、固定資本及び流通資本はもはや、相獨立した別個の投資を意味するものではなく、同じ生產資本の各異なつた部分——相異なつた投資部面に在つて、此生產資本の總價值の上に占むる各異なつた部分を代表する所の——を意味するのである。かくして固定資本と流通資本との區別は、生產資本そのものの適當な分割に基くところの、隨つてただ生產資本についてのみ適用し得るところの區別となるのである。けれども此見地は又、商業資本をば純粹の流通資本と見做して、固定資本に對立せしむる見地と矛盾して來る。アダム・スミスが此後ちの見地を有してゐたことは『商人の資本は全く流通資本である』と述べてゐる所に依つて明かである。商業資本なるものは事實に於いて、流通部面の內部にのみ作用する所

の資本であり、斯かる資本として生產資本（換言すれば、生產行程に合體された資本一般）と對立するものである。然し又斯かるものであればこそ、それは生產資本の流動（流通）部分たる資格に於いて、生產資本の固定部分に對立するものとはなり得ないのである。

スミスは曩に與へた例解の中で、營業上の器具を以つて固定資本となし、勞銀及び原料（助成材を含む）に投ぜられた資本部分（製造品の價格に依り利潤を含んで回收さるべきもの）を以つて流通資本となしてゐる。

要するに彼れは先づ、勞働行程を組成する所の相異なつた要素、換言すれば一方における勞働力（勞働）及び原料と他方における勞働器具とから出發してゐるに過ぎない。然るに此等のものは、資本として作用すべき一定量の價値が共購買に投ぜられてあればこそ、資本の組成分となるのである。この意味に於いて、此等のものは生產資本（換言すれば、生產行程の內部に作用する所の資本）の素材的要素であり、存在樣式である。然らば何故、これ等のものの一部を固定的と呼ぶのであるか？　曰く『資本の若干部分は、營業上の器具に固定されねばならぬ』からである。尤も他の資本部分も亦、勞銀及び原料に固定されることは事實である。けれども機械竝びに『營業上の器具……其他類似の諸物件は……所有者を變更することなく、或は更らに流通することなくして、收入なり利潤なりを齎らすもので ある。故に斯かる資本は、極めて正當に之れを固定資本と呼ぶことが出來る。』

採鑛業を例に採らう。此產業に於いては、原料は毫も使用されない。なぜならば此場合における勞働對象、例へば銅の如きは、天然の產物であつて、勞働に依り初めて占取さるべきものであるからである。かく人力に依つて初めて占取さるべき銅は、後に至り商品又は商品資本として流通すべき勞働行程の生產物であつて、生產資本の要素となるものではない。その價値の如何なる部分も、生產資本の要素として放下されるものではないのである。一方、生產行程の他の要素たる勞働力及び助成材（石炭、水などの如き）も亦、その素材を生產物に移轉するものではない。石炭は全部消費されて、その價値のみが生產物に移轉されるのと同じである。最後に勞働者について言へば、彼れは機械と同樣に、生產物たる銅に對しては獨立した關係を維持してゐるのであつて、ただ彼れの勞働に依つて生ずる價値が今や銅の價値の一成分となるに過ぎぬのである。

かくの如く、此例解に於いては生產資本の諸成分の中、所有者を變更し又は更らに流通する所のものは、一つもないことになる。なぜならば、生產資本の如何なる成分も、その素材を生產物に移轉するものではないからである。この場合、流通資本なるものを容れる餘地は何處に殘るであらう！　かくてアダム・スミス自身の與へた定義に依れば、銅山に使用される資本の全部は、固定資本のみから成ることとなるのである。

反對に、生產物の實體たるべき原料を使用し、更らに燃用石炭などの如く價値を生產物に移轉するのみではなく、また素材をも移轉する所の助成材を使用する、他の一產業を例に採らう。その生產物たる例へば綿絲の所有者が變更されると同時に、綿絲を構成する所の原料たる棉花の所有者も亦變更され、棉花は生產行程から消費行程に移轉することとなるのである。けれども棉花が生產資本の要素として作用する限り、その所有者は之れを販賣するものではなく、寧ろそれに加工して綿絲を生ぜしめるのである。彼れはそれを手放すものではない。或は——スミスの用ゐた大間違ひな平凡極まる言ひ現しを借りていへば——『それを手放して所有者を換へ、又は更らに流通せしむることに依つて』利潤を得るものではない。彼れは其機械を流通せしめないと同樣に、また材料をも流通せしめないのである。彼れの材料は生產行程に固定されるものであつて、此點に於いては紡績機械や工場建物と全く同樣である。實際のところ、生產資本の一部は絕えず勞働要具なる形態に固定されねばならぬと同樣に、又絕えず石炭、棉花等の形態にも

固定されねばならない。ただ左の一點が異なるだけである。即ち綿絲の例へば週生産の如きに要する棉花、石炭などは、週生産物の生産上全部的に消費されるものである。隨つてそれは、新たなる棉花、石炭などに依つて代置されねばならない。換言すれば、此等の生産資本要素は種類に於いては不變であるとはいへ、絶えず同一種類の新たなる品から成るものである。然るに同一の個別的紡績機械、同一の個別的工場建物の方は、同一種類の新たなる機械及び建物に依つて代置されることなく、幾回もの週生産に相次いで關與するのである。

生産資本の如何なる部分も　生産資本要素たる資格に於いては絶えず生産行程に固定されてゐる。なぜならば、此等の要素なくしては生産行程は進行し得るものではないからである。而して又生産行程の凡ゆる要素――固定的のものであると流動的のものであるとを問はず――は、一樣に生産資本として、流通上の資本たる商品資本及び貨幣資本に對立するのである。

勞働力についても同樣である。生産資本の一部は、絶えず勞働力に固定されて居らねばならない。而して何處に於いても、機械の場合と同樣に、同一の變化なき勞働力が、同一の資本家に依つて使用されてゐるのである。此場合における勞働力と機械との區別は、機械が一括的に購買される(それも、例へば代價を賦拂するといふやうな場合には行はれないのであるが)に反し、勞働者の方はさうでないといふ事實に存するものではなく、寧ろ勞働者の支出する勞働は全部的に生産物の價値に移轉されるに反し、機械の價値はただ片斷的にのみ移轉されるといふ事實に存するのである。

スミスは固定資本に對立した意味の流通資本について『かく使用された資本は、それが使用者の所有に屬してゐるか、又は同一の形態を保持してゐる限り、彼れの手に何等の收入若しくは利潤を齎らすものではない』と言つてゐるが、斯く言ふことに依つて、彼れは異なつた性質のものを相互に混同してゐるのである。即ち彼れは、商品資本たる生産物が流通部面に於いて通過する所の　且つ商品所有者の變更を媒介する所の、形式上にのみ行はれる商品轉形をば、生産行程の持續中に生産資本の各異なつた要素が通過する所の素材的なる轉形と等位に置いてゐるのである。彼れは斯くすることに依つて、商品の貨幣化と貨幣の商品化、即ち購買と販賣とを、其まま生産要素の生産物化と混同したことになる。彼れが流通資本の例解として擧げた所のものは、寧ろ、商品から貨幣に轉化され、貨幣から商品に轉化される所の、換言すれば商品流通に屬すべき形態轉化たる W—G—W を通過する所の商業資本である。然るに流通の內部に行はれる此形態轉化は、機能を盡しつつある産業資本にとつては左の意義を有するものとなる。即ち貨幣が再轉化されてゆく商品は生産要素（生産機關(5)及び勞働力）であるといふ事、隨つて右の形態轉化は、産業資本の機能の連續を、連續的行程換言すれば再生産行程としての生産行程を媒介するといふことである。斯かる形態轉化の全部は流通の內部に行はれる。商品を現實的に一方の人の手から他方の人の手に移轉せしむるものは、實にこの形態轉化である。

然るに生産資本が生産行程の內部に於いて通過する所の轉形は、勞働行程に屬すべき轉形であつて、生産要素を所期の生産物に轉化せしめる上に必要なものである。アダム・スミスは、生産機關の一部（嚴密な意味の勞働要具）は其現物形態を變更することなく、ただ漸次的にのみ磨滅しつつ、勞働行程の上に役立つものであるが（此事實を示す爲に、彼れは『所有者に利潤を齎らす』といふ誤つた言ひ現はしを用ゐてゐる）、他の部分たる生産材料の方は其現物形態を變更するものであり、又かく形態を變更すればこそ、生産機關たる任務を盡すといふ事實を固執した。けれども生産資本の諸要素が勞働行程の內部になす作用の斯くの如き差異は、固定資本と固定資本にあらざる資本との區別の起點たるに過ぎぬものであつて、この區別それ自身を意味するものではない。それは、斯くの如き作用上の差異が

如何なる生産方法のもとにも、資本制的生産方法のもとにも、等しく存在するといふ事實に依つて知られる所である。然るに斯くの如き素材的作用の上の差異は、生産物に對する價値移轉の差異を伴ひ、而して斯かる價値移轉の差異は又、生産物の販賣に依る價値回收の差異を伴ふものであつて、この最後の差異こそ、固定資本と固定資本にあらざる資本との區別を構成する所のものである。卽ち資本を固定資本たらしむるものは、資本が勞働要具に固定されるといふ事實ではなく、寧ろ勞働要具の購買に投ぜられた資本價値の一部が生産物の價値部分として流通してゐる時、他の部分は依然勞働要具に固定されてゐるといふ事實である。

『將來の利潤を得るために之れ（資本）を使用する場合、斯かる利潤は資本が彼れ（使用者）の手に止まるか、又は彼れの手を離れ去るかの何づれかの方法に依つて得られなければならない。前の場合にはそれは固定資本となり、後の場合には流通資本となるのである』（第一八九頁）。

この叙述に於いて先づ我々の注意に上る點は、通例の資本家の觀念から汲み來たつたナマ實驗的な利潤觀であつて、斯かる利潤觀は他の方面におけるアダム・スミスのヨリ優秀な奥義的見解と矛盾するものである。材料竝びに勞働力の價格は生産物の價格を通して回收されるものであるが、これは磨滅に依つて勞働器具から生産物に移轉される價値部分についても同樣である。この回收は、如何なる場合にも利潤の源泉たるものではない。生産物の生産上に前貸した價値が、生産物の販賣に依つて一括的に回收されるか、斷片的に回收されるか、換言すれば一度に回收されてしまふか、漸次に回收されるかといふ事は、ただ回收の樣式及び時間の上に差異を生ぜしめ得るのみであつて、如何なる場合にも、此等の雙方に共通する所の價値回收といふ事實をば餘剩價値の生産といふ事實に轉化せしめ得るものではない。この問題についても、餘剩價値なるものは、生産物の販賣に依り流通に依つて初めて實現されるものであるから、餘剩價値の源泉となるものは卽ちこの販賣、この流通に外ならないといふ俗見が根柢を成してゐるのである。かかる俗見に於いて利潤發生上の相異なつた樣式と謂はれてゐる所のものは、實は生産資本の相異なつた要素は相異なつた用途を有するといふ事實、換言すれば此等の要素は生産要素たる資格を以つて勞働行程の上に相異なつた作用を盡すといふ事實を、虚僞な形に言ひ現はしたものに過ぎない。最後に此見解は、右の區別を勞働行程又は價値增殖行程に、卽ち生産資本それ自身の機能に基くものとせず、ただ主觀的にのみ個々の資本家——彼等から見れば、一つの資本部分は甲なる方面に有用のものとなり、他の資本部分は乙なる方面に有用のものとなるのである——に通用すべきものとしてゐる。

反對にケネーは、この區別をば再生産行程及びそれについての必要そのものに基因すると見た。この行程を連續的なものたらしめる爲には、年前貸の價値が年生産物の價値の中から年々全部的に回收されることを要すると同時に、また基本資本の價値がただ斷片的にのみ回收されること、隨つて幾年か（例へば十年）を經た後に初めて、それが全部的に回收され、全部的に更新される（同一種類の新たなる物件に依つて）ことを必要とする。此點に於いて、アダム・スミスはケネーに及ばざること遠いのである。

かくて固定資本は卽ち勞働要具であり、而して勞働要具なるものは、生産行程の內部に於いて形態を變ずることなく、磨滅し盡される時に至る迄は、自己の助けに依つて造られた生産物と對立して生産上に作用を續けるといふ事實以外には、固定資本の決定に就いてアダム・スミスの利用すべき何ものも殘されないこととなる。然るに生産資本の如何なる要素も、絶えず現物形態を以つて（勞働要具、材料及び勞働力として）生産物（竝びに商品として流通する所の生産物）に對立するものである。而して材料及び勞働力から成る部分と、勞働要具から成る部分との區別は、要す

るに次の一點だけに過ぎないのである。卽ち勞働力について言へば、それは絕えず新たに購買されるものであつて、勞働要具の如く永久的に購買されるものではないといふ事、また材料について言へば、同一の變化なき品ではなく、常に同一種類の新たなる品が勞働行程の內部に作用するといふ事がそれである。アダム・スミスは此等の事實を忘れてゐたのであるが、それと同時に又、彼れの主張に依れば、固定資本の價値は流通するものでないといふやうな虛僞の外觀が生じて來る。尤も彼れが其以前、固定資本の磨滅をば生產物價格の一部として說明したことは言ふ迄もない事實である。

固定資本に對立せるものとしての流通資本については、彼れは此對立が次の事實に基くものであることを强調しなかつた。卽ち流通資本なるものは、固定資本とは異なり、生產物の價値の中から一括的に回收され、隨つて生產物の價値の諸轉形をば一括的に通過せねばならぬ生產資本部分であつて、此點にのみ兩者の對立の基礎が存してゐるといふ事實がそれである。彼れは寧ろ此事實をば、資本が生產部面から流通部面に移轉される結果採るところの、商品資本及び貨幣資本なる形態と混同した。然るに、この商品資本及び貨幣資本なる兩形態は、生產資本の流通部分にも固定部分にも相共通する所の價値負擔者であつて、生產資本に對立せるものとしては何づれも流通資本であるが、固定資本に對立せるものとしては何づれも流通資本であるのである。

最後に、固定資本の場合には、それが生產行程內に在留する結果、また流通資本の場合には、それが生產行程を去つて流通する結果、利潤が生ずると說く全く誤つた見解は、價値增殖行程及び餘剩價値成立の上における可變資本と不變資本の流通部分との本質的區別をば、兩者が回轉の上に採る所の共通形態に依つて隱蔽してしまふ。かくして資本制生產の全秘密は、更らに曖昧なものとされるのである。卽ち流通資本なる共通の名稱に依つて、右の本質的區別は廢除されてしまふのである。而して後年の經濟學は、此點に於いて更らに一步を進め、可變資本と不變資本との對立ではなく、固定資本と流通資本との對立をば、本質的にして且つ唯一の區別的な事實と解するに至つたのである。

アダム・スミスは斯くの如く、固定資本及び流通資本なるものは、何づれもそれ自體として利潤を齎らす所の、投資上の特殊の二方法であると說いた後、更らに次の如く言つてゐる。——『如何なる固定資本も、流通資本に依ることなくして收入を齎らし得るものではない。營業上最有用なる機械及び器具と雖も、これに依つて加工される材料と、これを使用する勞働者の生活とを供給する所の流通資本なくしては、何物をも造り出すものでないであらう』(第一八八頁)。

これに依つて、『收入を齎らし、利潤を生ず』云々といつた曩の言葉が如何なる事を意味するかが、玆に明かとなつて來る。卽ちそれは此等の兩資本部分が何づれも生產物の形成に役立つといふ事を意味するのである。

アダム・スミスは今や、次の例解を擧げてゐる。——小作農業者の資本の中、農具について使用される部分は固定資本であり、勞働者の賃銀及生活について使用される部分は流通資本である。(アダム・スミスは此點に於いて固定資本と流通資本との區別を正しく理解してゐる。卽ち彼れはこの區別が生產資本の各異なつた成分のなす流通の差異にのみ、その回轉にのみ基くものと見てゐるのである)。固定資本については、彼れはそれを保有することに依つて利潤を得、流通資本については、それを手放すことに依つて利潤を得る。彼れの勞働家畜の價格又は價値は、農具のそれと同樣に固定資本である。(この場合にも亦、兩資本の區別の基くところは價値であつて、素材的要素ではないと見た點に於いて、彼れの說く所は當を得てゐる)。勞働家畜の生存に要する資本は、勞働者の生活に要する資本と同樣に流通資本である。小作農業者は勞働家畜を飼育することにより、その生存に必要なる資本を手放すことに依つて、

利潤を得る。（彼れは家畜の飼料を保有してゐて、販賣するものではない。彼れは之れを家畜の飼料として消費しつつ同時に家畜そのものを勞働要具として消費するのであつて、異なる所はただ次の一點のみである。即ち勞働家畜の生存に要する飼料は一括的に消費されるものであつて、農産物の中から又は農産物の販賣に依つて得られる新たなる飼料を以つて、絶えず更新されねばならぬのであるが、家畜の方はただ其各頭が順次勞働不能となるに從つて更新されるに過ぎないのである）。購買して肥養される家畜の價格及び生存費は、いづれも流通資本である。小作農業者は此等の物を手放す事に依つて利潤を得る。（すべての商品生産者は、隨つて資本家的商品生産者も亦、その生産行程の結果たる生産物を販賣する。然し斯かる理由に依つて、この生産物は彼れの生産資本の固定部分とも流動部分ともなるものではない。それは寧ろ、生産行程から放出されて商品資本たる機能を盡さねばならぬやうになつた形態を以つて存在するのである。肥養家畜は原料として生産行程の內部に作用するものであつて、勞働家畜の如く勞働要具として作用するものではない。故にそれは實體として生産物に移轉され、而して其價値は助成材たる飼料の價値と同樣に、全部生産物に移轉されるのである。肥養家畜が生産資本の流動部分たる所以は即ち此點に存するのであつて、販賣生産物たる肥養された家畜が、原料であるところの尙未だ肥養されない家畜と同一の現物形態を有するといふ點に存するものではない。兩者が斯く同一の形態を有するは偶然の一致に過ぎないのである。同時に又、アダム・スミスは此例解に依つて、生産要素の內に含まれる價値に固定及流動なる性質を附與するものは、生産要素の物的形態ではなく、寧ろ生産要素が生産行程の內部に盡す所の機能であることを知り得たであらう。（種子の價値も亦悉く固定資本である。……それは土地と穀倉との間を往復してゐるとはいへ、決して所有者を變更することなきものであり、隨つて嚴密に言へば流通せざるものとなつてゐるからである。小作農業者は種子の販賣に依つてではなく、增大に依つて利潤を得るのである。』

この點に於いて、スミスの與へた區別の全く無思想的であつた事が暴露されるのでゐる。彼れに依れば、種子なるものは其所有者の變ぜざる時、換言すれば直接に年生産物の中から更新され控除される時には、固定資本となり、反對に、生産物の全部が販賣され、其價値の一部に依つて他人の種子を購買する場合には、流通資本となるのである。後ちの場合には所有者の變化が行はれるが、前の場合にはそれが行はれないのである。スミスは此場合にも、流通資本と商品資本とを混同してゐる。生産物は商品資本の素材的負擔者である。けれども生産物の中、かく商品資本の負擔者となるものは、生産物として出で來たつた生産行程に直接復歸することなく、現實に於いて流通に入る所の部分のみであることは言ふ迄もない。

種子が直接に生産物の一部として控除されるにしろ、又は生産物の全部を販賣して、其價値の一部を他人の種子の購買に充用するにしろ、何づれの場合にも單に代置が行はれるのみである。而して斯かる代置に依つては、何等の利潤も生ずるものではないのである。後ちの場合には、種子は生産物の自餘の部分と共に商品として流通に入り、前の場合には、ただ簿記面にのみ前貸資本の價値部分たる位置を占むるに過ぎない。いづれの場合にも、それは生産資本の流動部分たるを失はないのである。それは生産物を完成する爲には全部的に消費される。また再生産を可能ならしめる爲には、生産物の中から全部的に更新されねばならないのである。

『原料及び助成材は、それが使用價値として勞働行程に入つた時の獨立した形態を失ふことになるのである。嚴密な意味の勞働要具にあつてはさうではない。器具や、機械や、工場建物や、容器などは、其本來の形態を維持し、明日もまた昨日と同じ形で勞働行程に入り込む限りに於いてのみ、勞働行程內に役立つのである。これらの物は其存命中

卽ち勞働行程の持續中には、生産物に對抗して自己の獨立した形態を維持してゐるものであるが、其死後に於いても矢張り同樣である。機械や、道具や、勞働建物などの死骸は、それらの物が形成を助けた諸生産物から分離し獨立して存在してゐることは、其存命中と同樣である』（第一卷、二三七頁）。

諸種の生産機關が生産物の形成に利用される樣式の差異、卽ち生産機關の或ものは生産物に對して自己の獨立した形態を維持するに反し、他のものはそれを變更し又は全く喪失するといふ差異は、それ自體としての勞働行程の領域に屬する區別であつて、何等の交換、何等の商品生産をも伴ふことなき單なる自家使用（例へば家父長的家族の）を目的とする勞働行程にも等しく通用する所であるが、アダム・スミスは此差異をば次の如くに曡造した。卽ち彼れは（一）生産要素の一部は其形態を維持することに依り、又他の部分は其形態を喪失することに依つて、所有者の手に利潤を齎らすと說き、この問題と何等關係する所なき利潤の考察を混入せしめ、更らに（二）生産要素の一部が勞働行程の內部に經驗する諸變化をば、生産物交換（商品流通）の領域に屬すべき賣買なる形態變化——流通商品に對する所有の移動をも同時に含むところの——と混同したのである。

資本の回轉なるものは、流通卽ち生産物の販賣に依つて（換言すれば、生産物を貨幣に轉化せしめ、貨幣より更らに生産諸要素に再轉化せしむることに依つて）媒介される再生産の存在を假定する。されど資本家的生産者が共生産物の一部を直接自から生産機關として使用する限り、彼れは自分自身に對する販賣者として現はれ、簿記面にも其通り記入されるのである。この場合、斯かる再生産部分は流通に依つて媒介されるものではなく、直接的に行はれるのである。けれども斯く生産機關として再使用される生産物部分は、（一）其價値が全部生産物に移轉され、又（二）それ自身の現物形態が新たなる生産物の一部に依つて全部的に代置される限り、流通資本を更新するものであつて、固定資本を更新することにはならない。

アダム・スミスは今や、流通資本及び固定資本が如何なる物から成るかを語つてゐる。彼れは、固定資本となる諸種の物件（卽ち素材的要素）と、流通資本となる諸種の物件とを列擧してゐる。かくして固定資本及び流通資本なる性質は、本來に於いて此等の物件の素材に含まれるものであつて、此等の物件が資本制生産行程の內部に盡す一定の機能に基くものではないかの如く見えて來るのである。而も彼れは同じ章（第二部、第一章）の中に、次の如く述べてゐる、——例へば直接的の消費に充用すべく準備されてある住屋の如き一定の物件は、『その所有者の手に收入を齎らし得るものであり、隨つて彼れから見れば資本機能を盡し得るものであるとはいへ、公衆にとつては何等の收入をも齎らし得るものではなく、隨つて資本たる機能を盡し得るものとはならないのである。人民全體の收入は、これに依つて些かも增大し得るものではない』（第一八六頁）。卽ち此場合には、彼れは資本性質なるものが、如何なる事情の下に在るかを問はざる物それ自體に屬するものではく、事情の如何に從つて物に與へられることもあれば與へられざることもある一機能である事を明かに認めてゐる。が、斯く資本一般について言ひ得る事は、また特殊の資本部分についても言ひ得る所である。

同一の物件は、それが勞働行程の內部に盡す機能の如何に從つて、流通資本の組成分ともなり、固定資本の組成分ともなる。一例を擧ぐれば、家畜は之れを勞働家畜（勞働要具）として見れば、小作農業者の固定資本の素材的存在樣式たるものであるが、肥養家畜（原料）として見れば、彼れの流通資本の組成分となるのである。他方に於いて、同一の物件が或時は生産資本の組成分として作用し、或時は又直接的の消費基金に屬するといふ場合もあり得る。例へば一つの家屋は、それが作業場として使用される場合には、生産資本の固定成分であるが、住屋として役立つ場合

には、決して住屋たる資本の形態となるものではない。同一の勞働器具が、或時は生產機關として作用し、或時は又消費資料として作用し得るといふ場合は少なからず存在してゐるのである。

固定資本及び流通資本なる性質を以つて物それ自體に屬する性質となした事は、スミスの見解から生じて來る錯誤の一つであつた。同一の物件が勞働行程の上に演ずる役割の如何に從つて、勞働要具や、勞働材料や、生產物などの資格が如何に變化するものであるかは、勞働行程の分析（第一卷、第五章）に依つて既に證明された所である。而して如何なるものが固定資本であり、如何なるものが固定資本でないかといふことの決定は又、此等の諸要素が勞働行程隨つて又價値增殖行程の上に演ずる役割を基礎として與へられるものである。

第二にアダム・スミスは、右の如く固定資本及び流通資本を構成する所の諸物件を列擧することに依つて、次の事實を暴露してゐる。卽ち彼れは、生產資本（生產形態を採つた資本）についてのみ通用し且つ有意義である所の、此資本の固定分と流動分との區別をば、生產資本と流通行程內の資本に屬すべき形態である商品資本及び貨幣資本との區別と混同したといふことがそれである。彼れは同じ場所で（第一八七及一八八頁）『流通資本なるものは……夫々の販賣者の手に在る食糧、材料及び凡ゆる種類の完成品、竝びに此等の物を流通し分配する上に必要な貨幣から成るものである』云々と述べてゐる。これを仔細に觀察するならば、彼れは實際この場合にも、前言に反して流通資本を商品資本及び貨幣資本と混同してゐることが見出されるのである。この後ちの兩資本は、毫も生產行程の領域に屬することなき二つの資本形態であつて、固定資本に對立する所の流通（流動）資本となるものではなく、生產資本に對立する所の流通上の資本となるものである。勿論、彼れはこれ以外にも材料（原料又は半製品）を擧げてゐるが、然し斯かる材料として前貸され、現實に於いて生產行程に合體される生產資本部分は、彼れの見る所に依ればただ右の商品資本及び貨幣資本と相竝んで、流通資本たる機能を盡すに過ぎないのである。彼れは言ふ。——

『社會の總資本が自然に分割されてゆく三部分中の第三の且つ最終のものは卽ち流通資本であつて、之れは流通することに依り、又は所有者を變ずることに依つてのみ、收入を齎らす事を特徵とするものである。この資本も同樣に、四つの部分から成る。卽ち第一は貨幣である。……（貨幣なるものは決して生產資本の、換言すれば生產行程の內部に作用する資本の形態となるものではない。それは常に、資本が流通行程の內部に於いて採る諸形態の一つに過ぎないものである）。……第二は屠獸業者や、牧畜業者や、小作農業者などの手に所有され……且つ販賣に依つて利潤を得べく期待されてゐる所の食糧資本である。……第四の且つ最終の部分は、造り上げられ完成されて而も尙ほ商人及び製造業者の手に保有されてゐる所の製造品である。……而して第三の部類に屬するものは、卽ち衣類、家具、建物等に使用すべきであるが、尙いまだ此等三形態中の何づれにも造り上げられず、樹木栽培業者なり、織物製造業者なり、織物商なり、材木商なり、大工及指物師なり、煉瓦製造業者なりの手に保有されてゐる所の、全く加工されざる、或は多かれ少なかれ加工されたる材料である。』

右の中、第二及第四部類は、生產物として生產行程から放出された販賣を要すべき生產物、約して言へば、今や商品又は商品資本として作用し、隨つて其終極における用途は如何なるものであるにしろ——卽ち共目的（使用價値）の上から見て、結局個人的消費に歸すべきであると生產的消費に歸すべきであるとを問はず——兎にかく現在に於いては、生產資本の何等の要素ともなることなき形態と循環行程上の位置とを占むる所の生產物以外には、何物をも含まないのである。斯かる生產物の中、右の第二部類に屬するものは卽ち榮養資料であり、第四部類に屬するものは卽ち自餘の凡ゆる完成生產物を包括するものであつて、此等の生產物はそれ自身また完成した勞働要具もしくは享樂資料

（第二部類に含まれる榮養資料以外の）のみから成るものである。

スミスが右の説明の中に商人をも加へてゐる事は、彼れの思想の混亂を示すものである。生産者が其生産物を商人の手に販賣してしまへば、生産物は最早生産者の資本の何等の形態ともなるものではない。勿論、社會的の立場から見れば、それは生産者以外の人の手に移轉されてあるとはいへ、依然として商品資本たることを失はないのである。然し斯く商品資本なればこそ、それは固定資本でもなく流通資本でもないのである。

直接的の自家使用を目的とすることなき如何なる生産のもとに於いても、生産物は商品として流通することを要する。換言すれば、それは利潤の獲得ではなく、生産者の生活を目的として販賣されねばならないのである。更らに資本制生産の場合になると、商品の販賣と同時にまた、商品の中に含まれる餘剰價値が實現されるといふ事實が加はつて來るのである。生産物は商品として生産行程の內部から出て來るものであつて、生産行程の固定要素でもなければ流動要素でもないのである。

尙また、スミスは右の所說に依つて自分自身の主張を打消してゐる。完成生産物なるものは此場合、その素材的形態たる使用價値（利用效果）の如何に拘らず總べて商品資本であり、換言すれば流通行程所屬の一形態を採つた資本である。如何なる完成生産物も、斯かる形態を採りたるものとしては、その所有者の手に在る生産資本の何等の組成部分ともなるものではない。而も此事實は決して、斯かる生産物が販賣されるや否や、購買者の手の中で生産資本の流動部分なり固定部分なりと成ることを妨ぐるものではないのである。これに依つて、次の事實が明かとなる。即ち一度び生産資本に對立した商品資本として市場に出現する同一の物件は、それが市場から引上げられるや否や、生産資本の流動部分又は固定部分として作用し得ることもあり、又は得ざることもあるといふ事實がそれである。

綿紡業者の生産物たる綿絲は、彼れの資本の商品形態であり、彼れから見れば商品資本である。それは更らに彼れの生産資本の組成部分となつて、彼れの爲に勞働材料なり勞働要具なりとしての機能を盡し得るものではない。されどそれを購買した機織業者の手に於いては、彼れの生産資本の流動成分の一つとして、これに合體せしめられるのである。然るに綿紡業者から見れば、この綿絲は彼れの固定資本竝びに流通資本（餘剰價値のことは暫く措き）の一部の價値負擔者となるのである。同樣に、機械製造業者の生産物としての一機械は、彼れの資本の商品形態であり、彼れから見れば商品資本である。而してそれは此形態を維持する限り、流通資本でもなく固定資本でもないのであつて、それを使用する製造業者の手に販賣されたとき生産資本の固定部分となるのである。生産物の一部が使用價値形態の上から見て、その出で來たつた行程に生産機關として復歸し得る（例へば石炭が石炭の生産に復歸する如く）場合でさへも、生産された石炭の中販賣に充用さるべき部分は、流通資本をも固定資本をも代表することなく、むしろ商品資本を代表するのである。

他方に又、生産物が其使用價値形態の上から見て、勞働材料としてにしろ勞働要具としてにしろ、兎にかく生産資本の何等の要素たる資格をも具へて居らぬ場合が在り得る。例へば、何等かの生活資料の如きがそれである。而も斯くの如き生産物は、その生産者から見れば商品資本であつて、固定資本竝びに流通資本の價値負擔者となるのである。而してそれが固定資本の價値を負擔するか流通資本の價値を負擔するかは、その生産に充用された資本が一括的に更新さるべきであるか、斷片的に更新さるべきであるかに依つて、換言すれば、此資本の價値が一括して生産物に移轉されるか、斷片的に移轉されるかに依つて決定されるのである。

スミスに依れば、上記の第三部類に屬すべき材料（原料、半製品、助成材）は、一方から見れば、既に生産資本に

合體された資本部分たる機能を盡すものではなく、實際ただ社會的生産物一般を構成する使用價値の特別の一種として、社會における商品量中の特殊の一部として作用するに過ぎず、第二及第四部類のもとに列擧した他の素材的諸成分（生活資料など）と相竝んで存在するものである。他方に又、それは生産資本に合體されたものと見做され、隨つて生産者の手における生産資本の要素と見做されてゐることは事實である。要するに、この原理を一部的には生産者（樹木栽培業者、織物製造業者など）の手の中で作用するものと解し、一部的には又商人（織物商、材木商など）の手の中で作用するものと、換言すれば生産資本の成分ではなく、單なる商品資本に過ぎぬものと解した點に、スミスの思想の混亂が示されてゐるのである。

實際のところ、彼れは斯く流通資本の要素たるべき諸物件を列擧することに依つて、生産資本の上にのみ適用し得べき固定資本對流通資本の區別をば全く忘れてしまつたのである。彼れは寧ろ、流通行程の領域に屬すべき二つの資本形態たる商品資本及び貨幣資本をば、生産資本に對立させてゐる。然しこれもただ無意識的にさうしてゐるといふに過ぎないのである。

最後に注意すべき事は、彼れが流通資本の諸成分の中に勞働力を算入することを忘れたといふ一事である。而して此事實は、次に掲ぐる如き二重の理由に基くものである。

貨幣資本を除外して考へるならば、アダム・スミスの謂ふ流通資本とは要するに商品資本の別名に過ぎぬものであることは、上に述べたところである。然るに勞働力なるものは、市場に流通する限り資本ではなく、何等の商品資本形態でもない。勞働力は決して資本ではないのである。勞働者は一つの商品を、即ち自分自身の皮を市場に持ち行くとはいへ、決して資本家ではない。勞働力なるものは、それが販賣されて生産行程と合體せしめられた時、換言すれば最早商品として流通しなくなつた時、初めて生産資本の要素となる。即ち餘剩價値の源泉としての可變資本となるものであり、また勞働力の購買に投ぜられた資本價値の回轉といふ立場から見れば、生産資本の流動部分となるものである。アダム・スミスはこの場合、流通資本を商品資本と混同してゐる故に、勞働力を流通資本の部類に屬せしめる事が出來なかつた。かくして可變資本はこの場合、勞働者が賃銀を以つて購買する所の商品（即ち生活資料）といふ形を採つて現はれることとなつたのである。斯かる形態のもとに現はれるとき、勞銀に投ぜられた資本價値は流通資本の部類に屬すべきものと考へられるやうになる。生産行程に合體せしめられるものは、勞働力であり、勞働者そのものであつて、勞働者の依つて生存すべき生活資料ではない。勿論、社會的の立場から見れば、勞働者がその個人的消費に依つて行ふ彼れ自身の再生産といふ事も、社會的資本の再生産行程の領域に屬するものであることは、既に（第一卷、第二一章）述べたところである。されど斯かる事は、玆に考察する所の相互隔絶された個別的生産行程については適用し得るものではない。然るにスミスが固定資本の部類に屬せしめた『習得的の有用な諸能力』（第一八七頁）は、それが賃銀勞働者の能力である限り、而して又賃銀勞働者が彼れの勞働を斯かる能力と一括して販賣するや否や、寧ろ流通資本の組成部分となつてしまふのである。

社會的富の全部を（一）直接的の消費基金と、（二）固定資本と、（三）流通資本とに分類したことは、アダム・スミスの一大錯誤である。この分類に依れば、富は（一）機能を盡しつつある社會的富の何等の部分ともならざる消費基金（尤もその若干部分は、絶えず資本として作用し得るものである）と、（二）資本とに分割せらるべきものとなる。換言すれば、富の一部分は資本として作用し、他の部分は資本に非らざるもの、即ち消費基金として作用することとなるのである。而して雌雄の何づれか一方たることが哺乳動物にとつて避け難き自然必然事であるのと略々同樣に、

この場合固定資本又は流通資本の何づれか一方たることは、凡ゆる資本にとつて避け難き自然必然事として現はれるのである。然るに固定資本と流通資本との對立は、專ら生產資本要素に就いてのみ適用し得るものであり、之れ以外にも尙、固定資本又は流通資本の何づれともなり得ざる形態を採つた極めて多額の資本――商品資本及び貨幣資本――が存在してゐることは、我々の既に見たところである。

個々の資本家的生產者が、賣買に依らず直接みづから現物形態のまま生產機關として再利用する所の生產物部分を別にして考へるならば、資本制度のもとにおける社會的生產物の總量は商品資本として市場に流通するものであるから、隨つて單に生產資本の固定要素及び流動要素のみではなく、消費基金の凡ゆる要素も亦商品資本の中から引き出される事は明かである。これは實際のところ、資本制生產のもとに於いては、生產機關も消費資料も先づ――後には生產機關又は消費資料として役立つやうに造られてあるとはいへ――商品資本として出現するといふ意味に外ならない。勞働力そのものも亦、商品資本としてではないにしろ、少なくとも商品として、市場に見出されるものである。

かくしてアダム・スミスの見解には、次の如き新たなる混亂が生じて來る。彼れは曰く、

『以上四つの部分（流通資本の。玆に謂ふ流通資本とは、流通行程所屬の商品資本及び貨幣資本なる形態を採つた資本を指すのであつて、アダム・スミスは商品資本の諸成分の間に更らに素材上の區別をも與へてゐるため、此等二つの資本部分は轉じて四つの部分となるのである）の中、食糧と材料と完成品との三つは、一年又はヨリ大なり小なりの期間に、流通資本の中から引き出されて、固定資本なり又は直接的の消費に使用すべき準備資本なりの中に組み入れられることを常とするものである。如何なる固定資本も、本來は流通資本の中から引き出されるものであり、絕えず流通資本に依つて支持されることを要するものである。營業上の凡ゆる有用な機械及器具は、本來流通資本の中から引き出されたものであつて、此等の物の製造に使用される材料と、此等の物を製造する勞働者の生活資料とは、この流通資本に依つて供給されるのである。尙また、此等の物を絕えず修繕してゆく上にも、これと同一種類の資本を必要とするのである』（第一八八頁）。

生產者が直接的に生產機關として再消費する所の生產物部分を別にして考へるならば、資本制生產に就いては左の普遍律が適用されることとなる。卽ち一切の生產物は、その現物形態、その使用價値の上から見て、生產資本（生產行程）の要素たる機能、換言すれば生產機關たる機能、隨つて又生產資本の固定要素又は流動要素たる機能を盡さねばならぬもの、又は盡し得るものであるにしろ、或は生產的消費の資料ではなく、寧ろ個人的消費の資料としてのみ役立ち得るに過ぎないものであるにしろ、いづれにしても商品として市場に來るものであり、かくして資本家の立場から見れば、彼れの資本の商品形態として、商品資本として流通することになるといふ事實がそれである。一切の生產物は、商品として市場に投入される。隨つて一切の生產機關及び消費資料、卽ち生產的竝びに個人的消費の凡ゆる要素は、購買に依り商品として市場から引き上げられねばならない。

この自明の事實は、勿論當然なことであつて、生產資本の固定要素にも流動要素にも、凡ゆる形態における勞働要具にも勞働材料にも、等しく通用する所である。（これに就いては尙、何等の生產物にあらざる、天然に存在する所の生產資本要素も存在するといふ事實が忘れられてゐる）。機械は市場に於いて購買されるものであつて、此點は棉花と異なる所はないのである。けれどもそれだからと言つて、總べての固定資本は本來流通資本から來るといふ結論は決して生ずるものでない。斯かる結論の生ずるは、畢竟するところ、スミスが流通上の資本をば流通（又は流動）資本換言すれば固定的にあらざる資本と混同した結果に外ならないのである。加ふるに、スミスは自ら自己の言を否定し

てゐる。彼れ自身に依れば、機械は之れを商品として見れば流通資本第四部類の一部である。されば機械が流通資本から來るといふことは、畢竟するところ機械なるものは機械として作用する以前商品資本として作用してゐたといふ事、然し素材の上から見れば、機械は機械それ自身から來たものであるといふ事を意味するに外ならない。同樣に、紡績資本の流動要素としての棉花は、市場における棉花から來るものである。然るにスミスは尙ほ其後の說明に於いて、機械を造るには勞働及原料が必要であるとの理由に依つて、固定資本は流通資本から來ると論斷してゐるが、これに就いては次の事實に注意すべきである。第一に、機械を造るには原料の外に尙、勞働要具隨つて固定資本を要し、第二に、原料を造るのにもまた固定資本（機械其他）を要するといふ事がそれである。蓋し生産資本なるものは、常に勞働要具を含むが、必ずしも勞働材料を含むとは限らないからである。スミス自身も右の說明の直後に左の如く述べてゐる。——『土地、鑛山、漁場等は、いづれも之れを利用し得るものとするために固定資本と流通資本との雙方を必要とするものである。（卽ち彼れは、原料を生産するには流通資本の外に尙、固定資本が必要であることを認めてゐるのである）。而して（玆にもまた、不條理が示されてゐる）その齎らす產物は、單に此等の資本のみではなく、尙また社會における他の總べての資本をも利潤を附して回收せしむるものである』（第一八八頁）。この見解は全く謬れるものである。此等の物から生ずる產物は、他の凡ゆる產業部門に於いて使用さるべき原料、助成材等を供給するものであるが、その價値は他の總べての社會的資本の價値を回收せしむるものではなく、ただそれ自身の資本價値（プラス餘剩價値）を回收せしむるに過ぎない。この場合にも、アダム・スミスの見解には、フキジオクラットに對する想起が纏頭してゐるのである。

單に勞働要具としてのみ役立ち得る所の諸生產物から成る商品資本部分は、苟くも無益に生產されることなく、販賣不可能のものとなることなき限り、晩かれ早かれ勞働要具として作用せねばならないといふこと、卽ち資本制生產を基礎として考へるならば、斯かる資本部分は最早商品でなくなるや否や、社會的生產資本の固定部分の、豫め期待し得べき現實的な要素とならねばならないといふことは、社會的の立場から見れば確かに當を得た見解である。

だが是れについては、生產物の現物形態に基く一區別が存在してゐる。

例へば紡績機械について見るに、それは紡績に利用されることなく、隨つて生產要素たる機能、卽ち資本主義的の立場から見れば生產資本の固定部分たる機能を盡くすことなき限り、何等の使用價値をも有するものではない。けれども此機械は可動的のものであつて、それを生產した國から輸出せられ、外國に於いて直接又は間接に原料其他のものなりシアンペン酒なりを代價として販賣され得るものである。この場合、紡績機械なるものは、それを生產した國に於いては單に商品資本たる機能を盡すに止まり、決して——販賣後と雖も——固定資本たる機能を盡すものではないのである。

反對に、土地と合體することに依つて一定の場所に局限され、隨つて一定の場所を離れては利用し難きものとなる諸生產物、例へば工場建物や、鐵道や、橋梁や、隧道や、船渠などの如き物、又は土地に加へられた諸種の改良の如きは、その素材體の儘これを外國に輸出することは不可能のものではないのである。それは不用のものとなるか、然らずんば販賣されるや否や、その生產國に於いて固定資本たる機能を盡すの外はないのである。販賣の目的を以つて投機的に工場を建て又は土地に改良を施す資本的生產者の立場から見れば、此等の物は彼れの商品資本の形態、卽ちアダム・スミスの謂ふ流通資本なるものの形態となるのである。けれども社會的の立場から見れば、此等の物はそれを不用に終らしめまいとする以上、結局その生產國に於いてそれ自身の所

在に依つて固定された生産行程の内部に、固定資本として作用しなければならない。かく言へばとて、此等の不動物は其儘それ自體に於いて、固定資本であるといふ事には決してならないのである。此等の物は、住屋などとして消費基金の一部となり得るものである。斯かる場合には、それは社會的の富——資本は其一部に過ぎないものである——の一要素となるとはいへ、決して社會的資本の領域に屬するものではない。スミスの言葉を借りていへば、此等の物の生産者はそれを販賣することに依つて利潤を得る。卽ちそれは流通資本である！　その利用者たる人は、之れを生産行程の內部に使用することなくして利用し得るものではない。卽ちそれは固定資本となるのである！

例へば鐵道の如き物の所有名義は、日々その保有者を變更し得るものであつて、彼れは此名義を外國に販賣して以つて利潤を獲ることも出來る。斯かる場合には、鐵道そのものは輸出し得ないとはいへ、その所有名義は輸出し得るものとなるのである。それにも拘らず、此等の物は、その所在地に寢かされることとなるか、然らずんば生産資本の固定部分たる機能を盡すの外はない。同樣に、Aなる製造業者は其工場をBなる製造業者に販賣して以つて利潤を得ることが出來る。而も此事實は、右の工場が從前通り固定資本たる機能を盡すことを妨ぐるものではないのである。

かくの如く、一定の場所に固定され、土地と不可分的に結合されてゐる勞働要具は、その生産者から見れば商品資本たる機能を盡し得るものであり、彼れの固定資本の何等の要素となるものではないとはいへ（彼れの固定資本は、彼れが建物鐵道などの築造に使用する所の勞働要具より成るから）、而も其生産國に於いては必然的に固定資本たる機能を盡さねばならぬものである事は、豫め推知し得る所であるが、然し此事實に依つて、固定資本なるものは必然的に不動物から成るといふ反對結論を引き出だし得るものではない。船や機關車は、運動に依つてのみ作用するものであるに拘らず、その使用者にとつては（生産者にとつてはさうではないが）固定資本たる機能を盡すものである。反對に、最も現實的の意味に於いて生産行程に固定され、生産行程の內部に生存し死滅し、一度び此行程に入るや決して其處を去ることなき物件にして、而も生産資本の流動部分たるものがある。例へば生産行程の內部に於いて機械運轉の爲に消費される石炭や、工場建物の點燈用に消費される瓦斯などの如きは卽ちそれである。此等の物が流通資本たる所以は、それが素材體のまま生産物と相合して生産行程を去り、商品として流通するといふ事に存するのではなく、寧ろ其價値の全部が此等の物の助けに依つて生産された商品の價値に移轉されるといふ事、かくして又、此價値が全部的に商品の販賣に依つて回收されねばならぬといふ事に存するのである。

最後に引抄したスミスの言葉の中で尙ほ注意を要することは、『此等の物（機械など）を造る勞働者の生活を供給する所の……流通資本』といふ一句である。

フヰジオクラットは勞銀として前貸される資本部分を以つて、原前貸に對立した年前貸の部類に屬するものとした點に於いて當を得てゐる。他方に、小作農業者に依つて充用される生産資本の成分として彼等の目に映じたものは、勞働力そのものではなく、寧ろ農業勞働者の手に與へられる生活資料（スミスの謂ゆる『勞働者の生活』）である。この見地は、彼等の獨特な教理と嚴密に一致してゐる。彼等の見る所に依れば、勞働者に依つて生産物に附け加へられる價値部分は（原料、勞働要具などに依り、約して言へば不變資本の素材的成分に依つて、生産物に附け加へられる價値部分と全く同樣に）、勞働者の手に支拂はれる所の、而して勞働者が彼れの勞働力たる職能を維持する爲に是非とも消費せねばならぬ所の生活資料の價値に等しいのみである。不變資本と可變資本との區別を發見することは、彼等にとつては、彼等の教理それ自體に依つて不可能とされてゐる。勞働はそれ自身の價格を再生産する以上に尙ほ餘剩

價値をも生産するものであるが、斯かる餘剩價値の生産は農業に於ける如く工業に於いても行はれる所である。然るにフキジオクラットの學說に依れば、この餘剩價値生産は農業といふ一つの生産部門に於いてのみ行はれるのであるから、餘剩價値なるものは結局、勞働に起因するものではなく、この生産部門における自然の特殊的な活動(協助)に起因するものと見做されることとなる。フキジオクラットが、農業勞働をば他の勞働種類から區別して生産勞働と見做すに至つたことは、畢竟するところ此理由に基くものに外ならない。

アダム・スミスは、勞働者の生活資料をば固定資本に對立した流通資本の部類に屬するものと見たのであるが、これは畢竟、左の理由に依るのである。

(一)　彼れは固定資本に對立した流通資本を以つて流通部面所屬の資本形態たる流通上の資本と混同した(而してこの混同は、後代の學者に依り無批判的に繼承されたものである)。卽ち彼れは商品資本を以つて生産資本の流動部分と混同したのであつて、かくする時、社會的生産物が商品形態を採る所に在つては、勞働者の生活資料も、勞働者以外の人々の生活資料も、勞働材料も、勞働要具そのものも、總べてみな商品資本の中から供給されねばならぬことになるは自明の事實である。

(二)　然しスミスの思想には又、フキジオクラット的な觀念も混淆されてゐる。尤も此フキジオクラット的觀念は、彼れ自身の推論の奥義的な——現實に於いて科學的な——部分と矛盾するものである。

前貸資本は總じて生産資本に轉化される。換言すれば、生産要素なる形態を採る。(而してこの生産要素なるものはそれ自身また過去勞働の生産物であつて、勞働力をも含んでゐる)。前貸資本なるものは、ただ此形態のもとにのみ生産行程の內部に作用し得るのである。ところで、資本の可變分が轉化されてゆく勞働力そのものの代りに勞働者の生活資料を採つて見るに、生活資料なるものが價値形成の點に於いて他の生産資本要素たる原料や勞働家畜の生活資料などから本質的に區別されるものでないことは明かである。さればアダム・スミスは義に引抄した文章の一つの中で、フキジオクラットの先例に倣ひ勞働者の生活資料を以つて、勞働家畜の生活資料と同一の水準に置いたのである。勞働者の生活資料は、みづから其價値を增殖し得るものではない。換言すれば、餘剩價値を追加し得るものではないのである。この生活資料の價値は、生産資本の他の諸要素の價値と同樣に、ただ生産物の價値に再現し得るのみであつて、自己の有する以上の價値を生産物の價値に附け加へ得るものではない。勞働者の生活資料は原料や半製品などと同樣に、ただ左の事實に依つてのみ、勞働要具より成る所の固定資本から區別される。卽ちそれは(少なくとも、その代價たるべき賃銀を支拂ふ資本家の立場から見れば)、自己の關與に依つて造られる生産物の爲に一括的に消費されるものであり、隨つて其價値は一括的に回收されねばならないといふ事實がそれである。此事實は固定資本の場合には、ただ漸次的、斷片的に行はれるに過ぎない。要するに、勞働力(又は勞働者の生活資料)の爲に前貸される生産資本部分は、ただ素材的方面に於いてのみ、生産資本の他の素材的要素から區別されるのであつて、勞働行程竝びに價値增殖行程の方面に於いては、この區別は與へられるものではないのである。勞働力の購買に前貸される生産資本部分は、對象的なる生産物形成要素の一部が固定資本の部類に屬するに反し、對象的なる生産物形成要素の他の部分(スミスが概括して材料と呼んだもの)と共に流通資本の部類に屬するとの意味に於いてのみ區別されるのである。

勞銀に投ぜられる資本部分は、生産資本の流動部分の領域に屬するものであつて、それが生産資本の固定部分に對立して斯かる流動性を有することは、對象的の生産物形成要素なる原料等との間に共通する所であるが、この事實は資本の不變分と區別した右の可變分が價値增殖行程の上に演ずる役割とは、絕對的に關係するところがないのである。

この事實はただ、前貸資本價値の該部分が、流通に依つて生産物の價値の中から代置され、更新され、隨つて再生産されねばならぬ樣式に關係するのみである。勞働力の購買及び再購買といふ事は、流通行程の領域に屬する問題である。然るに勞働力の購買に投じた價値が、勞働者の立場からではなく資本家の立場から見て、一定の不變量から可變量に轉化され、斯くすることに依り總じて前貸價値が資本價値に、換言すれば自己增殖的の價値に轉化されるといふ事は、生産行程の內部に初めて行はれる所である。けれどもスミスの解した如く、勞働力に投じた價値ではなく勞働者の生活資料に投じた價値を以つて、生産資本の流動部分に屬するものと見るとき、可變資本と不變資本との區別についての理解、隨つてまた資本制生産行程一般についての理解は、これがため不可能となり、右の資本部分が、對象的なる生産物形成要素に投ぜられた不變資本になるといふ事實は、勞働力に投ぜられた可變資本になるといふ事實の下に、埋沒されることとなる。而して此埋沒は、勞働力の代りに勞働者の生活資料をば生産資本の一要素と見ることに依つて、更らに完成されるのである。勞働力の價値が貨幣形態を以つて前貸されるか、それとも直接に生活資料なる形態を以つて前貸されるかといふ事は、どうでも可い問題である。尤も此後ちの場合は、資本制生産のもとに於いては例外となり得るに過ぎないことは言ふ迄もない（二十四）。

（二十四）　勞働力が價値增殖行程の上に演ずる役割の理解に到る通路をば、アダム・スミスが如何ばかり閉塞してゐたかは、フキジオクラットの論法に倣ひ勞働者の勞働を以つて勞働家畜の勞働と同列に置いた左の一句に依つても論證されるところである。――『彼れ（小農業者）の使用する勞働のみではなく、勞働家畜も亦生産的の勞働者である』（『諸國民の富』第二部、第五章、第二四三頁）。

アダム・スミスは斯く流通資本なる性質を以つて、勞働力に投ぜられた資本價値に對する決定的要素と見たのであるが、彼れは幸ひにもこの見解――フキジオクラットの前提に依らざるフキジオクラット的解釋――によつて、勞働力に投ぜられた資本部分をば可變資本として理解することを後繼者にとつて不可能ならしめた。彼れが自ら他の場所にへたヨリ深刻にして妥當なる論究が勝を制しないで、寧ろ右の錯誤的見解の方に勝利が歸したのである。しかのみならず、後代の著述家たちはスミスの此見地から更らに一步を進めた。卽ち彼等は單に、固定資本に對立した意味の流通資本たることを以つて、勞働力に投ぜられた資本部分の決定的特徵たらしめたのみではなく、更らに又、勞働者の消費に歸する生活資料に投ぜられることを以つて、流通資本の本質的特徵たらしめたのである。この見解には當然、生活必需品から成る一定の大さとしての勞働基金の存在を假定し、斯かる勞働基金を以つて、一方には社會的生産物について與へられる勞働者の受分の物理的限界を定めるものとなし、他方には又勞働力を購買する際全部に亙つて支出されねばならないものとなす學說が伴はれることとなつたのである。

第十一章　固定資本及び流通資本に關する諸學說、リカルド

リカルドも固定資本と流通資本との區別に言及してゐるが、然しそれはただ價値律の例外たるべき場合、即ち勞銀の率が物價に影響を及ぼす如き場合を說明せんとする目的を以つてなしたに過ぎないのである。この問題の說明は第三卷に讓る。

然しリカルドの見解に含まれてゐる本源的の不明瞭は、彼れが『固定資本の耐久程度における斯くの如き區別、竝びに此等二種の資本を結合し得べき比例に於ける斯くの如き變異』（二十五）に就いて與へた無頓着な竝置の內に、最初から現はれてゐるのである。

（二十五）リカルド著『經濟原論』第二五頁(1)。

所で、此等二種の資本とは何かと問へば、『同樣に、勞働を維持すべき資本と、道具や、機械や、建物などに投ぜられる資本とを種々樣々に結合し得る比例も亦』（二十六）といふ答が與へられてゐる」即ち固定資本は勞働要具に等しく、流通資本は勞働に投ぜられる資本に等しいといふのである。勞働を維持すべき資本といふ言葉からして既に、アダム・スミスから承け繼いだ不條理な言ひ現はしである。これに依ると、一方に、流通資本は可變資本（換言すれば、勞働に投ぜられた生產資本部分）と混同されることになり、他方に又、此等兩資本の對立は價値增殖行程から汲み來たつたもの（卽ち不變資本と可變資本との對立）ではなく、スミスの混同に倣つて流通行程から得たものであるから、結局二重に虛僞な觀念が生ずることとなる。

（二十六）前揭(2)。

第一に、彼れは固定資本の耐久程度についての區別と、不變資本及び可變資本に依る資本組成についての差異とを、同等のものと見てゐる。けれども此後ちの區別は、餘剩價値生產上の區別を決定するものであるに反し、前の區別は價値增殖行程について言へば、與へられたる價値が生產機關から生產物に移轉される樣式に關係するのみであり、又流通行程について言へば、放下資本が更新される期間（別の見地から言へば、放下資本が前貸される期間）に關係するのみである。されど資本制生產行程の內部的機構を看破するに至らずして、單に完成された現象の立場からのみ問題を觀察するとすれば、右の諸區別は事實に於いて相互一致したものとなる。蓋し社會的餘剩價値が種々異なつた營業部門に投ぜられる諸資本の間に配分される際、種々異なつた資本前貸期間（例へば、固定資本の種々異つた壽命）と、種々異なつた有機的資本組成（隨つてまた、不變資本及可變資本の種々異つた流通）とは、一般的利潤率の平均化及び價値の生產價格化に向つて均等に共同作用するからである。

第二に、流通行程の立場から見れば、一方には固定資本たる勞働要具があり、他方には流通資本たる勞働材料及び勞銀がある。反對に、勞働行程及び價値增殖行程の立場から見れば、一方には不變資本たる生產機關（勞働要具及び勞働材料）があり、他方には可變資本たる勞働力がある。資本の有機的組成（第一卷、第二三章第二節、八二七頁）の立場から見れば、同一の價値量を有する不變資本が多量の勞働要具及び少量の勞働材料より成るか、それとも多量の勞働材料及び少量の勞働要具より成るかといふ事は、全くどうでも可い問題であつて、寧ろ勞働力に投じた資本と生產機關に投じた資本との比例が一切を決定するのである。反對に、流通行程の立場から、固定資本と流通資本との區

別といふ立場から觀察すれば、與へられたる價値量を含む流通資本が如何なる比例を以つて勞働材料と勞銀とに分割されるかといふ事は、矢張り何うでも可いことになるのである。卽ち一方の立場から見れば、勞働材料は勞働要具と同一の部類に屬して、いづれも勞働力に投じた資本價値と對立することとなり、他方の立場から見れば、勞働力に投じた資本分は勞働材料に投じた資本分と同一の部類に屬して、いづれも勞働要具に投じた資本分と對立することとなる。

かくしてリカルドの見解に於いては、勞働材料(原料及び助成材)に投じた資本價値分は何づれの側にも現はれず、全く消え失せてしまふこととなる。この價値分は、流通樣式の上から見れば、勞働力に投じた資本分と全く一致するものであるから、固定資本の側には適合しないのであるが、さればといつて流通資本の側に置く譯にも行かないのである。かくする時は、固定資本對流通資本の區別と不變資本對可變資本の區別とを同一視する所の、アダム・スミスから承け繼いで暗默の間にリカルドの見解を一貫してゐる立場が廢除されることとなるからである。リカルドは此事實を感知せずに居るには、餘りに多くの論理的本能を有してゐた。かくして彼れの見解に於いては、この資本部分は全く消滅することとなつたのである。

玆に注意を要することは、經濟學上の用語に從へば、資本家は勞銀に投じた資本をば一定の期限——勞銀が例へば毎週支拂はれるか、毎月支拂はれるか、それとも三ケ月毎に支拂はれるかに隨つて、種々異なる所の——を以つて前貸するといふことになるのであるが、事實は寧ろ反對であつて、勞銀が毎週支拂はれるか、毎月支拂はれるか、それとも三ケ月毎に支拂はれるかに隨ひ、或は一週、或は一ケ月、或は又三ケ月なる期限を以つて、勞働者の方から資本家に勞働を前貸するのである。資本家が若し勞働力の代價を支拂ふといふのみでなく、事實に於いて勞働力を購買するものとすれば、卽ち一日分なり、一週分なり、一ケ月分なり、三ケ月分なりの勞銀を勞働者の手に前拂するものとすれば、彼れは此等の期限を以つて資本を前貸するものと言ひ得るであらう。けれども彼れは勞働を購買して、その繼續すべき期間分の代價を支拂ふのではなく、寧ろ勞働が數日、數週、又は數ケ月間繼續した後に其代價を支拂ふのであるから、この場合一切の事態は資本家的の首尾轉倒を意味することとなり、勞働者が勞働の形を以つて資本家の手に與へる前貸は、資本家が貨幣の形を以つて勞働者の手に與へる前貸に轉化されてしまふ。資本家がただ一定の期間——生產物の生產又は流通に要する時間の如何に隨つて大小の差を生ずる所の——を經た後にのみ、生產物それ自身又は其價値をば、それに合體されてゐる餘剩價値と一括して流通の內部から回收又は實現するといふ事實は、以上述ぶる所に何等の變化をも與ふるものではない。商品の購買者が其商品を如何に處分せんとするかといふ事は、販賣者から見れば全く何うでも可い問題である。機械の價値はただ漸次的に斷片的にのみ流通の內部から回流して來るに拘らず、資本家は其價値の全部を一時に前貸せねばならぬものであるが、斯樣な理由に依つて彼れは機械をヨリ價安く購買するものではない。また棉花の價値は棉花を以つて製造される生產物の價値に全部一括して移轉され、隨つて此生產物の販賣に依り一時に全部回收されるものであるが、斯かる理由に依つて彼れは棉花をヨリ價高く購買するものではないのである。

リカルドに論を戻さう。

(一)　一定の與へられたる(その意味に於いて又不變的なる)資本部分、換言すれば勞働力の價値に等しきものと假定する所の(尤も賃銀が勞働力の價値に等しいか、或はヨリ大であるか、小であるかといふ問題は、此場合關係するところがないのである)與へられたる價値高が、自己增殖力であり、價値造出力である勞働力——それは資本家に

依つて代價を支拂はれる自己の價値を再生産するのみではなく、同時にまた、豫じめ存在することなく、何等の等價を以つても購買せられることなき一價値たる餘剩價値をも生産するのである——と交換されるといふ事、これは實に可變資本の特徴たる事實である。勞銀に投ぜられる資本部分の斯くの如き特質に依つて、この資本部分は可變資本として不變資本から全く區別されることとなるのであるが、斯かる特質は、勞銀に投ぜられる資本部分をば單に流通行程の立場からのみ觀察し、かくして此資本部分が勞働要具に投ぜられる固定資本に對立した流通資本といふ形を採るに至るや否や消滅してしまふのである。之れは次の事實に依つても既に知られることである。卽ち斯かる場合には、勞銀に投ぜられた資本部分は不變資本の一部（勞働材料に投ぜられた資本部分）と共に同一の流通資本たる部類に屬して、不變資本の他の部分（勞働要具に投ぜられた資本部分）と對立することとなるといふ事實がそれである。餘剩價値のこと、隨つて又放下價値額を資本に轉化せしむる事實のことは、この場合全く問題外に置く。同樣に、勞銀に投ぜられた資本に依つて、生産物に附け加へられる價値部分は新たに生産されるものであつて、現實的に再生産されることとなるのであるが、原料に依つて生産物に附け加へられる價値部分の方は新たに生産されるものではなく、現實的に再生産されるものではなくて、ただ生産物價値の中に保存されるに過ぎず、隨つて生産物の價値部分として再現するに過ぎないといふ事實も亦、この場合問題外に置く。流通資本と固定資本との對立といふ見地から得られる區別は、畢竟するところ左の事實に存するのみである。卽ち商品の生産に充用される勞働要具の價値は、ただ部分的にその商品の價値に移轉されるのみであり、隨つて又その商品の販賣に依りただ部分的にのみ回收されるに過ぎず、總じてただ斷片的に漸次的にのみ回收されるものであるが、商品の生産に充用される勞働力及び勞働對象（原料その他）の價値は寧ろ一括的にその商品に移轉され、隨つてその商品の販賣に依つて全部的に回收されるといふ事實がそれである。

斯かる意味に於いて、流通行程の上から一方の資本部分は固定的のものとして、他方の資本部分は流動的（流通的）のものとして表現されることとなる。右に擧げた兩場合の何づれに於いても、與へられたる前貸價値が生産物に移轉され、生産物の販賣に依つて回收されるといふ事實が問題となるのである。價値移轉、隨つて又價値回收が、斷片的に行はれるか、それとも一時に行はれてしまふかといふ點にのみ、今や區別が存することとなるのであつて、之れが爲め可變資本と不變資本との間の萬事決定的な區別は消滅し、かくして餘剩價値の成立と資本制生産とに關する金融上の一定の價値及びそれを表現する所の物件をば資本に轉化せしめる所の諸事情は、抹除されることとなるのである。資本の凡ゆる成分は、今やただ、流通樣式に依つてのみ區別されることとなる。（而して商品の流通に於いては、與へられたる既存價値が專ら問題となるものであることは言ふ迄もない）。勞銀に投ぜられる資本と、原料、半製品、助成材等に投ぜられる資本部分との間には、共通の特殊的な流通樣式が存するのであつて、この事實に依り此等の資本部分は勞働要具に投ぜられる資本部分と相對立するものとなるのである。

斯樣な次第であるから、『不變資本及び可變資本』なる範疇と『固定資本及び流通資本』なる範疇とを混同したアダム・スミスの見解をばブルヂョア的經濟學が本能的に固執して、一世紀の間代々それを無批判的に繰返し來たつたことは、その理を解するに難くないのである。ブルヂョア的經濟學から見れば、勞銀に投ぜられる資本部分は最早決して原料に投ぜられる資本部分から區別されるものではなく、ただ形式上にのみ——卽ちそれが生産物を通して斷片的に流通せしめられるか、全部的に流通せしめられるかといふ點に於いてのみ——不變資本から區別されるに過ぎない。かくして資本制生産（隨つて又資本主義的搾取）の現實的運動を理解すべき根柢は一擧的に埋沒せられ、單に前貸價

値の再現といふ事のみが問題となつて來る。

上述の如きスミス流の混同をば無批判的に採用することは、後年の辯護論者たち——彼等にとつては概念混亂といふ事は寧ろ邪魔とはならなかつたのである——は勿論、アダム・スミス自身にとつてすら邪魔となつたものであるが、リカルドにとつては更らに著しくさうであつたのである。なぜならば彼れは、スミスよりも一層徹底的に且つ鋭く、價値及び餘剩價値を分析し、實際のところ小乘的なアダム・スミスに對抗して大乘的のアダム・スミスを支持したからである。

フヰジオクラットの間には斯種の混同は毫も見受けられなかつた。彼等の主張した年前貸と原前貸との區別は資本（特に農業資本）の種々なる成分の再生產期間の差に關するのみである。然るに餘剩價値の生產に關する彼等の見解は、斯かる區別から獨立した彼等の學說部分を構成するものであつて、彼等の學說中の樞要部分として强調された所のものである。餘剩價値の形成は、それ自體としての資本に依つて說明されるものではなく、資本の一定生產部面たる農業にのみ基くものとされたのである。

（二）可變資本の性質決定上における——隨つて又何等かの價値高を資本に轉化せしむるについての——本質的要件は、資本家が一定の與へられたる、その意味に於いて不變的なる價値量をば、價値造出力と交換するといふことである。換言すれば、一つの價値量をば、價値生產（價値の自己增殖）と交換するといふことである。資本家が勞働力の代價を貨幣の形で支拂ふか、生活資料の形で支拂ふかといふことは、この本質的決定要件の上に何等の變化をも與へるものではなく、ただ資本家に依つて前貸される價値の存在樣式を變化せしめるに過ぎないのである。卽ち此價値は一方の場合には、勞働者が自ら市場に於いて生活資料を購買すべき貨幣なる形態のもとに存在し、他方の場合には、勞働者に依つて直接消費される所の生活資料なる形態のもとに存在するのである。發達した資本制生產は實際のところ、勞働者に對する支拂が貨幣の形を以つてなされるといふ前提のもとに立つ。蓋し斯くの如き資本制生產は流通行程の媒介を受くる生產行程の存在を前提し、隨つて貨幣經濟の存在を前提することを通則とするからである。けれども餘剩價値の造出、隨つて又前貸價値の資本化といふ事實は、勞銀（換言すれば勞働力の購買に投ぜられる資本）の貨幣形態にも現物形態にも起因するものではなく、寧ろ價値を價値造出力と交換するといふ事實に、一つの不變量を一つの可變量に轉化せしめるといふ事實に起因するものである。

勞働要具の固定性の大小は勞働要具の耐久程度の如何に懸るものであつて、物理的の一性質に倚存するのである。勞働要具なるものは、他の事情に變化なき限り、その耐久程度の如何に隨つて磨滅の上に緩急の差を生じ、かくして固定資本たる機能を盡す期間の上にも長短の差を生ずることとなるのであるが、然し此耐久といふ物理的性質のみに依つて勞働要具は固定資本たる機能を盡すに至るものではない(3)。金屬製造工場に使用される原料は、金屬製造上に使用される機械と同樣の耐久程度を有し、此機械の多くの組成部分たる皮革木材などに比べると耐久程度がヨリ高いのである。それにも拘らず、原料として役立つ金屬は、流通資本の一部となり、恐らく同一の金屬を材料として造られたかも知れぬ使用勞働要具の方は、固定資本の一部となるのである。卽ち同一の金屬をして一方の場合には固定資本の部類に屬せしめ、他方の場合には流通資本の部類に屬せしめるものは素材的の物理的性質ではなく、換言すれば此金屬の磨滅程度の大小といふ事ではない。右の區別は寧ろ同一の金屬が生產行程の上に演ずる役割の差、卽ち一方の場合にはそれが勞働對象として役立ち、他方の場合には勞働要具として役立つといふ差に起因するものである。

勞働要具が生產行程の上に盡す機能に依つて、勞働要具なるものは通常、大なり小なりの期間、反復的の勞働行程

內に絕えず新たに役立つべきものであるとのことが必要となつて來る。卽ち勞働要具なるものは、その機能上大なり小なりの耐久性ある素材から成ることが必要となつて來るのである。けれども勞働要具を組成する素材の耐久性は、それ自身に於いて勞働要具を固定資本たらしめるものではない。勞働要具と同一の素材も、原料として使用される場合には流通資本となる。而して商品資本對生產資本の區別と混同する經濟學者の目から見れば、同一の素材、同一の機械が生產物としては流通資本となり、勞働要具としては固定資本となるのである。

かくの如く、勞働要具を固定資本たらしめるものは、その組成素材の耐久性ではないのであるが、然し勞働要具が勞働要具として演ずる役割は、勞働要具なるものが相對的に耐久力ある材料から成る事を必要ならしめるのである。卽ち勞働要具の素材の耐久性は、勞働要具が勞働要具として盡す機能の一條件となるものであり、隨つて又、勞働要具を固定資本たらしめる流通樣式の物質的基礎ともなるのである。他の事情に變化なき限り、勞働要具なるものは、其素材の磨滅性の大小に反比例した程度を以つて固定性を附與せられるものである。卽ち勞働要具の磨滅性は、其固定資本たる性質と極めて本質的に結び付けられてゐるのである。

所で、勞銀に投じた資本部分をば固定資本に對立せる流通資本としてのみ觀察し、隨つて不變資本對可變資本の區別をば固定資本對流通資本の區別と混同するとすれば、勞働要具の素材的現實性が其固定資本たる性質の本質的基礎となると同樣に、また此資本に對立させて勞働力に投じた資本の素材的現實性の中から其流通資本たる性質を推論し、然る後、更らに可變資本の素材的現實性に依つて流通資本を決定するといふことになるのは當然の順序である。

勞銀に投じた資本の現實的素材は、卽ち勞働それ自身である。換言すれば、自己を實現し價値を造出しつつある勞働力である。卽ち生きた勞働である。資本家は死んだ過去勞働を以つて此生きた勞働と交換し、それを自己の資本に合體せしめるのである。斯くすることに依つて初めて、彼れの手に在る價値は、自己增殖的の價値に轉化されるのである。けれども此自己增殖力は、資本家に依つて販賣されるものではない。それは勞働要具と同樣、つねに彼れの生產資本の組成分たるに過ぎぬものであり、決して彼れの商品資本——例へば、彼れが販賣する完成生產物の如き——の組成分たるものではない。生產行程の內部に於いては、卽ち生產資本の組成分として見れば、勞働要具は固定資本として勞働力に對立するものではなく、また勞働材料及び助成材は流通資本として勞働力と一致するものでもない。勞働要具も勞働材料及び助成材も、共に生產上の物的因子であつて、勞働力は人的因子として兩者に對立するのである。これは勞働行程の立場から見たことであるが、更らに價値增殖行程の立場から見れば、勞働要具も勞働材料及び助成材も、共に不變資本として可變資本たる勞働力に對立するのである。或は又この場合問題となるべきものが、流通行程に影響を及ぼす方面から見た素材上の差異であるとすれば、其差異とは畢竟するところ、對象化された勞働に外ならざる價値と、對象化しつつある勞働に外ならない自己を實現しつつある勞働力との性質に依つて、次の結論が生ずるといふ事に過ぎぬのである。卽ち勞働力なるものは、其機能を盡しつつあるとき絕えず價値及び餘剩價値を造り出すものであつて、勞働力の方面に運動として、價値の造出として表現される所のものは、生產物の方面に於いては造り出された價値といふ靜態を以つて表現されるといふ事に過ぎないのである。勞働力が機能を盡してしまへば、資本はもはや一方における勞働力と、他方における生產機關とから成るものではなくなる。勞働力に投ぜられた資本價値は、今や餘剩價値と相合して生產物に附け加へられた價値となるのである。生產行程を反復する爲には、生產物を販賣し、それに依つて得た貨幣を以つて絕えず新たに勞働力を購買し、それを生產資本に合體せしめなければならない。斯くして勞働力に投ぜられた資本部分は、勞働材料などに投ぜられた資本部分と同樣に流通資本なる性質を與

へられ、勞働要具に固定した資本と對立することとなるのである。

反對に若し、不變資本の一部分たる原料及助成材にも共通する所の、流通資本なる第二義的性質――放下價値はそれを消費することに依つて造られた生産物の上に一括的に移轉されるものであつて、固定資本の場合における如く漸次的に斷片的に移轉されるものではなく、隨つて生産物の販賣に依り一括的に代置されねばならないといふ性質――を以つて勞働力に投ぜられた資本部分の本質的特徴たらしめるとすれば、斯かる場合には勞銀に投ぜられた資本部分も亦、素材の點に於いて自己實現的の勞働力から成るものではなく、寧ろ勞働者が賃銀を以つて購買する所の素材的諸要素から成るものとならなくてはならない。換言すれば、勞働者の消費に歸すべき社會的商品資本部分たる生活資料から成るものとならなくてはならない。この場合、固定資本は徐々に磨滅する所の、隨つて又徐々に代置されねばならぬ所の勞働要具から成り、勞働力に投ぜられた資本は急速に代置されねばならぬ生活資料から成ることとなる。けれども磨滅の急速又は緩慢といふことの限界は不明に歸するのである。

『勞働者の消費する食物及び衣服、勞働者の依つて勞働する建物、勞働者の勞働を助ける器具、此等の物は總べて磨滅的の性質を有するものである。けれども此等種々なる資本の持續すべき時間の上には非常な差異がある。蒸氣機關は船よりも長く持續し、船は勞働者の衣服よりも、勞働者の衣服は又、彼れの消費する食物よりも長く持續する』(二十七)。

(二十七)リカルド著『經濟原論』第二七頁。

リカルドは此場合、勞働者の居住する家屋や、勞働者の使用する家具類や、勞働者の消費上に使用される器具類(ナイフ、フォーク、皿その他の如き)などを擧げることを忘れてゐる。此等の物は何づれも勞働要具と同樣の耐久性を有するものであつて、同一の物件、同一種類の物件が、一方の場合には消費要具として現はれ、他方の場合には勞働要具として現はれることとなるのである。

リカルドの謂ふ區別とは左の如きものである。卽ち『資本なるものは急速に磨滅して屢々再生產されることを要するか、又は緩漫に消費されるかの如何に從つて、或は流通資本の部類に屬し、或は又、固定資本の部類に屬することとなるのである』(二十八)。

(二十八)リカルド原論。

彼れは更らに附け加へて言ふ。――『この區別は本質的のものではなく、劃然たる分界線を引くことの出來ないものである』(二十九)と。

(二十九)リカルド原論。

斯くして我々は幸ひにも、フキジオクラットの謂ふ年前貸と原前貸との區別は、消費の期間、隨つて又、充用資本の樣々な再生產期間に關はるからである。ただ異なる所は、フキジオクラットの見解に於いては社會的生產上の重要なる一現象を言ひ現はし、尙また『經濟表』の中では流通行程と關聯させて說明されてゐる所のものが、リカルドの見解に於いては主觀的にして且つ――彼れ自身の言ふ如く――不用なる區別に歸してしまふといふ一點のみである。

勞働に投ぜられた資本部分が其再生產期間と隨つて又流通期間とに依つてのみ、勞働要具に投ぜられた資本部分から區別されることとなるや否や、更らに一方の資本部分は生活資料から成り、他方の資本部分は勞働要具から成り、而して後者はただ耐久程度に依つてのみ前者から區別されるに過ぎないと同樣に、前者自身の間にも亦耐久程度の種種なる差異が示されることとなるや否や、斯かる場合勞働力に投ぜられた資本と生產機關に投ぜられた資本との間に

存する一切の特殊區別が消滅に歸することは言ふ迄もない。

けれども此事實は、リカルドの價値說竝びに利潤說（彼れの利潤說は事實に於いて餘剩價値說である）と全く矛盾するものである。彼れは總じて、相異つた營業部門における等額の資本に含まれる固定資本と流通資本との種々異なつた比率が價値法則の上に影響を及ぼす限りに於いてのみ、而して又斯かる事情の結果、勞銀の增騰もしくは低減が如何なる程度まで物價に影響を及ぼすかとの問題に關係ある限りに於いてのみ、固定資本と流通資本との區別を考察してゐるに過ぎない。而も斯かる局限された研究の範圍内に於いてさへ、彼れは固定資本及び流通資本をば不變資本及び可變資本と混同せるため、此上なき大錯誤に陷り、事實に於いて全く謬まれる研究基礎から發足することとなつたのである。要するに彼れは（一）勞働力に投じた資本價値部分は之れを流通資本の部類に屬せしむべきであるとの方面に於いては、流通資本そのものの性質と、特に又勞働に投じた資本部分とが相互對立せしめられるこいて錯誤的の說明を與へ、更らに（二）勞働に投じた資本部分をば可變資本たらしむる條件と、固定資本に對立した意味の流通資本たらしむる條件とを混同してゐるのである。

勞働力に投じた資本をば流通的（又は流動的）のものとすることは、第二義的の定義であつて、生産行程の上における此資本の特殊區別を抹除するものとなることは、最初より明かな事實である。蓋し此定義は一方に於いて、勞働に投ぜられる資本と、原料その他の物に投ぜられる資本とを同等のものと見るのであつて、不變資本の一部を可變資本と同一視する所の斯くの如き分類は、不變資本の特殊區別とは全く沒交涉のものである。他方に又、右の定義に依つて、勞働に投ぜられる資本部分と、勞働要具に投ぜられる資本部分とが相互對立せしめられることは事實であるが、然し此對立は兩資本部分が全く相異つた樣式を以つて價値生産に關與するといふ事實に據らしめられずして、寧ろ兩資本に含まれる一定の價値が相異つた期間を以つてのみ生産物に移轉されるといふ事實に據らしめられてゐるのである。

以上すべての場合を通じて問題となることは、勞銀としてにしろ、原料の價格としてにしろ、又は勞働要具の價格としてにしろ、兎にかく商品の生産行程に投ぜられた一定の價値が、如何にして生産物に移轉され、かくして又生産物を通じて流通せしめられ、生産物の販賣に依つて其出發點に復歸せしめられるか（換言すれば代置されるか）といふ事實である。此場合における唯一の區別は、右の『如何にして』といふ一點、卽ち右の價値が移轉され隨つて又流通せしめられる特殊の樣式に關聯してゐるのである。

各場合に契約を以つて豫め決定された勞働力の價格が、貨幣の形で支拂はれるか、生活資料の形で支拂はれるかといふ事は、この價格が一定の與へられたる價格であるとの事實を毫も變化せしめるものではない。けれども勞銀が貨幣の形で支拂はれる場合には、斯かる貨幣そのものが生産行程に入るものでないことは明かである。此點は生産機關の場合と異なる所であつて、生産機關に在つては單に價値のみでなく素材も亦生産行程に入るのである。然るに勞働者が賃銀を以つて購買する所の生活資料をば流通資本の素材的形態と見做して直接に原料などと同一の部類に屬せしめ、勞働要具と對立せしめるといふことになると、問題は異なつた外觀を採るやうになる。後者卽ち生産機關の價値が、勞働行程の内部に於いて生産物に移轉されると同樣に、前者卽ち生活資料の價値も亦、それを消費する所の勞働力の上に再現し、この勞働力の實現を通して生産物に移轉されるのである。生産上に前貸された價値が、生産物に再現するといふ單にそれだけの事が問題となる點は、右の何づれの場合にも共通する所である。（フキジオクラットは此問題を眞面目に解して、產業勞働が餘剩價値を造り出すといふ事實を否認するに至つたのである）。此事實は曩に

引抄したウェーランドの文章の中にも述べられてゐる。彼れは曰く、『資本が如何なる形態を以つて再現するかといふ事は問題ではない。……人類の生存と福祉とに必要なる各種の衣食住も亦、同様に變化を受くるものであつて、此等の物は時經る間に消費され、その價値は再現する事となるのである』云々（『經濟要論』第三一及三二頁）と。生産機關及び生活資料の形で生産上に前貸される兩資本價値は、この場合等しく生産物の價値に再現するものであつて、之れがため資本制生産行程は幸ひにも完全なる神祕と化し、生産物の中に含まれる餘剩價値の起原は全く隱蔽されてしまふのである。

尙また之れがため、ブルヂョア經濟學に獨特の魔術——社會的生産行程を通して物に刻みつけられる社會的、經濟的の性質をば、物の素材的實質に基く自然的の一性質に轉化せしめる所の——は完成されることとなる。例へば勞働要具は固定資本であると言ふ。然し之れは、矛盾と混亂とを生ぜしめる所の煩瑣哲學的な定義である。對象的の諸要素が勞働要具として作用するか、勞働材料として作用するかは、此等の要素が各場合に一定の勞働行程の内部に演ずる役割の如何に、換言すれば其機能の如何に、全く倚存するものであることは、勞働行程の分析の際（第一卷第五章、二〇八頁）論證した所であるが、それと同樣に、勞働要具が固定資本となるのは、生産行程が總じて資本制生産行程であり、隨つて又生産機關が一般に資本であつて、資本といふ經濟上限定された社會的性質を有する場合に限られるのである。而して又第二に、勞働要具なるものは特殊の樣式を以つて其價値を生産物に移轉する場合に限り固定資本となるのであつて、然らざる場合には、それは勞働要具たるに止まり、固定資本とはならないのである。また肥料の如き助成材も、それ自身何等の勞働要具ではないに拘らず、勞働要具の大部分が爲す所と同一の特殊樣式を以つて價値を移轉する場合には矢張り固定資本となる。要するに物を主眼とした定義は、この場合問題となるものではなく、寧ろ一定の範疇に言ひ現はされた一定の機能が問題となるのである。

勞銀に投ぜられた資本たることを以つて、あらゆる事情のもとにおける生活資料そのものに屬すべき一資格と見るとすれば、『勞働を維持する』（リカルド原論第二五頁）といふことは又、この『流通資本』の性質となる譯である。この見地に依ると、生活資料はそれが『資本』でないとすれば、勞働力を維持するものとはならぬ筈である。然るに生活資料なるものは正に其資本たる性質によつて、他人の勞働に依り資本を維持するといふ資格を附與されるのである。

生活資料がそれ自身に於いて流通資本（勞銀に轉化された後における）であるとすれば、更らに次の結論が生じて來る。卽ち勞銀の大小は、與へられたる流通資本量に對する勞働者數の比例の如何に懸るといふことがそれである。これは好んで使用される經濟學上の命題であるが、事實に於いては寧ろ勞働者に依つて市場から引き上げられる生活資料の分量と資本家の消費に利用し得べき生活資料の分量との大小は、勞働の價格に對する餘剩價値の比例の如何に懸るのである。

リカルドはバルトン（二十九）と同樣に、到るところ可變資本對不變資本の比例をば、流通資本對固定資本の比例と混同した。之れがため、利潤率に關する彼れの研究が如何ばかり害はれたかは、後に說く通りである。

（二十九）『社會に於ける勞働階級の狀態に影響ある事情の觀察』ロンドン、一八一七年刊。本文中に說いたところに該當する此書の一節は、資本論第一卷中（八四〇頁、註七十九）に引抄してある。

リカルドは更らに、固定資本と流通資本との區別以外の原因に基く回轉上の諸區別をば、固定資本と流通資本との區別と同一視してゐる。彼れは言ふ。——『流通資本なるものは、極めて不等の期間を以つて流通し又は其使用者の

手に復歸し得るものであるといふ事實も、注意を要する所である。農夫が播種の目的を以つて購買する所の小麥は、パン燒業者がパンに造る目的を以つて購買する所の小麥に比すれば一つの固定資本である。農夫は此小麥を地中に放置し、一年を經過した後でなければそれを回收し得ないのであるが、パン燒業者の方はそれを粉に磨かしめ、パンとなして顧客に販賣し、かくして一週間以內に、同一の操作を更新し又は他に何等かの操作を開始するため自由に利用し得べき資本を回收することとなるのである』（三十）。

（三十）リカルド原論、第二六及二七頁。

種子として使用される小麥は、生活資料として役立つものではなく、原料として役立つものであるに拘らず、一方にはそれ自身に於いて生活資料であるが故に流通資本となり、他方には其回流に一年の經過を要するが故に固定資本になるといふことは、右の說明における特徵的な事實である。けれども一の生產機關が固定資本たらしめられるのは、單に回流が緩漫に行はれるか急速に行はれるかといふ事のみに依るものではなく、寧ろ生產物に價値が移轉される一定の樣式に依るのである。

アダム・スミスに依つて與へられた混亂は、左の諸結果を生ずるに至つた。——

（一）固定資本と流通資本との區別をば、生產資本と商品資本との區別と混同すること。一例を擧ぐれば、同一の機械が商品として市場に存する場合には流通資本となり、生產行程に合體された場合には固定資本になるといふのである。斯かる見地を以つてしては、一定種類の資本が何故他の資本よりも固定的であらねばならぬかを確めることは、絕對に不可能となる。

（二）一切の流通資本を以つて、勞銀に投ぜられた（又は投ぜらるべき）資本と同一視すること。これはジョン・

チスュアート・ミル其他の學者に依つて爲された所である。

（三）可變資本と不變資本との區別は、既にバルトンやリカルド其他の學者に依つて、流通資本と固定資本との區別と混同された所であるが、それが遂には全く此後ちの區別と同一のものと見做されるやうになること。これは例へばラムセーに依つて爲された所であつて、彼れは原料其他の物及び勞働要具を含む一切の生產機關を以つて固定資本と見做し、ただ勞銀に投ぜられる資本のみを流通資本と見做したのである。けれども問題を斯かる形態に約元する時、不變資本と可變資本との現實的區別は理解されないこととなるのである。

（四）一切の問題を言語に絕した狹隘なる銀行事務員的の見地から觀察する所の、最近に於けるイギリス殊にスコットランドの經濟學者たち（マクラウドやパターソン其他の如き）は、固定資本と流通資本との區別を以つて、通知預金と無通知預金（a）との區別に轉化したのである。

第十二章　勞働期間

勞働日の大さの等しき、たとへば一日に十時間の勞働行程を有する、二つの營業部門たる、木綿紡績業と機關車製造業とを例に採らう。木綿紡績業の方は、月々又は毎週、一定量の完成生産物たる綿絲を供給するのであるが、機關車製造の方は、完成生産物たる一臺の機關車を造り上げる爲に、恐らく三ケ月の間勞働行程を反復せねばならぬであらう。木綿紡績業の生産物は可分的性質のものであつて、それを生産する爲に、日々又は毎週、同一の勞働が新らたに開始される。然るに機關車製造業の勞働行程は連續的のものであつて、ヨリ多數の日勞働行程を含み、隨つてヨリ長期間に亙るものである。此等の日勞働行程は互ひに結合し連續して作用するものであつて、長期間を經過したのち初めて一つの完成生産物を供給するのである。

右の何づれの産業に於いても、日勞働行程の繼續は同一であるが、生産行爲の繼續、換言すれば商品として市場に送り出す迄に完成された生産物（卽ち生産資本から商品資本に轉化された生産物）を供給するに必要な反復的諸勞働行程の繼續の上には極めて著しき區別がある。けれども固定資本と流通資本との區別は、斯かる區別とは何等關係する所なきものである。かやうな區別は、兩營業部門に充用される固定資本と流通資本との量が、嚴密に同一の比例を保つ場合にも尙ほ存在し得るであらう。

生産行爲繼續上の斯かる區別は、單に各異なつた生産部面の間に存するのみではなく、また同一なる生産部面の內部にも、供給すべき生産物の範圍の如何に從つて生ずるものである。通常の住屋は、大工場よりも短期間に築造される。隨つて其築造に要する連續的勞働行程の數はヨリ少なくなる譯である。一臺の機關車を造るには三ケ月を要するが、一艘の甲鐵艦を造るには一年又はそれ以上の年月を要する。また穀物の生産には數年を要するが、樹木を培養して木材を生産するには十二年乃至一百年を要し得るのである。田舍道を造るには恐らく數ケ月を以つて十分であらうが、鐵道を敷設するには數年を要する。また通常の絨氈ならば恐らく一週間で造り得るであらうが、ゴベリン絨氈の製造には數年を必要とする等、等。要するに生産行爲繼續上の區別は限りなく多樣のものである。

生産行爲繼續上の區別は又、等額の投資における回轉速度の差、換言すれば與へられたる一資本の前貸期間の差を生ぜしめねばならぬことは明かである。今、機械紡績工場と機關車製造所とに於いて等額の資本が充用され、而して此等の資本の不變分と可變分との比例は同一であり、又その固定分と流動分との比率も同一であるとし、最後に勞働日の大さが等しく、その必要勞働と餘剩勞働とに分割される比例も亦同一であると假定しよう。更らに此場合にとつては外部的である所の、流通行程に基く一切の事情を削除するため、綿絲と機關車との雙方が註文を受けて製造され、完成生産物の引渡しの際その代價が支拂はれるものと假定しよう。一週を經過した後、完成綿絲を引渡す際、紡績業者は（この場合、餘剩價値のことは問題外に置く）放下流通資本を回收し、同樣に又、綿絲價値の中に含まれてゐる固定資本の磨滅分に相當した價値をも回收するのである。かくして彼れは、同一の資本を以つて同一の循環を新らたに繰り返すことが出來る。彼れの資本は回轉を爲し了へたのである。

然るに機關車製造業者の方は、三ケ月の間每週たえず新たなる資本を勞銀及原料に投下しなければならぬ。而して三ケ月が過ぎて機關車を引渡した後に初めて、この期間に同一の商品を製出するため漸次同一の生産行爲に投ぜられ

た流通資本は、新らたに循環を開始し得る形態に復歸する。同樣に、右の期間に磨滅した機械價値分も亦三ケ月後の今、初めて回收されることとなるのである。

卽ち紡績業者の投資は一週間に亙るものであるが、機關車製造業者の投資は一週間の投資の十二倍に當る。隨つて他の總べての事情に變化なき限り、後者は前者に比し十二倍の流通資本を支配して居らねばならぬ譯である。

然し每週の前貸資本が等額であるといふ條件は、此場合どうでも可いことである。前貸資本の大さはどうであらうとも、前貸の期間は紡績業の場合には一週間のみであり、機關車製造業の場合には十二週間であつて、此等の期間を經過した後に初めて資本の運用を更新することが出來る。換言すれば、其資本を以つて同一の作業を反復し、又は他の異なつた作業を開始することが出來るのである。

回轉速度の差、卽ち個別的の資本が新らたなる勞働行程又は價値增殖行程に再使用され得るに先だつて前貸されねばならぬ期間の差は、左の事情に依つて生ずるものである。——

今、機關車又は他の何等かの機械を製造する爲に一百勞働日を要すると假定しよう。紡績業及び機械製造業に雇傭される勞働者について言へば、一百勞働日なるものは何づれの場合にも可分的の一分量を成してゐる。卽ち曩の假定に依れば、逐次的に進行する別々の十時間勞働行程一百から成るものである。然るに生産物（機械）について見ると、この一百勞働日は一つの連續量、換言すれば一千勞働時間を含む一勞働日を成すものであつて、聯絡ある單一の生産行爲を形づくるのである。何等かの程度に於いて數多き相互聯絡ある諸勞働日の逐次的結合に依つて生ずる斯くの如き一勞働日を、私は勞働期間（1）と名づける。勞働日と言ふ場合には、勞働者が日々その勞働力を支出せねばならぬ（卽ち日々勞働せねばならぬ）勞働時間の長さを指すのであるが、勞働期間と云ふ場合には、一定の營業部門に於いて完成生産物を供給するに必要な相互聯絡した諸勞働日の數を指すこととなるのである。各勞働日の生産物は、この場合部分生産物に過ぎないのであつて、それは日一日と手を加へられ、大なり小なりの勞働期間の終了せるとき初めて完成した形態を與へられ、一つの完成使用價値となるのである。

隨つて、例へば恐慌の如き原因によつて、社會的生産行程の上に中絶を來たし攪亂を生じた場合、斯かる現象が可分的性質の勞働生産物と、聯絡ある長期間の勞働を要する生産物との上に及ぼす影響は極めて相異なるものである。前の生産物について言へば、今日一定量の綿絲や石炭などが生産されて、明日は最早何等の綿絲も石炭も生産されないといふ場合が生じ得る。然るに船舶、建物、鐵道などの場合になると趣が異なつて來る。此等の生産物に於いては、單に勞働が中絶されるのみではなく、また聯絡ある生産行爲も中絶を來たすこととなるのである。工作が更らに進行しないとすれば、過去に於いて生産上に消費された生産機關と勞働とは無益に支出されたこととなる。それが再開始されるにしても、中絶期間には惡化の生ずることを常とするのである。

生産物が完成される時まで日々固定資本から生産物に移轉される價値部分は、全勞働期間の繼續中に層を成して蓄積される。而して又此點に、固定資本と流通資本との區別の、實際上に重要なる方面が現はれて來るのである。固定資本なるものは長期間生産行程に前貸されるものであつて、この恐らく數ケ年に亙る期間の經過後でなければ更新される必要はないのである。蒸氣機關が其價値を日々斷片的に、可分的な一勞働行程の生産物である綿絲に移轉するにしろ、又は三ケ月に亙つて、聯續的な一生産行爲の生産物である機關車に移轉するにしろ、蒸氣機關の購買に要する資本の放下といふ事實は、之れがため何等の變化をも與へられるものではない。前の場合には蒸氣機關の價値は少量づつ（例へば每週）回流し、後の場合には大纏めに（例へば三ケ月毎に）回流するといふ差はあるけれども、蒸氣機

關が更新されるのは、何づれの場合にも恐らく二十ケ年後のことであらう。生産物の販賣に依つて蒸氣機關の價値が斷片的に回流し來たる各個の期間が、蒸氣機關それ自身の生存期間よりも短小である限り、同一の蒸氣機關は幾回かの勞働期間に亙つて生産行程内に作用を續けるのである。

ところが、前貸資本の流通部分になると趣きが異なつて來る。即ち今週購買した勞働力は、今週中に支出されて生産物に對象化される。その代價は今週末に支拂はれなければならぬ。而して勞働力に對する斯くの如き投資は、三ケ月の間毎週反覆されるのであつて、その間資本家は今週放下した此資本部分を以つて、來週の勞働購買に充用する譯には行かないのである。勞働力の代價を支拂ふ爲に、彼れは毎週新たなる追加資本を支出しなければならぬ。而して一切の信用事情を問題外に置いて考へる時、彼れは毎週賦拂してゆけば可いとはいへ、とにかく三ケ月の間勞銀を支出し得る力を有して居らねばならぬ。流通資本の他の部分たる原料及び助成材についても同樣である。勞働は順次に層を成して生産物に移轉される。勞働行程の繼續中に、支出勞働力の價値のみではなく、餘剩價値も亦たえず生産物に移轉されてゆく。尤も玆に生産物と謂ふのは、尙いまだ完成商品たる形態を與へられず隨つて流通能力を有せざる未完成生産物を指すのである。右の事實は、原料及び助成材の形で生産物に移轉される資本價値についても同樣に言ひ得る所である。

生産物、別言すれば所期の利用效果を造り出すには、その特殊性質の上から一定の勞働期間を要することになるのであるが、この勞働期間の長短に從つて流通資本（勞銀、原料及び助成材）の間斷なき追加支出が必要になつて來る。斯樣な支出流通資本の如何なる部分も、流通可能の形態を有することなく、隨つて同一作用の更新に役立ち得るものではない。寧ろ其各部分は生成しつつある生産物の組成部分として逐次的に生産部面の内部に固定され、生産資本なる形態に拘束されるのである。然るに資本の回轉期間なるものは、生産期間と流通期間との和に等しいのであるから、生産期間の延長は流通期間の延長と同樣に回轉速度の低減を來たすこととなる。ところで玆に說く場合に關して、尙ほ左の二事實につき一言して置く必要がある。

第一に、生産部面に滯留する期間が延長されること。例へば最初の週に勞働や原料などの爲に前貸される資本も、また固定資本から生産物に移轉される價値部分も、三ケ月といふ全期間に亙つて生産部面内に閉ぢ込められてゐる。此等の資本價値部分は、尙いまだ生成狀態に止まつてゐる未完成生産物に合體されることとなるため、商品として流通に入ることは出來ないのである。

第二に、生産行爲の完成に要する勞働期間は三ケ月間繼續し、事實に於いて一つの聯絡ある勞働行程を構成するものであるから、毎週たえず新たなる流通資本量が從前の分に追加されて行かなければならない。隨つて逐次的に前貸される追加資本の量は、勞働期間の延長されるにつれて增大することとなるのである。

紡績業と機械製造業とに放下される資本は等額のものであつて、それが不變資本と可變資本とに、また固定資本と流通資本とに分割される比率は何づれの場合にも同一であり、且つ勞働日の長さも亦同一であることは、曩に假定したところである。約して言へば、勞働期間の長さといふ一點を除く以外、一切の事情が同一であると假定したのである。最初の週に爲される支出はいづれも同一である。けれども紡績業者の方は最初の週に生産物を販賣し、その賣上金を以つて新たなる勞働力と、新たなる原料其他の物とを購買することが出來る。約言すれば、同一の規模を以つて生産を持續することが出來るのである。然るに機械製造業者の方は、三ケ月を經て生産物の完成された後でなければ最初の週に支出した流通資本を貨幣に再轉化せしめて新たに其運用を開始することは出來ない。卽ち先づ、同一量の

支出資本の回流といふ點に區別があり、次に三ケ月に亙つて紡績業と機械製造業とに充用される生産資本の量は同一であるが、紡績業者の支出する資本と機械製造業者の支出する資本との大さは全く違ふといふ區別がある。蓋し紡績業者の場合には、同一の資本が急速に更新される故、同一の作用を新たに反復し得るに反し、機械製造業者の場合には、資本の更新が比較的緩漫であるため、更新の時期に達する迄の間、たえず新たなる資本量を舊來の分に追加して行かなければならないからである。卽ち一定分の資本の更新される期間、換言すれば前貸期間の長さが相異なると同時に、また勞働行程の繼續期間に應じて前貸されねばならぬ資本量も、日々又は每週の充用資本量は同一であるとはいへ相異なることとなるのである。而して此事實は次の理由に依つて注目すべきものとなる。卽ち前貸期間なるものは、前貸すべき資本量をそれに比例して增大せしむることなしに延長せられ得る。この事實は、次章に考察すべき諸事例に依つて示される通りである。資本はヨリ長期間前貸されねばならない。而してヨリ多額の資本が生産資本なる形態に拘束されるのである。

長き勞働期間と隨つて又長期に亙つた多額の資本支出とを要する諸企業は、資本制生産の未發達な時代には決して資本主義的に經營されるものではない、（而して此事實は、右の諸企業が大規模に經營されるとき初めて其目的を達成し得るといふ場合に、特に著しく現はれるのである）。例へば市町村費又は國費を以つて街路、運河等を築造する場合の如きはそれである。（勞働力の方面について言へば、比較的初期の時代には大抵强制勞働を以つてしたものである）。或は又、長き勞働期間を要する如き生産物が資本家自身の財產に依つて製造される程度は、此時代には至つて微々たるものである。一例を擧ぐれば、家屋建築の場合、その家屋の所有者たるべき私個人は、建築請負師に向つて濟崩しに貨幣を前拂ひして行く。卽ち彼れは事實に於いて、家屋の生產行程が進行する程度に從ひ其代價を賦拂ひして行くのである。

然るに資本制度の發達した時代になると、一方には亙額の資本が個々人の手に集積され、他方には個々の資本家以外に、結合した資本家（株式會社）が出現して來ると同時に、また信用制度が發達することとなるのであるから、斯かる形態のもとに資本家的建築請負師が私個人の註文に應じて家屋の建築に從事するといふことは、もはや例外的の現象に過ぎなくなるのである。彼れは市場を目的として、數列の家屋や市區の築造に從事することを營業とするやうになる。それは丁度、個々の資本家が、請負師として鐵道の敷設に從事することを營業とするやうになるのと同樣である。

資本制生產がロンドンにおける家屋建築を如何に革命したかは、一八五七年の銀行委員に對して與へられた或る建築請負師の供述が證明するところである。彼れの言ふ所に依れば、彼れの青年時代には家屋は大抵註文に應じて築造され、その代價は建築の進行中に支拂はれたものであつて、建築の一定段階が完了する每に、請負師の手に賦拂されて行つたのである。投機的に建築を行ふといふことは滅多になかつた。たま〳〵それを企てることはあつても、その場合には勞働者を規則正しく就業させて一纏めにして置くといふ事が主もなる目的であつた。この狀態は、最近四十年間に悉く一變した。註文に應じてする建築は、今日ではもう滅多に行はれない。新たなる家屋を要する人は、投機的に建築された諸家屋、又は目下建築中の諸家屋の中からそれを求めるのであつて、請負師は最早顧客を目當てに從業するものではなく、寧ろ市場を目的として從業するのである。彼れは市場に完成商品を有して居ることを餘儀なくなされるのであつて、この點は他の總べての產業資本家と異なる所はない。從前には一人の請負師が同時に、恐らく三軒乃至四軒の家を投機的に建築するといふ有樣であつたが、今や彼れは廣大なる土地を購買し（ヨーロッパ大陸諸

國の用語を借りて言へば、多くは九十九ケ年を期限として賃借すること)、其處に百軒乃至二百軒の家屋を建築しなければならない。かくして彼れは自己の財産の二十倍乃至五十倍に相當した企業に從事しなければならなくなるのである。資金の調達は抵當借受けの方法に依るのであつて、個々の建築が進む程度に應じて請負師は貨幣の拂込みを受ける。この場合恐慌が襲來して右の拂込みが中絶すると、延いて全企業の頓挫を來たすこととなるのが常である。よく行つて家屋は景氣の回復する時まで未完成狀態に放置され、惡く行けば競賣に付せられ半分の價格で賣り飛ばされることとなるのである。投機的な而も大規模な建築に依らずしては、今日如何なる請負師も最早その地歩を守つて行くことは出來ないのである。建築それ自身から生ずる利潤は極めて少額であつて、彼れの手に歸する利得の主もなる部分は、地代の增進に依り、建築地の周到なる選擇及び利用に依つて獲られるのである。ロンドン市內ベルグレーヴィア及びタイバーニア地區の殆んど全部、竝びにロンドン周圍における幾千となき別莊は、かくの如き家屋の需要を見越した投機の方法に依つて築造されたものである。(『銀行條例特別調査委員報告』第一部、一八五七年、證述、第五四一三——一八及第五五三五——三六問からの要錄)。

勞働期間の極めて長き大規模な工作の執行が、完全に資本制生產の領域に屬するといふ事は、資本の集積が既に著しき程度に達してゐると同時に、一面また信用制度が發達して、自己所有の資本ではなく他人の資本を前貸し、かくして其損失を冒險するといふ氣持の可い便宜が、資本家に與へられるやうになつたとき、初めて行はれるところである。尤も生產に前貸される資本が、果して其充用者の所有に屬するか否かといふ問題は、資本回轉の速度及び時間の上に何等の影響をも及ぼすものでないことは言ふ迄もない。

協業や、分業や、機械使用などの如き、個々の勞働日に於ける生產物を大ならしむる事情は、又同時に、聯絡ある

生產行爲の勞働期間を短縮せしめるものである。例へば機械の使用に依つて、家屋や橋梁などの築造期間は短縮され刈取機、打樑機等の應用に依つて、成熟した穀物を完成商品化する爲に必要な勞働期間は短縮される。改良造船術の使用に依つて、航海に投ぜられる資本の回轉期間は增大した速力を以つて短縮されることとなる。けれども勞働期間を短縮せしめ、かくして又流通資本の前貸期間をも短縮せしめる斯種の諸改良は、大抵の場合固定資本の支出增加を伴ふものである。他方に又、若干の生產部門における勞働期間は、協業の擴大といふことのみに依つても短縮せられ得る。例へば、大群の勞働者を使用し彼等をして同時に種々なる方面から工事に從事せしめることに依つて、鐵道の完成は遠められることとなるのである。この場合、回轉期間は前貸資本の增大に依つて短縮される。即ちヨリ多量の生產機關と勞働力とが、資本家の命令の下に結合されて居らねばならないこととなるのである。

かくの如く、勞働期間の短縮は、大抵の場合この短縮された期間における前貸資本の增大を伴ふものであつて、前貸期間の短縮される程度に應じて前貸資本の量は增大することとなるが、これに就いては左の事實を念頭に置くべきである。即ち社會的資本の現在量を論外に置いて考へるとき、生產機關と生活資料とが(又はそれらの物に對する支配が)幾許の程度に分散し又は個々資本家の手に結合されてゐるか、換言すれば資本の集積が既に如何なる程度に達してゐるかとの問題が重要になる。信用は資本が一資本家の手に集積されることを媒介するものであつて、その速度を高め程度を大ならしめるものであるが、この意味に於いて、それは勞働期間隨つて又回轉期間の短縮に貢獻するものである(2)。

勞働期間が連續的にか、間斷的にか、兎にかく一定の自然條件に依つて規制されてゐる生產部門に於いては、上述の如き手段を以つてしては何等の短縮も行はれ得るものではない。『ヨリ迅速なる回轉といふ言葉は、穀物の耕作に

ついては適用し得るものでない。なぜならば、穀物の耕作に於いては、年に一度の回轉だけが可能となつてゐるからである。また家畜については、我々は單純に次の如く問ひたいのである。――二年生又は三年生の羊、四年生又は五年生の牡牛の回轉をば、如何にして速かならしめ得るであらうかと』（ダブリュー・ウオーター・グッド著『政治上、農業上及び商業上の迷妄』（ロンドン、一八六六年刊、第三二五頁）[3]。

例へば租稅、地代などの如き固定給付の支拂をなす爲に、ヨリ早く現金を得ることが必要となるのであるが、斯かる必要は次の方法に依つて右の問題を解決せしめるのである。卽ち家畜に例を採るならば、經濟上の標準年齡に達する以前、早くも販賣され屠殺されるといふ事實がそれであつて、これは農業上には極めて有害なこととなるのである。この方法は又終極に於いて、肉類價格の昂騰を來たすこととなる。『夏季には中部諸州の牧場、冬季には又東部諸州の家畜小屋に供給することを主要目的として從前飼畜に從事してゐた人々は……穀物の價格が動搖し低落するに至つたため、寧ろバター及びチーズの價高きことを見て、この方面に利益を求めるやうになつた。彼等は維持費の財源を得んがため、每週バターを市場に運び行き、又チーズについては仲買人から貨幣の前貸を受ける。仲買人は、チーズが運搬し得る狀態に達するや否や、それを取りに寄越すのであつて、その價格は固より彼れ自身の定むる所である。かくして――農業は經濟上の法則に依つて支配されるものであるから――從前飼養の目的を以つて製酪地方から南方に取り寄せられた仔牛は、今やバーミンガム、マンチェスター、リヴァープールその他隣接大都市の屠獸所に於いて大繩めに屠殺される有樣となつた。之れがため、生後わづかに八日乃至十日を經たに過ぎない幼牛をも犧牲に供することは、屢々見られるところである。然るに若し、麥芽が無稅であつたとすれば、小作農業者たちの得る利潤はヨリ大となり、かくして彼等は、其幼牛が年齡を增し體量を加ふるに至るまで、引續きそれを飼養し得たであらう。加ふるに、母牛を有せざる人々が仔牛を養はんとする場合、乳に代つて麥芽が良養料に役立つといふ利益もあつたであらう。かくして現在における幼牛の驚くべき缺乏は、大抵避けられることとなつたであらう。今日我々が此等の小農夫に向つて、仔牛の飼養を勸めるならば、彼等は答へて言ふであらう。――乳で育てても利益の得られることはよく解つてゐる。けれどもそれには先づ貨幣を支出せねばならぬ。所が我々には、それが出來ないのである。次に又支出した貨幣を回收するまで久しく待たねばならぬのであるが、製酪に支出した貨幣ならば直ちに回收されると』（前揭第一二及一三頁）。

回轉の延長が、イギリスの微細なる小作農業者にとつて、如上の結果を伴ふことが事實である以上、それがヨーロッパ大陸諸國の小農民にとつて如何なる不利益を招致せねばならぬかは容易に逆睹し得るところである。

勞働期間（隨つて又流通能力ある商品の完成に要する期間）の延長に比例して、固定資本から順次生產物に移轉されてゆく價値部分は益々著しく累積され、この價値部分の回流は益々遲滯することとなるのである。けれども此遲滯は、固定資本の新たなる支出を喚び起すものではない。貨幣形態を以つて得られる磨滅分の回收が緩漫であるにしろ、急速であるにしろ、いづれにしても機械は生產行程の內部に作用を續けるのである。

所が流通資本の場合にはさうではない。卽ち此場合には、勞働期間の延長に比例して長期間に亙り資本を拘束することが必要となるのみでなく、尙また勞銀、原料及び助成材の爲に絕えず新たなる資本を前貸せねばならなくなるのである。

かくの如く、回流の遲滯が兩資本の上に及ぼす影響はおの〳〵異なるのであつて、固定資本の方は回流の緩急に論なく作用を續けるのであるが、反對に流通資本の方は、それが未販賣又は未完成の、尙いまだ販賣し難き生產物とい

ふ形態に固定されて居り、而してそれを現物形態に於いて更新すべき何等の追加資本も存在しない場合には、回流の遲滯に妨げられて機能を盡し得なくなるのである。

『農民の餓死しつつある時、彼等の家畜は肥え太る。雨が可なり多かつたので貊草は鬱蒼と生ひ茂つてゐる。インドの農民は、肥えた牡牛の傍らに餓死するであらう。迷信の教は個人の目には殘酷に見えるであらうが、社會にとつては保存力を有するものである。家畜の保存は農業の持續を確實にし、斯くして又將來における生活と富との源泉を確保する。我々の謂ふところは、餘りに酷に、餘りに痛ましく聞えるかも知れない。けれども事實は、我々の謂ふ通りである。卽ちインドに於いては、牡牛よりも人間の方が代置し易いのである』（政府の報告、東インド――マドラス及オリッサの飢饉、第四號、第四頁）。この叙述を達磨經中の左の一齣（第一〇章、第八六二頁）と對照せよ。――『祭司又は牝牛の保存のため無報酬にて生命を捧げることに依り……これらの素性賤しき種族は濟度を與へられるのである。』

五ケ年の經過以前に、五年生家畜を供給し得るものでない事は言ふ迄もない。けれども玆に、一定の限界を越えざる範圍内に於いて可能な一事がある。それは卽ち、取扱方法の變更に依つて、ヨリ短期間内に家畜を所期の完成狀態に達せしめる事である。これは就中、ベークウェルに依つて成就されたところである。從前、イギリスの羊は四歳又は五歳を越える迄は、屠殺すべき完成狀態に達しなかつたのであるが（フランスの羊は一八五五年に於いても尙さうであつた）、ベークウェルの方法に依る時は、一歳のものでも屠殺の目的を以つて肥らすことができ、如何なる場合にも、生後一年を越えずして早くも完全に成熟した羊が造り上げられるのである。彼れはディシュレー・グレーンヂの小作農業者であつたが、周到なる淘汰に依つて羊の骨骸をば其生存に必要な最低限度まで縮小せしめた。彼れの羊はニュー・ライセスターと呼ばれてゐる。『羊の飼養者は、從前一頭の羊を育て上げるに要した同一の時間を以つて、今や三頭を市場に供給することが出來る。而も此等の羊は從前のものに比し、肉の最も多く得られる身體部分がヨリ幅廣く、丸味を帶びて、大きく發達してゐるのであつて、その體量の殆んど全部は純粹の肉である』（ラヴェルニュ著『イギリスの農村經濟』一八五五年刊、第二二頁）。

勞働期間を縮小せしめる諸方法は著しく異なつた程度に於いてのみ、種々なる產業部門に應用し得るものであつて種々なる勞働期間の長短の差は斯かる方法に依つて相互平均に歸せしめられるものではない。上例について言へば、新たなる作業機の應用に依つて、一臺の機關車を製造するに必要な勞働期間は絶對的には短縮され得るけれども、一方に紡績方法の改良に依つて日々又は每週生產される完成綿絲の量がそれとは比較にならぬほど急激に增大するとすれば、機關車製造業における勞働期間の長さは相對的には（卽ち紡績業におけるそれと比較すれば）延長されることとなるのである。

第十三章　生産期間

勞働期間はつねに生産期間である。換言すれば、生産部面内に資本の留置されてゐる期間である。けれども、それと反對に、資本が生産行程内に在留する期間はすべて勞働期間であるとは限らない。

勞働力それ自身の自然制限に基く勞働行程の中絶は、この場合問題ではない。尤も勞働行程の休止中に、固定資本たる工場建物や機械などが使用されずにあるといふ、單にそれだけの事實が、如何ばかり勞働行程の不自然なる延長と晝夜勞働とに對する動機の一つとなつたかは、曩に示したところである。この場合問題となることは寧ろ、勞働行程の長さからは獨立した、生産物及び其生産それ自身の性質に基く中絶(1)である。この中絶の續く間、勞働對象は大なり小なりの期間持續する所の自然行程の支配に委せられてゐるのであつて、物理的、化學的、又は生理的の諸變化を受けねばならず、勞働行程の全部もしくは一部は停止されることとなるのである。

例へば葡萄酒を一定の完成程度に變ぜしめるには、搾壓後まづ暫らくの間醱酵を遂げしめ、次いで又暫くの間休ませて置く必要がある。生産物の乾燥を要する産業部門も少なからず在る。製陶業の如き卽ちそれである。或は又、生産物の化學的構性を變ぜしめる爲、それを一定事部の影響に晒らさねばならぬ産業部門も少なくない。漂白業の如きはそれである。冬作の穀物が成熟する迄には恐らく九ケ月を要するであらう。その播種期から收穫期にかけて勞働行程は殆んど全く中絶される。森林培養に於いては播種及びそれに必要な豫備勞働が終つてから種子が完成生産物となるまでの間に、恐らく一百年を要するであらう。而して此全期に亙つて、種子が勞働の影響を要することは比較的極めて僅少である。

以上すべての場合を通じて、追加勞働は生産期間の顯著なる部分に於いて單に時折り與へられるに過ぎない。既に生産行程内に拘束されてゐる資本に追加的の資本及勞働を與へねばならないといふ前章所述の事情は、この場合には、ただ長期間又は短期間持續する所の中絶を以つてのみ行はれるのである。

卽ち以上すべての場合を通じて、前貸資本の生産期間なるものは二つの部分から成る。其一つは資本が勞働行程内に存在する期間であり、他は資本の存在形態――未完成生産物なる形態――が、勞働行程内に存在することなくして自然行程の支配に委ねられてゐる期間である。これらの兩期間が此處彼處に於いて相互に錯交し割り込み合ふか否かといふ事は、問題の上に何等の變化をも與ふるものではない。この場合、勞働期間と生産期間とは一致することなく生産期間は勞働期間よりも大きいのである。けれども生産期間を經過した後でなければ、生産物は完成し成熟したものとならず、隨つて生産資本なる形態から商品資本なる形態に轉化し得るものとはならないのである。されば生産期間を構成する所の、勞働期間以外の部分が大となるに從つて、資本の回轉期間も亦ます〳〵延長されることとなる。勞働期間以上に出づる生産期間が、穀物の成熟や樫の成長などの場合における如く終極的に與へられた自然律に依つて決定されるものでない限り、生産期間の人爲的短縮に依つて回轉期間を多かれ少なかれ短縮せしめ得ることは、しば〳〵見受けられる所である。例へば屋外漂白の代りに化學漂泊を採用し、又は乾燥行程の上にヨリ有效な乾燥器を使用する場合の如きがそれである。また鞣皮業について言へば、鞣酸を皮に滲徹せしめるのに、舊來の方法では六ケ月乃至十八ケ月を要したのであるが、新たなる方法に依つて空氣ポンプを使用すると、僅々一ケ月半乃至二ケ月を要するに過ぎなくなるのである。(ジー・ジェー・クールセル・スヌニル著『工業的企業の學理的及實際的論究』パリー、一八

五七年刊、第二版)(2)。自然行程を以つて充たされた單なる生産期間の人爲的短縮につき最大の實例を供するものは、一七八〇年に發明された錬鐵法、竝びに爾後採用された最新式方法に至る迄の變遷を含む、最近一百年間における製鐵史(殊に生鐵を鋼鐵に轉化せしめる方法の發達)がそれである。この方面に於ける生産期間は非常に短縮されたが、然しそれと同一の比例を以つて、固定資本の放下額は增大する事となつたのである。

生産期間と勞働期間との不一致について獨特の實例を供するものは、アメリカにおける靴型の製造である。靴型を製造するには、その原料木材を乾燥させる爲に十八ケ月間も寢かして置かなければならぬ。これは完成後、靴型にソリが來て變形を生ずること無からしむる爲に必要な事であるが、靴型製造上の經費の顯著なる部分は玆に起因してゐるのである。右の期間、木材は他の何等の勞働行程をも通過しないのであるから、放下資本の回轉期間は單に靴型の製造それ自身のために必要な時間に依つて決定されるのみではなく、また乾燥のため木材を寢かして置く時間に依つても決定されることとなるのである。木材は嚴密の意味の勞働行程に入り得る前に、十八ケ月間生産行程の內部に止まつてゐる。この實例は又同時に、流通部面の內部に生ずる事情ではなく、寧ろ生産行程に基く事情の結果として、流通總資本の種々なる部分の回轉期間が如何に相異なり得るかを示すものである。

生産期間と勞働期間との區別を、特別明かに示すものは農業である。我が溫帶地に於いては、土地は年に一度穀物を產するものであり、而して生産期間(多作に在つては平均九ケ月)の短縮又は延長といふことそれ自身も、豐年と凶年との變移に左右されるものであつて、嚴密の意味の工業における如く、之れを正確に豫則して制御することは不可能である。ただ副產物たる家畜の乳やチーズなどのみが、それをヨリ短期間に間斷なく生産して販賣し得るに過ぎない。反對に、勞働期間の方は次の如くになる。——『風土上及び其他の影響的事情を考慮に入れての話であるが、ドイツの種々なる地方における勞働日の數は、三つの主要從業期間について左の如く算定し得るであらう。——春期(三月中旬又は四月上旬より五月中旬まで)五十乃至六十日。夏期(六月上旬より八月下旬まで)六十五乃至八十日。秋期(九月上旬より十月下旬または十一月中旬乃至下旬まで)五十五乃至七十五日。冬の勞作として注意を要するものは、この季節に爲さるべき、肥料、木材、市場貨物、建築用材等の運搬其他の如き諸勞働のみである』(エフ・キルヒホフ著『農業經營學提要』ドレスデン、一八五二年刊、第一六〇頁)(3)。

かくの如く、氣候が不良であればある程、農業上における勞働期間、隨つて又資本及び勞働の支出は、ます〳〵短期間の埒內に密集されることとなるのである。ロシアを一例に採らう。この國の北部諸地方の若干のものに在つては農耕勞働を爲し得るものは一年の中わづかに百三十乃至百五十日間に限られてゐる。冬季七ケ月乃至八ケ月に亙つて一切の農耕勞働は中止されねばならないのであるが、この間もしロシアにおける六千五百萬のヨーロッパ人中五千萬の者が失業するといふことになれば、それがため此國が如何なる損害を被むることとなるかは、我々の想像し得るところである。ロシアには、一萬五百の工場に勞働する二十萬の農民が居り、そのほか農村には到るところ農村獨特の家內工業が發達したのである。かくて一切の農民が代々機織業者であり、又は鞣皮業者、製靴業者、錠匠、ナイフ鍛冶匠其他である農村も存在することとなつた。この事實は特にモスカウ、ウラヂミール、カルガ、コストローマ、ペテルスブルグ等の諸地方に見られる所である。ついでに一言したいことは、斯種の家內工業は、今や益々資本制生産のもとに奉仕せしめられてゐるのであつて、一例を擧ぐれば、機織業者の使用する經と緯とは、直接に、又は仲買人の手を經て、商人から供給されてゐる。(製造業、商業等に關する大使館及公使館書記官報吾、第八號、一八六五年、第八六及八七頁よりの摘要)。我々は此事實について、次の現象を見るのである。即ち生産期間と其一部に過ぎざる

勞働期間との不一致は、農業をば農村の副業たる工業と結合せしめる所の自然的基礎であると同時に、また斯種の農村的工業は、先づ商人として侵入して來る資本家にとつて支點となるといふことがそれである。資本制生産は後に至り製造業と農業とを分離せしめるのであるが、之れがため農村勞働者は益々、單に偶然的存在を有するに過ぎざる副業に賴よることとなり、かくして彼れの狀態は惡化するに至るのである。資本家の立場から見れば、回轉上の凡ゆる差異は、後に說く如く相互平均に歸するのであるが、勞働者の立場から見るとさうではない。

嚴密の意味の工業や、又は採鑛業、運輸業などの大多數部門に行はれる經營は均等的のものであつて、勞働期間は年々歲々同一であり、而して價格の動搖や營業不振などの如き異常の中絕を問題外に置いて考へるならば、日々の流通行程に入る資本の支出は均等に配分されてゐる。同樣に流通資本の回流乃至更新も亦市況に變動なき限り、一年間における均等の各期間に配分されてゐるのである。然るに、勞働期間が生產期間の一部に過ぎざる投資部面に於いては、一年間に於ける種々異なつた期間の經過中に、流通資本の支出につき絕大の不等が生じて來るのであつて、而も資本の回流は、自然條件に依つて定められた時期に一括して行はれるに過ぎないのである。隨つて斯かる營業が、連續的の勞働期間を有する他の營業と同一の規模に立ち、換言すれば同一量の流通資本を前貸するものと假定しても、この流通資本はヨリ長期間に亙つて一括的に前貸されねばならぬ譯である。この場合、固定資本の壽命も亦、それが現實に於いて生產物に作用する所の期間から更らに著しく區別されることとなる。

勞働期間と生產期間との間に不一致が存する時は、充用固定資本の使用期間も亦大なり小なりの期間に亙り連續的に中絕されることは言ふ迄もない事實であつて、これは農業に例を求めるならば、勞働家畜、農具、機械などの場合に見られるところである。斯樣な固定資本が勞働家畜から成る場合には、飼料その他について、家畜が勞働に從事しつつある期間における全然又は殆んど同一の支出を絕えず要する譯であるが、死物から成る勞働要具の場合には、それを使用しない時にも一定の價値消滅が生じて來る。之れがため、生產物の價値は一般に增騰することとなる。蓋し生產物への價値移轉は、固定資本の作用期間ではなく價値喪失期間を標準として計算されるからである。右の如き生產部門に於いて固定資本が休用狀態に置かれることは、その爲に保存費を要すると否とに拘らず、この資本の通例的使用についての一條件となる。それは例へば、一定量の棉花の喪失が、紡績業經營上の一條件となるのと同じである。同樣に又、如何なる勞働行程に於いても、通例以下の技術的條件のものとに、不生產的に、而も不可避的に、支出される勞働力が計算に入ることは生產的に支出される勞働力の場合と毫も異ならない。勞働要具、原料竝びに勞働力の不生產的支出を低減せしむる一切の改良は、また生產物の價値をも低減せしむるものである。

農業に於いては、勞働期間が長期に亙つて繼續するといふ事實と、勞働期間及び生產期間の間には大なる區別があるといふ事實との兩者が結合されてゐる。これについて、ホヂスキンは適切に述べて曰く、『農業上の生產物を完成するに必要な期間〔尤も彼れは此點について、勞働期間と生產期間との間に區別を立てて居らない〕と、他の勞働諸部門に於いて必要な期間との區別こそ、農民の大なる從屬を生ぜしむる要因となるのである。農民は一年以下の短小期間內には、其商品を市場に提供することが出來ない。この全期間に亙つて、彼れは製靴業者や、裁縫業者や、鍛冶匠や、車輛製造業者や、その他種々なる生產者の手から所要の生產物——數日又は數週間に完成される所の——を借り受けなければならない。斯樣な自然的事情と他の勞働諸部門に於いては富がヨリ急速に增殖するといふ事實とが存すればこそ、全國の土地を獨占してゐる土地所有者たちは、加ふるに立法上の獨占をも掌握してゐるに拘らず、自己竝びに自己の隷從者たる小作農業者をば國內における最從屬的の人民たるべき運命から救ひ出すことが出來ないのであ

る。（トマス・ホヂスキン著『經濟學』ロンドン、一八二七年刊、第一四七頁、註）(4)。

一部的には、農業上に於ける勞銀及び勞働要具についての支出をば一年の全部に亙つてヨリ均等に配分せしめ、一部的には又、種々異なつた生產物を造り出して一年間に様々の收穫をあげ得るやうにし、斯くすることに依つて回轉期間を短縮せしめる一切の方法は、生產上に前貸される所の、勞銀、肥料、種子等に投ぜられる流通資本の增大を必要ならしめるものである。この事實は、例へば休耕地を設くる三圃式耕作から休耕地を設けざる輪栽式耕作への推轉の場合に見られる所である。更らに、フランダースに行はれてゐるデロビー式耕作についても同様の事實を認め得るのである。『デロビー式耕作に於いては根菜類が栽培されるのであつて、同一の畑から先づ人間生活用の穀物、亞麻、油菜等が作られ、その收穫後に家畜保存用の根菜類が植ゑ付けられる仕組になつてゐる。この方法に依ると、有角家畜は間斷なく飼養され得るのであつて、その結果多量の肥料が產出されることとなる。かくして此方法は、輪栽耕作の支點となるのである。砂土性諸地方における既耕地積の三分の一以上は、このデロビー式耕作に供せられてゐる。かくて恰も、既耕地積の三分の一だけ擴大されたかの如き結果を生ずることとなるのである。』根菜類の外に尙クローヴァー其他の飼料植物もこの目的に充用される。『農業が斯くの如き園藝に推轉する所まで達すると、比較的多額の固定資本を要するやうになることは言ふ迄もない。イギリスに於ける一ヘクテーア當り固定資本は二百五十フランと算定されてゐる。フランダースの農民から見れば、一ヘクテーア當り五百フランの固定資本でも、恐らく極めて少額過ぎるであらう』（エミール・ド・ラヴレー著『ベルギー農村經濟論』パリー、一八六三年刊、第五九、六〇、及六三頁）(5)。

最後に養林を擧げよう。――『木材の生產は、次の事實に依つて他の多くの生產から本質的に區別される。即ち木材の生產に於いては、自然力が獨立して作用し、自然的の蕃殖を遂げるから、人力及び資本力を必要としないといふことがそれである。尙また人爲的に森林を蕃殖させる所に於いても、自然力の作用に比すれば人力竝びに資本力の支出は至つて微々たるものである。加ふるに、穀物が最早稔らず、又は生產しても引き合はないやうな土壤や場所に於いても尙、森林は繁茂し得るのである。けれども森林の培養を適當に經營するには、穀物栽培の場合におけるよりも大なる地積を要する。蓋し小地積の場所に於いては、森林經營的の伐木を行ふことが出來ず、副產物の利用は不可能となり、また森林保護の處理が困難になる等の結果を生ずるからである。更らに養林上の生產行程は、私經營の計畫限界を越え、甚しきは人間一生の期間以上に出づる場合もある位ゐ長期間に亙るものであつて、土地の購買に投ずる資本〔共同生產の場合には、この資本の必要はなくなり、ただ幾許の土地を農業及び牧畜上の目的から森林生產の目的に流用し得るかといふことのみが問題となるのである〕は、長期間の經過後に初めて有利なる果實を結び、その回轉は斷片的に進行するに過ぎない。若干種類の樹木から成る森林に於いては、斯かる資本が完全に回轉を遂げるには百五十年の經過を要するのである。それに又、樹木の生產を中絶せしめない爲には、年々利用する額の十倍乃至四十倍に上る生樹の準備を必要とする。斯様な次第であるから、他に收入の道なく、また廣大なる森林を有せざる人は、到底正規の森林經營を行ふことが出來なくなるのである』（キルヒホフ前揭、第五八頁）。

森林培養の生產期間が長く（而もこの長き生產期間は、比較的短小なる勞働期間を含むのである）、隨つて又資本の回轉期間が長いといふ事實は、この產業を以つて不利なる私的即ち資本制的の（個々の資本家に代つて結合した資本家が活動する場合にも、資本制的營業部門は本質に於いて私的のものであるが故に斯く言ふ）營業部門たらしめる。文化及產業一般の發達は常に森林の破壞を事としてゐたものであつて、この發達が森林の保存及生產上に與へた一切の貢獻は、これに比すれば至つて微々たるものとなつてしまふのである。

右に引抄したキルヒホフの文章の中で特に注意すべき點は、『それに又、樹木の生産を中絶せしめない爲には、年々利用する額の十倍乃至四十倍に上る生樹の準備を必要とする』といふ一節である。これに依れば、十年乃至四十年又はそれ以上の長期間に、一度だけ回轉が行はれるといふことになるのである。

これは飼畜についても同樣である。畜群（保藏家畜）の一部が年生産物として販賣されるとき、他の部分は生産行程の內部に止まつてゐる。この場合、年々回轉を遂ぐるものは資本の一部に過ぎない。それは丁度、固定資本たる機械や勞働家畜などの場合に於けると同樣である。この資本は長期間生産行程內に固定された資本であつて、總資本の回轉を遲延せしむるものであるとはいへ、嚴密の意味の固定資本を構成するものではない。

茲に保藏（在庫品）と名づくる所のもの、卽ち一定量の生きた樹木又は家畜は、勞働要具たると同時に又勞働材料たる機能を盡すものであつて、相對的の意味に於いて生產行程の內部に存在するものである。その顯著なる部分は、規則正しき經營のもとに行はれる再生產の自然條件の上から、絕えず斯かる保藏形態を採らねばならなくなつて來る。

以上のものとは異なつた種類の、いま一つの保藏品も亦、回轉の上に影響を及ぼすものである。この別種の保藏品といふのは、潛伏的の生產資本たるに過ぎぬものであつて、經營の性質上大なり小なりの程度に於いて多量に蓄積され、長期間に亙つて生產上に前貸されねばならぬものである。尤もそれはただ漸次的にのみ、現實的の生產行程に入るのである。斯種の保藏品の一例としては、田畑に運搬されてゆく以前における肥料を擧げることが出來る。同樣に穀物や秣など、及び家畜の生產に使用される如き保藏生活資料も亦、この部類に屬するものである。『經營上の保藏品の中には、經營資本の顯著なる部分が含まれてゐる。然るに此保藏品はそれを佳良なる狀態に保存する上に必要な豫防策が適當に講ぜられないとすれば、多かれ少なかれ價値を喪失し得るのである。甚しきは監視の缺乏せる爲、經營上における保藏生產物の一部が全く喪失されるといふ場合も生じ得る。されば此點に於いて先づ、納屋や、秣置場や、穀倉や、地窖等についての周到なる監視を要すると同時に、また保藏室を絕えず適當に閉鎖し、清潔にし、且つ換氣させる等のことが必要となつて來る。穀物その他の保藏作物は折々混ぜ返へさねばならず、また馬鈴薯、蕪菁などは霜や火水の害を受けないやうに保護してゆく必要があるのである』（キルヒホフ前揭、第二九二頁）。『自己の需要（殊に飼畜上の）を計算するに當つては（この場合、配分は生產物の性質及用途の如何を標準として調節すべきであるが）、單に欲望の充足といふ事を考慮に入れるのみではなく、又不慮の場合の用意として相當の保藏を殘し得るやうに注意しなければならない。この場合もし、自己の生產物のみを以つてしては需要を完全に充たし得るものでないことが明かになつたとすれば、先づ左の一事を考慮に入るべきである。卽ち、他の生產物（代用品）を以つてしては、右の不足分を補ひ得ないかどうか、それとも右の不足分に代用すべき他の生產物をヨリ價安く調達し得ないかどうかといふ事がそれである。例へば秣の不足が生じた場合には、根菜類に藁を混じたものを以つて之れを補ふことが出來る。この場合には總じて種々なる生產物の實質價値と市場價格とを念頭に置き、それに從つて消費を按排して行かなければならない。一例を擧ぐれば、燕麥が高價であつて、豌豆と裸麥とが比較的廉價である場合には、馬の飼料たるべき燕麥の一部をば豌豆又は裸麥を以つて代用せしめ、斯くして節用された燕麥を販賣することが有利となるであらう』（キルヒホフ前揭、第三〇〇頁）。

大なり少なりの範圍における一定量の伏能的生產資本（換言すれば、漸次生產行程に入る目的を以つて、多量もしくは少量に在庫品形態を採つて存在せねばならぬ生產上に使用すべき生產機關）が必要となる事は、曩に在庫品の形成を考察した際述べた所である。與へられたる企業、換言すれば一定範圍の資本經營を假定する場合、斯かる生產在

庫品の大小は、その更新の困難程度、供給市場の相對的距離、運輸交通機關の發達程度等の如何に懸るものであることも、當時すでに述べた通りである。此等すべての事情は、生産在庫品なる形態を採るべき資本の最低限度の上に影響を及ぼすものである。隨つて又、それは資本前貸の行はるべき期間の長短と、一度に前貸さるべき資本量の大小との上にも影響を及ぼすこととなるのである。この資本量は更らに回轉の上にも影響するものであるが、斯かる資本量の大小は、流通資本が生産在庫品なる形態を採り單なる伏能的生産資本として固定される期間の長短に依つて左右される。

他方に、流通上の斯かる停滯は、迅速なる資本回收の大なり小なりの可能や、市況の作用などに倚存する限り、それ自身また回轉期間（即ち流通部面所屬の事情）に起因するものである。『更らに手工器具や、篩や、籃や、網や、車脂や、釘などの如き一切の裝置部分即ち分子的の生産要品をば、迅速に調達し得る機會が手近に存すること少なければ少なき程、同種類の新たなる品を即時利用し得るやうに保藏して置く必要が益々大となるのである。最後に、年々冬季になると裝置部分の全部を周到に檢査して、之れが補充又は修繕を要する事を見出した場合には、即時に其始末をしなければならぬ。けれども斯様な裝置部分の保藏を總じて大ならしむべきか小ならしむべきかといふ問題は、主として場所的事情の如何に依つて決定される。附近に手工業者や販賣店のない所では、同一の所在地又は極めて附近に此等のもののある所に比べて、遙かに多量の在庫品準備を要する譯である。所で他の事情に變化なしと假定して、必要なる在庫品を一時に大量的に購買するとすれば、その購買の時期が當を得てゐる限り、總じて價安く買ふといふ利益が得られるものであるが、これがため流通しつつある經營資本の中から多大の部分が流通される事となるは言ふ迄もない。而も此流通額は、必ずしも能く事業經營の中から節用し得るとは限らないのである』（キルヒホフ前揭、第三〇一頁）。

すでに述べた如く、生産期間と勞働期間との區別は、種々異なつた場合の成立を許すものである。例へば流通資本は嚴密の意味の勞働行程に入る以前、生産期間の內部に存在し得る場合（靴型製造の場合）もあり、また嚴密の意味の勞働行程を通過した後、尙ほ生産期間の內部に在留する場合（葡萄酒、穀種などの場合）もある。或は又、生産期間が此處彼處、勞働期間に依つて中斷される場合（農耕、養林等の場合）もある。流通能力ある生産物の顯著なる部分は現實的の生産行程に合體された儘でゐて、而も其遙かに僅少なる一部分が年々の流通に入る場合（養林、飼畜等の場合）もあれば、また流通資本が伏能的生産資本なる形態を採る期間の長短、隨つて一時に支出さるべき流通資本量の大小が、一部的には生産行程の種類の如何に基き（農業の場合）、一部的には更らに市場距離の遠近など、約して言へば流通部面所屬の事情に倚存する場合もある。

互ひに一致せざる勞働期間と生産期間とを同一視しようとする企ては、それ自身また價値學說の錯誤的應用に基くものであるが、斯かる企圖に依つて、マカロックやジェームス・ミル其他の學者が、如何なる背理的の學說を提示するやうになつたかは、後（第三卷）に見る如くである。

前述の回轉循環は、生産行程に前貸された固定資本の持續に依つて與へられるものである。然るに此生産行程は何ケ年かの期間に亙るものであるから、隨つてそれは年に一度の固定資本回轉、又は一年間に幾度びか反復される固定資本回轉の若干數を含むこととなる。

農業に於いては、輪栽式耕作方法の場合に斯かる回轉循環が生じて來る。『小作期間は決して、採用した輪栽式耕種の流通期間以下に算定されてはならない。隨つて三圃式耕作の場合における小作期間は、つねに三ケ年、六ケ年、

九ケ年等に算定されるのである。然し玆に假定する所の、純粹の休耕地を設くる三圃式耕作方法に依ると、同一の田畑は六年間に四回耕作されるのみであつて、斯様な耕作の行はれる年には冬作の禾穀類と夏作の禾穀類とが相互に輪栽され、而して土地構性の上から見て必要であるか又は差支なき限り、小麥と裸麥、もしくは大麥と燕麥との輪栽も同様に行はれる。然るに同一の土地に栽培される各種の穀物は、多かれ少なかれ作高を異にするものであつて、それぞれ異なつた價値を有し、異なつた價格で販賣される。隨つて同一の田畑から得られる作高は耕作の年に從つて相異なることとなり、また流通の前半期（最初の三ケ年）における作高は後半期における作高と相異なることにもなる。平均作高でさへも、流通の前半期と後半期とでは同一でない。蓋し各期間の作高は單に土地の質のみではなく、又年々の天候に依つても左右されること、恰も物價が種々様々の事情に依つて左右されるが如くであるからである。所で六ケ年といふ全流通期間の平均作高と平均價格とを標準として田畑の收益を計算するとすれば、それに依つて流通の前半期と後半期とにおける一ケ年の總收益が得られる。けれども各半期、即ち三ケ年だけの收益を計算する場合にはさうは行かぬ。斯かる場合には、總收益が不等となるからである。以上說く所に依つて、三圃式耕作の下に於ける小作期間は、少なくとも六ケ年と算定されねばならぬことが明かになる。然し小作する方の側から見ても、させる方の側から見ても、尙ほ遙かに望ましいことは、小作期間をして小作期間の倍加〔原文通り！〕たらしめる事である。即ち三圃式耕作の場合ならば、六ケ年のものを十二ケ年なり、十八ケ年なり、又はそれ以上の長期間なりに延長し、六圃式耕作の場合ならば、七ケ年のものを十四ケ年なり、二十八ケ年なりに延長する事である』（キルヒホフ前揭、第一一七頁及一一八頁）。

（マルクスの原稿中には、この場所に『イギリスの輪栽式耕作。玆に註を揭げること』と記してある）。

第十四章　流通期間

種々なる營業部門に投ぜられる種々異なつた資本の流通期間、隨つて又資本の前貸されねばならぬ各期間を相互に區別するところの諸事情については、以上考察した通りであるが、此等の事情は總べて、固定資本と流通資本との區別や勞働期間の上に生ずる區別などと同樣に、生產行程それ自身の內部に發生するものである。然るに資本の回轉期間は、生產期間と流通期間との總和に等しいものであるから、流通期間の長さが異なる時は、回轉期間隨つてまた共長さの上にも差異を生ずることとなるは言ふ迄もない。この事實は、回轉に變化を與へる他の總べての事情が同一であつて、ただ流通期間のみが同一でない二つの異なつた投資を相互に比較するか、又は固定資本對流通資本の組成や勞働期間などの一定した、與へられたる一資本を採つて、ただ共流通期間のみを假說的に變化させて考へる時、最も明瞭に現はれて來るのである。

流通期間の一部（而も相對的に見て最も決定的な）は、販賣期間、即ち資本が商品資本なる狀態のもとに存在してゐる期間から成るものであつて、此期間の相對的大小の如何に從ひ、流通期間、隨つて又回轉期間全般は、或は延長され或は短縮されることとなるのである。尙また、保管費用などの存する結果、追加的の資本支出が必要になるといふ場合も生じ得る。完成商品の販賣に要する期間が、同一の營業部門における個々の資本家にとり極めて不等であり得ることは、最初から明瞭な事實である。即ち此期間は、相異なつた生產部門に投ぜられる各資本總量の立場からのみではなく、また同一の生產部面に投ぜられる總資本の各獨立した部分に事實上外ならぬ所の、種々なる個別的資本

の立場から見ても、不等となり得るのである。他の事情に變化なき限り、同一の個別的資本に對する販賣期間は、市況の一般的動搖又は特殊營業部門内に生ずる動搖につれて變動を來たすであらう。然し此問題については、もはや之れ以上論究することをやめ、ただ左の單純なる一事實を言明するに止めよう。卽ち別個の營業諸部門に投ぜられた資本の回轉期間の上に總じて差異を生ぜしむる一切の事情は、それが個別的に作用する場合（例へば、一方の資本家が共競爭者たる他方の資本家よりも迅速に販賣する機會を有する場合や、一方の資本家が他方の資本家以上に、勞働期間短縮の方法を應用する場合など）には、また、同一の營業部門内に投ぜられた種々なる個別的資本の回轉の差異をも伴ふものである。

販賣期間隨つて又回轉期間一般の上に區別を生ぜしむる不斷に作用しつつある原因の一つは、卽ち商品を終極的に販賣せしむる市場と通例の商品販賣所との間に存する距離の隔りといふ事である。資本はそれが市場に移動し行く全期間を通じて、商品資本なる狀態のもとに拘束されてゐる。而して此狀態は、生產が註文を受けてなされる場合には商品の引渡時期に至るまで持續するものであるが、斯かる註文生產の行はれざる場合には、右の如き市場に移動し行く期間の上に尙ほ商品が市場に在つて販賣を期待しつつある期間が加はつて來る。交通運輸機關の改善は商品の移動期間を絶對的に短縮せしめるとはいへ、別個の商品資本の流通期間、或は又同一なる商品資本の各異つた部分——相異つた市場に移動して行くところの——の流通期間における、上述の如き移動に基く相對的區別を廢除するに至るものではない。例へば改良された帆船や汽船などを使用すれば、この移動は短縮されることとなるが、然しそれは近距離の港にとつても遠距離の港にとつても同樣に短縮されるのであつて、相對的の區別は——屢々減ぜられることあるとはいへ——依然として存續するのである。尤も運輸交通機關の發達に依つて、この相對的區別は自然的の距離には照應しなくなる樣に變更され得る。例へば、生產場所から國内主要の人口中心地に通ずる一鐵道が敷設されると、國内のヨリ附近に在つて而も鐵道の通ぜざる地點への距離は、自然的にヨリ遠隔な地點への距離に比べて絶對的又は相對的に延長され得る。同一の事情はまた、生產場所から大販路への相對的距離をも變化せしめ得るものであつて、この事實こそ正に、何ゆゑ運輸交通機關の變化に伴ひ、舊來の生產中心地が廢れて新たなる生產中心地が起つて來るかを說明するものである。（右の外に尙、運輸上の費用は短距離の場合よりも長距離の場合に比較的低廉であるといふ事情が加はつて來る）。

運輸機關の發達は、單に空間運動の速度を高め、かくして又空間的距離を時間的に短縮せしめるといふ結果を伴ふのみではない。交通機關の量が增大して、例へば多くの船が同時に二點間の相異つた線路を走るといふこと以外に、尙ほ例へば一週中の相續く異なつた日に運送船がリヴアプールからニュー・ヨークに向つて航行し、又は同じ日の相異なつた時間に貨物列車がマンチェスターからロンドンに向つて疾走するといふ結果が生ずる。運輸機關の輸送力が一定してゐるものと假定した場合、右の後ちに述べた事情は、絶對的の速力隨つて又それに相當した流通期間部分の上に變化を與へるものでないことは事實である。けれども商品は、現實的の積送が行はれる時まで伏能的商品資本として多量に累積されることなく、逐次的の短期間毎に少量づつ相次いで送り出され、かくして順次連續して市場に到著し得ることとなるのである。これがため資本の回流も亦、相續く各短小期間の上に配分され、その一部が商品資本として流通しつつあるとき、他の一部分は絶えず貨幣資本に轉化されるといふ結果を生ぜしめる。資本の回流が斯く逐次的の各期間に配分されると、その結果流通總期間、隨つて又資本の回轉は短縮されることとなる。一方から言へば、一つの生產場所がヨリ多量に生產し、ヨリ大なる生產中心地と

なるに比例して、先づ運輸機關が大なり小なりの程度に於いて頻々と作用するやうになる。例へば、一鐵道に使用される列車の數が殖えて來る。而して此現象は、既存の販路なる生產上竝びに人口上の大中心地や、輸出港などに向つて行はれるのである。然し又他の一面からいふと、交通が斯く特別輕易となり、これがため資本の回轉が——流通期間を必要とする程度に應じて——速かならしめられる結果、一方には生產中心地、他方にはその市場の集中が速められることとなる。而して與へられたる場所への人口及び資本量の集中が、斯く速められると共に、この資本量が少數人の手に集中する勢ひも亦增進して來る。同時に又、交通機關の變化に伴つて生產場所及び市場の相對的位置に變動を來たすため、商業中心の移動と代置とが生ずるやうになる。嘗ては公道又は運河に沿うた位置に依つて特殊の利益を占めてゐた生產場所が、今や比較的長き間斷を置いてでなければ列車の通じない單一の鐵道支線に沿うた位置に置かれるやうになると同時に、また從前交通要路から全く隔絕されてゐた他の場所が、今や數鐵道の交叉點を占めるやうにもなる。斯かる場合には、この第二の場所は隆興し第一の場所は衰滅する。斯くの如く、運輸機關の變化に依つて、商品の流通期間や賣買上の機會其他の方面に、場所的の差異が生じ、又は既存の場所的差異が異なつた樣式に配分されることとなる。この事實が資本の回轉にとつて如何に重要であるかは、鐵道經營者と種々なる地方における商工業代表者との間に行はれた論爭が示すところである。（例へば、曩に引抄した鐵道委員報告書を見よ）。

されば、生產物の性質上主として一地方に販路を求めねばならぬ凡ゆる生產部門（酒造業の如き）は、主要なる人口中心地に於いて最大規模の發達を見るのであつて、この場合、生產條件（建築場所その他）の價格が昂騰することあるとしても、それは資本の回轉がヨリ迅速となることに依つて償はれるのである。

一方に於いて、資本制生產の進步に伴ふ運輸交通機關の發達に依り、與へられたる商品量の流通期間が短縮されることは上述の通りであるが、他方に又、この同じ進步と運輸交通機關の發達に伴ふ可能とは、益々遠距離の諸市場、一言すれば世界市場を目的として生產するの必要を喚び起すものである。遠地に向つて移動しつつある商品の量は非常に增大し、かくして又長期間に亙つて絕えず商品資本なる段階のもとに在り流通期間の內部に存する社會的資本部分も、絕對的に又相對的に增大して來る。それと同時に又、社會的富の中、直接的の生產機關として役立つことなく、寧ろ運輸交通機關として、また經營上必要なる固定資本及び流通資本として投ぜられる部分も增大することとなるのである。

商品が生產場所から市場に移轉される期間の相對的長短といふことのみに依つても、流通期間の第一部分たる販賣期間の不等以上に、尙ほ流通期間の第二部分たる購買期間（貨幣が生產資本要素に再轉化される期間）の不等も生じて來る。商品がインドに向つて積送される場合を例に採らう。この目的の爲に、例へば四ケ月を要するとする。販賣期間は零に等しいと假定しよう。換言すれば、商品は註文に應じて積送され、而して其代價は現品と引換へに生產者の代理人の手に支拂はれるものと假定しよう。その支拂貨幣を送還するのにも（それが如何なる形で送還されるかといふ事は、此場合どうでも可い問題であるが）やはり四ケ月を要する。つまり同一の資本が生產資本として再作用しかくして同一の操作が更新され得るやうになるには、豫め八ケ月といふ總期間の經過を要する譯である。斯くして生ずる回轉上の不等は、信用期限の不等の物質的基礎の一つとなるものであるが、一方には又、例へばヴェネチア及ゲヌア兩市の海外貿易一般が、嚴密の意味の信用制度の一源泉になつたといふ如き事情もある。

『一八四七年の恐慌は、當時の銀行業竝びに貿易業をしてインド及支那に對する習慣（これら兩國とヨーロッパ諸國との間に行はれる手形支拂期限についての）をば一覽後十ケ月拂から六ケ月拂に短縮するを得せしめた。而して其後

二十年の經過に依り、航海の便と電信の設備とが與へられた結果、更らに之れを短縮して一覽後六ケ月拂から日附後四ケ月拂となし、以つて一覽後四ケ月拂に到るべき豫備階梯たらしめることが必要となつて來た。カルカッタを發して希望峯を巡りロンドンに達する帆船の航行に必要な期間は、平均九十日以下である。而して一覽後四ケ月拂なる手形支拂上の習慣は、百五十日といふ支拂期間に相當するであらう。然るに一覽後六ケ月拂なる現習慣は、二百十日といふ支拂期間に相當するものである』（『ロンドン、エコノミスト』誌一八六六年七月十六日號）。――他方に於いて『對ブラジル手形は、依然として一覽後二ケ月拂または三ケ月拂の習慣を保持してゐる。アントワープからロンドンに向けて取組まれる手形は、日附後三ケ月拂のものであるが、マンチェスター及びブラッドフォート兩市からロンドンに向けて取組まれる手形でさへも、三ケ月拂又はヨリ長期拂のものである。かくして商人は、手形が滿期となる時迄には――それ以前にはさうではないとしても――その商品を實現すべき十分の機會を與へられることとなる。されば對インド手形支拂上の習慣的期限は、決して度を失したものではない。インド生産物は大抵三ケ月の支拂期間を以つてロンドンに販賣されるものであるが、もし此販賣に尙若干の時間的餘裕を與へるとすれば、五ケ月を著しく降る短期間を以つてインド生産物を實現することは不可能となるのである。且つ又、インドで購買してイギリスの倉庫に引渡す迄の間には平均五ケ月を經過するのであるから、終極に於いて十ケ月といふ期間を要することとなる。然るにこの商品について取組まれる手形の支拂期間は七ケ月を超えないのである』（前揭一八六六年七月三十日號）。一八六六年七月二日、主としてインド及び支那と取引をしてゐるロンドンの五大銀行、竝びにパリーの割引業者たちは、一八六七年一月一日以後には東洋における彼等の支店銀行及び代理店をして、支拂期間が一覽後四ケ月を超過せざる手形のみを賣買せしむべしとの通知を發した』（前揭、一八六六年七月七日號）。けれども此支拂期間短縮は失敗に了り、廢止されねばならなくなつたのである。（爾後、スエヅ運河の開始に依つて、これら一切の事態は革命されることとなつた）。

商品の流通期間が延長されるにつれて、販賣市場における價格變動の生じ得べき期間を大ならしめるからである。ならば商品流通期間の延長は、價格變動の危險が著しくなることは言ふ迄もない。なぜ

一部的には、同一の營業部門內における個々の各資本間に個別的に存在し、一部的には、又卽時現金拂の行はれざる樣々の營業部門間に、その各の習慣となつてゐる手形支拂期限の如何に應じて存在するところの、流通期間上の不等は、賣買上における支拂期限の不等に基くものである。この問題は信用制度の上に重要な關係を有するものであるが、今のところ之れ以上には立ち入つて論究しないこととする。

更らに商品供給契約の範圍――それは資本制生産の範圍及び規模の擴大につれて擴大されるものであるが――に依つても、回轉期間上の不等が生じて來る。購買者と販賣者との間に行はれる取引としての商品供給契約は市場（卽ち流通部面）の領域に屬する一作用である。隨つて此契約に基く回轉期間上の不等は、流通部面から生ずることとなる譯であるが、それは生產部面に向つて直接反應作用してゆく。而して此事實は、一切の支拂期限及び信用事情を問題外に置いて、現金支拂が行はれると假定した場合にも生じ得るのである。例へば石炭、棉花、綿絲などは可分的の生產物であつて、日々一定量の完成生產物が供給されるのであるが、今、紡績業者なり鑛山主なりが、連續した各勞働日より成る四週乃至六週に亙つた一期間を要する生產物量の供給を引き受けたとすれば、それは資本の前貸さるべき期間について言ふ限り、四週乃至六週に亙つた連續的の一勞働期間を此勞働行程內に採用することと異ならないのである。これに就いては、註文生產品の全量が一時に供給されるべきもの、或は少なくとも其全部が供給された後に初め

て代價が支拂はれるものと假定することは言ふ迄もない。そこで個別的に觀察すれば、日々一定量の完成生産物が供給されることとなるが、此一定量の完成生産物は何づれも契約に從つて供給さるべき生産物量の一部に過ぎないのである。この場合、註文商品中の既に完成された部分は、もはや生産行程内に在留するものでないとはいへ、尙ほ伏能的資本として倉庫内に存在してゐるのである。

これより流通期間の第二部分たる購買期間、卽ち資本が貨幣形態から生産資本要素に再轉化される期間を考察することにしよう。此期間の持續中、資本は大なり小なりの期間貨幣資本なる狀態の下に置かれねばならぬ。かくして前貸總資本の一定部分は、絶えず貨幣資本なる狀態の下に置かれることとなる。（尤も此前貸資本部分は、絶えず變化しつつある要素から成るものである）。例へば、一定の營業に前貸された總資本の中、五×五〇〇磅なる金額は貨幣資本の形を採らねばならない。卽ち此五×五〇〇磅を組成する一切の部分は絶えず生産資本に轉化されてゐるとはいへ、同一の貨幣額は又流通（換言すれば、實現された商品資本）からの新たなる供給に依つて絶えず補充されるのである。かくて前貸資本價値の一定部分は絶えず貨幣資本なる狀態の下に置かれ、絶えず流通部面（生産部面ではなく）所屬の形態を採ることとなるのである。

市場の遠隔に依つて、資本が商品資本なる形態に拘束されてゐる期間が長引くと、貨幣の回流、隨つて貨幣資本から生産資本への資本轉化も亦、遲滯を來たすやうになることは既に見たところである。

更らに、商品購買の場合には購買期間を必要とする結果、換言すれば、大なり小なりの程度に於いて原料の主もなる供給源泉から遠隔することとなる結果、長期間分の原料を購買し之れを生産在庫品（換言すれば、伏能的又は可能的の生産資本）なる形態の下に準備して置くことが必要となり、斯くして生産の規模に變化なき限り、一時に前貸されねばならぬ資本量とそれが前貸さるべき期間とは增大することとなるのであるが、此事實も亦すでに（第六章）述べたところである。

多量の原料が市場に投ぜられる大小各種の期間も亦、種々なる營業部門の上に同樣の影響を及ぼすものである。例へばロンドンに於いては三ケ月毎に大規模の羊毛競賣が行はれ、それが羊毛市場を支配する事となるのであるが、棉花市場は是れに反し、收穫期から收穫期にかけて大體のところ連續的に供給を更新されて行くのである。尤も斯かる供給更新は、必ずしも劃一的の形に行はれるものではない。右の期間は上記諸原料の主もなる購買期限を決定するものであり、特に又斯かる生産要素の爲に大なり小なりの期間に亙つた前貸を必要ならしめる投機的購買の上に影響を及ぼすものであつて、これ恰も生産商品の性質が生産物をば故ら投機の目的を以つて、大なり小なりの期間、伏能的商品資本なる形態の下に保留し置くことの上に影響する如くである。隨つて彼れは、事態の如何に從ひ生産物の販賣を保留せねばならなくなる。『農民は又、或る程度までは投機師たることを要する。……』『されど生産物の販賣について最も重要な關係を有するものは、人と生産物そのものと地方との三要素である。實力と僥倖（！）とに依つて十分の經營資本を獲得した人は、價格の非常に低廉なる場合その農作物を一年間販賣せずに保留して置いても非難せらるべきではないであらうが、これに反して經營資本なく、或は總じて（！）投機心を缺いでゐる人は、當座の平均價格を得ようと努めるであらうから、それを得る機會が生ずるや否や、また斯かる機會ある毎に、農作物を販賣せねばならぬこととなるであらう。羊毛を一年以上保存して置くことは、殆んど常に損害を齎らすに過ぎないであらうが、穀物や菜種ならば、質及び構性の上に何等の損害をも與へずして數年間これを保存し置くことが出來る。例へば菜種や、唐花草や、オニナベナなどの如き、短期間內に價格の著しき昂低あるを常と

する諸種の生産物は價格が數年間に亙つて生産價格よりも遙か以下にある場合には、その間これを販賣せずに保存し置くを至當とするのである。肥養家畜の如き日々の保存費を要する生産物、又は果實や馬鈴薯などの如き惡化の虞れある生産物の販賣は、躊躇を許すこと最も少なきものである。一定の季節には生産物の價格が平均して最低限に下り、他の季節には又最高限に上るといふ地方もある。例へば若干の地方に於いては、クリスマスから復活祭にかけての期間よりも、聖マルチン祭の頃の方が、穀物は平均して低廉なのである。更らに生産物によつては、一定の時期でなければ善く賣れない地方もある。斯かる事實は例へば、羊毛取引が平素は停滯してゐるやうな地方の羊毛市場における羊毛について見られる所である』（キルヒホフ前掲、第三〇二頁）。

流通期間の後半（即ち貨幣を生產資本の諸要素に再轉化せしむる流通期間部分）を研究するに當つて考慮に入る問題は、單にそれ自體として考察した此轉化その者のみではない。換言すれば、生產物が販賣される市場への距離に應じて貨幣の回流し來たる期間が、考慮に入るのみではない。それと相竝んで又、前貸資本の一部が絶えず貨幣形態を採り、貨幣資本なる狀態のもとに存在せねばならぬ範圍といふ事が、何よりも先づ考慮に入るのである。

一切の投機を問題外に置いて考へる時、絶えず生產在庫品として存在せねばならぬ商品の購買範圍は、この在庫品の更新時期の如何に懸るものである。即ちそれは、同樣にまた市況の如何に懸る所の、隨つて原料その他の物が異なるにつれて差異を生ずる所の事情に依つて左右されるのである。されば此場合には、絶えず多額の貨幣が一時に前貸されねばならぬこととなる。この貨幣は資本回轉の如何に從つて、或時は急速に、或時は緩漫に、然し何づれの場合にも斷片的に、回流し來たるものであつて、その一部（即ち勞銀に再轉化される部分）は絶えず又短期間を經て再支出されるのであるが、他の部分（即ち原料その他の物に再轉化さるべき部分）は購買上なり支拂上なりに充用すべき準備金として長期間蓄積されねばならない。即ち此後ちの部分は、貨幣資本なる形を採つて存在するのである。尤もそれが斯樣に貨幣資本として存在する範圍は一樣ではない。

上述以外の事情――生產行程に基くものであると、流通行程に基くものであるとを問はず――に依つても、前貸資本の一定部分は斯く貨幣形態を採ることを必要ならしめられるものであるが、此事實については尙ほ次章に述べることとする。ただ此場合概括的に一言して置きたい事は、營業上に必要な資本の一部は、絶えず交互に貨幣資本、生產資本及び商品資本なる三形態を通過するものであるが、單にそれのみではなく、同一資本の相異つた各部分も亦――その相對的の大さは間斷なく變化してゐるとはいへ――絶えず相竝んで此等の形態を採るといふ事實をば、經濟學者達は兎かく忘れ勝ちである。別して彼等は、資本の一部が絶えず貨幣資本として存在するといふ事實を忘れてゐる。而も此事實こそ正に、ブルヂョア的經濟を理解する上に極めて必要なものであり、隨つて實際上にも極めて重要なものとなつて來るのである。

第十五章　回轉期間が資本前貸の大小に及ぼす影響

本章及び次ぎの第十六章に於いては、回轉期間が資本の價値增殖に及ぼす影響を論究する。

たとへば九週間に亙る一勞働期間の生產物である商品資本を例に採らう。固定資本の平均磨滅に依つて附け加へられる生產物價値部分と、生產行程の繼續中生產物に附加せられる餘剩價値との兩者を差し當り問題外に置いて考へるとすれば、此生產物の價値は、その生產上に前貸された流通資本の價値、換言すれば、勞銀と生產上に消費された原料竝びに助成材との價値に等しくなる。此價値が九百磅であり、隨つて每週の支出は一百磅であるとする。週期的の生產期間は此場合、勞働期間と一致するものであつて、矢張り九週間である。

この際問題となるものが連續的生產物に對する一勞働期間であると假定するか、それとも可分的生產物に對する連續的な一勞働期間であると假定するかは、いづれにしても關係する所がないのであつて、要するに一括して市場に提供される此可分的生產物の量が九週間の勞働を要したものでありさへすれば可いのである。流通期間は三週間であり隨つて全回轉期間は十二週間であると假定する。九週間の經過後、前貸生產資本は商品資本に轉化される。けれども、それは今や三週間に亙り流通期間內に在留するのである。そこで十三週目の始まる時でなくては、新たなる生產期間は再開始され得ないこととなる。而して生產は三週間（卽ち全回轉期間の四分の一）に亙つて休止することとなるであらう。商品が賣れる迄の間に、平均三週間を要すると假定するか、それとも此三週間なる期間は、市場への距離又は販賣商品についての支拂期限に依つて必要となると假定するかは、これ又どうでも可いことである。生產は三ケ月毎に三週間、隨つて一年間に 4×3 卽ち十二週間（＝三ケ月＝年回轉期間の $\frac{1}{4}$）休止することとなる。されば生產を連續的たらしめ、且つ每週同一の規模のもとに經營せしめようとすれば、其場合にはただ二つの方法が可能となるのみである。

其一は卽ち、生產の規模を縮小して、第一回轉における勞働期間竝びに流通期間の繼續中勞働の進行を保つに九百磅を以つて足るやうにせねばならないといふ事。此場合には、第一次の回轉期間が終了しない中に、早くも十週目から第二次の勞働期間隨つて又第二次の回轉期間が開始されることとなる。なぜならば回轉期間は十二週間であり、勞働期間は九週間であるからである。九百磅を十二週間に配分すると、一週當り七十五磅といふ結果が生ずる。

先づ、營業規模の斯かる縮小は、固定資本の範圍の變化、隨つて營業全般の縮小を前提するものであることは明かである。次に斯樣な縮小が果して行はれ得るか否かは疑はしい。なぜならば、種々異なつた營業における生產の發達に從つて、これ以上に投資を縮小すれば個々の營業が最早競爭に堪へ得なくなるといふ、投資上の標準的最低限界が生ずることとなるからである。この標準的最低限界は又、生產の資本制的發達に伴ひ絕えず擴大されるものであつて、決して固定したものではないのである。所が各場合に與へられてゐる標準的最高限界との間には、幾多の中間段階が存在するものであつて、共處には種々樣々な程度の投資が包容される。隨つて斯樣な中間限界の內部にも亦、短縮が行はれ得ることとなる。而して此短縮の限界となるものは、卽ち各場合における標準的最低限界そのものである。

生產の故障や、市場の過充や、原料の騰貴などが生じた場合には、勞働時間に制限を加へ、例へば半日だけ從業するといふことにして、與へられたる固定資本基礎のもとに流通資本の標準的放下を制限するといふ方法が行はれる。

反對に、營業隆昌期になると、一部的には勞働時間の延長に依り、一部的には又勞働能率の增進に依つて、與へられたる固定資本基礎のもとに流通資本の異常なる擴大が行はれるのである。斯樣な動搖の生ずべきことを最初から計算に入れてゐる營業に於いては、一部的には如上の方法にも賴よるが一部的には又準備固定資本（例へば鐵道における準備機關車等の如き）を充用する事に依つてヨリ多數の勞働者を同時に使用するといふ方法にも賴よるのである。然し玆では通例の事情を前提するのであるから、右の如き異常な動搖は考慮に入れないこととする。

そこで此場合、生產を連續的のものにするには、同一の流通資本支出をばヨリ大なる週間に亙つて、卽ち九週の代りに十二週に亙つて配分することが必要になつて來る。隨つて與へられたる各期間部分內に作用するところの生產資本は縮小されることとなる。生產資本の流動部分は、一百磅から七十五磅に節減される。卽ち四分の一の縮小を來たす譯である。九週間といふ勞働期間內に作用する生產資本の縮小總額は、二十五磅の九倍、卽ち二百二十五磅であつて、九百磅の四分の一に當る。ところが回轉期間に對する流通期間の比例も、同樣に十二分の三卽ち四分の一である。これに依つて次の結論が生じて來る。卽ち商品資本に轉化された生產資本の流通期間內に、生產を中絕せしめることなく、寧ろ流通と同時に間斷なく每週生產を持續させて行かうとすれば、そして其爲に利用すべき特別の流通資本が存在して居らないとすれば、斯かる場合には生產經營を縮小し、機能生產資本の流動部分を節減するといふ方法に依るのほか、目的を達成する道はないのである。流通期間の進行中にかく生產のため遊離された流通資本部分が前貸流通資本の總額に對して有する比例は、回轉期間に對する流通期間の比例に等しい。この事實は曩に述べた如く、勞働行程が每週同一の規模を以つて營まれる生產諸部門、換言すれば農業上に行はれる如く相異つた勞働期間には相異つた資本額が支出されねばならぬことのない生產諸部門にのみ通用するものである。

もし之れと反對に生產規模の縮小、隨つて又每週前貸さるべき流通資本の節減が、營業の性質上實行不可能であるとすれば、斯かる場合には、生產の連續といふことはただ流通資本の追加に依つてのみ達成せられ得る。上例に依れば、この追加額は三百磅である。十二週間に亙つた回轉期間の進行中に、合計一千二百磅といふ額が相次いで前貸される。三百磅といふ追加額は其四分の一に當る。これは三週間が十二週間の四分の一に當るのと同樣である。九週間といふ勞働期間の經過後、九百磅といふ資本價値は生產資本なる形態から、轉じて商品資本なる形態を採るやうになる。その勞働期間は終了された。けれどもそれは、同一の資本を以つて更新され得るものではないのである。生產行程の立場から見れば、この資本價値はそれが商品資本なる機能を盡しつつ流通部面內に在留してゐる三週間に亙つて、毫も存在せざる如き狀態のもとに置かれてゐるのである。玆では一切の信用事情を問題外に置く。換言すれば、資本家は自己の資本のみを以つて經營に當るものと假定するのである。而も第一の勞働期間について前貸された資本が、生產行程を經て三週間流通行程內に滯留しつつある時、追加的に放下された三百磅といふ資本は生產行程內に作用することとなるのであるから、生產の連續は中絕を來たすことはないのである。

これに就いては、以下の諸事實に注意すべきである。

第一に、最初前貸された九百磅といふ資本の勞働期間は九週後に終了するものであつて、それから三週間を經過した後でなければ回流し來たるものではない。卽ち十三週目に入つたとき、初めて回流して來るのである。けれども新たなる勞働期間は、三百磅といふ追加資本を以つて卽時に再開始される。かくして、生產の連續は確保されることとなるのである。

第二に、九百磅といふ原資本の機能と、九週間なる第一次勞働期間の終末に新たに追加された三百磅といふ資本——

第一次勞働期間の終了せるとき、中絶を來たすことなしに第二次の勞働期間を開始するところの——機能とは、第一次回轉期間の場合には確然と區別されて居り、或は少なくとも斯く區別し得るものであるが、第二次回轉期間の進行中には相互錯交することとなるのである。

この問題を尙ほ具體的に考へて見よう。

十二週間といふ第一次回轉期間。九週間といふ第一次勞働期間。この勞働期間の爲に前貸された資本の回轉は、十三週目の初めに終了する。三百磅といふ追加資本は最終の三週間に機能を盡し、九週間といふ第二次の勞働期間を開始するものである。

第二次回轉期間。十三週目の初めに九百磅は回流して來る。それは新たなる回轉を開始し得る狀態に在るのである。けれども第二次勞働期間は、既に三百磅といふ追加資本を以つて十週目に開始されてゐる。同一の資本に依つて、十三週目の初めには既に勞働期間の三分の一が完了され、三百磅は生產資本から生產物に轉化されたこととなる。第二次勞働期間を完了せしめるには、もやは六週間を要するのみであるから、第二次勞働期間の生產行程に入り得る額は九百磅といふ回流資本の三分の二即ち六百磅に過ぎぬのである。最初の九百磅の中から三百磅といふ額が遊離されて三百磅といふ追加資本が第一次勞働期間中に演じたところと同一の役割を演ずる事となる。第二次回轉期間の六週目の終末に、第二次の勞働期間が終了される。この勞働期間に投ぜられた九百磅といふ資本は、三週後に即ち十二週間といふ第二次回轉期間の九週目の終末に回流して來る。その流通期間の三週間中に、三百磅といふ遊離した資本は作用を開始する。かくして第二次回轉期間の七週目、即ち最初から計算して十九週目に九百磅といふ一資本の第三次勞働期間が始まることとなるのである。

第三次回轉期間。第二次回轉期間の九週目の終末に、九百磅といふ資本の新たなる回流が行はれる。けれども第三次勞働期間は、第二次回轉期間の七週目に早くも開始されてゐるのであつて、既に六週間を經過してゐる。即ち第三次勞働期間の分としては、僅かに三週間を餘すのみである。隨つて回流した九百磅の中、生產行程に入る分は三百磅に過ぎない譯である。第四次勞働期間は此回轉期間の殘餘九週間を占めることとなる。即ち最初から計算して三十七週目に、第四次回轉期間と第五次勞働期間とが同時に開始されることとなるのである。

以上の計算を單純のものとするために、勞働期間は五週間、流通期間は七週間、即ち回轉期間は十週間であると假定し、更らに一年を五十週と見て、一週當りの投資が一百磅に上るものと假定しよう。この場合、勞働期間は五百磅なる流通資本を要し、流通期間は更らに五百磅なる追加資本を要することとなり、勞働期間と回轉期間とは次の形に表現される。

第一次勞働期間——第一週から第五週迄。五百磅（商品）は第十週末に回流する。
第二次勞働期間——第六週から第十週迄。五百磅（商品）は第十五週末に回流する。
第三次勞働期間——第十一週から第十五週迄。五百磅（商品）は第二十週末に回流する。
第四次勞働期間——第十六週から第二十週迄。五百磅（商品）は第二十五週末に回流する。
第五次勞働期間——第二十一週から第二十五週迄。五百磅（商品）は第三十週末に回流する、等。

流通期間が零に等しく、隨つて回轉期間が勞働期間に等しいとすれば、一年間における回轉の數は、勞働期間の數に等しくなる。かくて勞働期間を五週間と見た場合、一年間における回轉の數は五分の五十、即ち十となり、回轉資本の價値は五百磅の十倍即ち五千磅となる。右の表は五週間といふ流通期間の存在を假定したものであるが、此場合

にも亦年々五千磅といふ價値の商品が生産される。けれども其十分の一、卽ち五百磅といふ額は、つねに商品資本の形態を採るものであつて、五週間を經過した後でなければ回流して來ないのである。第十次勞働期間（第四十六次乃至五十次勞働週）の生産物は、一年の終末に其回轉期間を半ば完了するだけであつて、流通期間に相當する分は翌年の最初の五週間に歸することとなる。

更らに第三例として、勞働期間が六週間、流通期間が三週間、毎週勞働行程に前貸される資本が一百磅である場合を採つて見よう。

第一次勞働期間——第一週から第六週迄。第六週末における六百磅といふ商品資本は第九週末に回流する。

第二次勞働期間——第七週から第十二週迄。第七週から第九週迄の間に、三百磅といふ追加資本が前貸される。第九週末に六百磅といふ額が回流して來る。この中、三百磅は第十週から第十二週迄の間に前貸される。かくて第十二週末には三百磅といふ額が現金として存在することとなる。商品資本としては、六百磅といふ額が存在する譯であるが、これは第十五週末に回流して來るのである。

第三次勞働期間——第十三週から第十八週迄。第十三週から第十五週迄の間に、上記の三百磅が前貸され、次いで六百磅といふ額が回流して來る。この中、三百磅は第十六週から第十八週迄の間に前貸される。第十八週末には、三百磅といふ額が現金として存在してゐる譯であるが、之れは第二十一週末に回流して來る。此第三の場合のヨリ立ち入つた說明については、以下（二）に述ぶる所を見よ。

以上三つの場合を相互比較することに依つて先づ見出される事は、第一の五百磅といふ資本と、第二の同じく五百磅といふ追加資本とが相次いで解放され、かくて此等の兩資本部分が互ひに分離して運動するやうになるのは、右の第二の場合にのみ限られてゐるといふことである。蓋し此第二の場合には、勞働期間と流通期間とがそれ〴〵回轉期間の相等しき半分であるとの例外的な假定を與へたからである。然るに他の如何なる場合に於いても——回轉期間の兩部分の不等の如何を問はず——兩資本の運動は、右の第一及第三例に示す如く、互ひに錯交するものであつて、この錯交は早くも第二次回轉期間から始まるのである。卽ち第二（追加）資本は第一資本の一部と相合して、第二次回轉期間に作用するところの資本を構成するものであるが、同時に又、第一資本の殘部は遊離されて、第二資本の本來の機能を盡すこととなる。この場合、商品資本の流通期間中に作用するところの資本は、本來この目的のために前貸された第二資本と同一のものではないが、其價値は同一であつて、いづれも前貸總資本の同一の可除部分となるのである。

第二に、勞働期間の進行中に作用するところの資本は、流通期間の進行中には休用狀態に置かれる。第二の場合について言へば、資本は五週間といふ勞働期間中に作用して、五週間といふ流通期間中には休用狀態に置かれてゐる、卽ち此場合、一年の經過中に第一資本が休用狀態に置かれてゐる總期間は半ケ年に上るのである。この期間中、第二の追加資本が代つて作用するのであるが、此資本も亦上例について言へば半年間寢かされることとなる。けれども流通期間の進行中生產の連續を確保するに必要なる追加資本の額は、一年間に行はれる流通諸期間の總範圍又は總和に依つて決定されるものでなく、回轉期間に對する流通期間の比例に依つてのみ決定されるのである。（玆では言ふ迄もなく、一切の回轉は同一條件のもとに行はれるものと假定するのである）。隨つて、前記第二の場合に必要な追加資本は五百磅であつて、二千五百磅ではないといふことになる。これは單純に、左の事實に起因するものである。卽ち追加資本なるものは、最初前貸された資本と同樣にして回轉を通過するものであり、隨つて又後者と全く同樣に、回轉

の數を以つてそれ自身の量を償ふこととなるのである。

第三に、生産期間が勞働期間以上に出づるか否かといふ問題は、なほ考察する事實の上に何等の變化をも與へるものではない。斯かる原因に依つて、回轉諸期間の總和が延長されることとなるは言ふ迄もない。けれども回轉の斯樣な延長は、勞働行程の爲に何等の追加資本をも必要ならしめるものではない。追加資本なるものは、流通期間に基く勞働行程上の空隙を充たすといふ目的を有するのみであつて、流通期間の爲に生産が攪亂を受けないやうに保護することが、その唯一の使命となつてゐるのである。生産それ自體の條件に基く攪亂は、なほ考察すべきではない他の樣式を以つて補償されねばならぬ。然るに又、從業が註文に應じて斷續的にのみ行はれる營業もある。斯かる營業に於いては、各勞働期間の間に中斷が生じ得る譯であつて、それだけ追加資本の必要は削減されることとなるのである。他方に又、季節勞働に於いては、大抵の場合回流の時期について一定の限界が與へられてゐる。同一の資本を以つて翌年に同一の勞働を更新するといふことは、それ迄の間に此資本の流通期間が完了されない限り不可能な事である。反對に又、一つの生産期間から次の生産期間にかけての中斷期間の方が小であるといふ場合もあり得る。この場合には、資本は斯かる中斷期間中他の方面に充用されない限り休用狀態に置かれてゐることとなるのである。

第四に、一勞働期間の爲に前貸された資本（即ち上記第三の場合に例を求むれば六百磅）は、一部的には勞働期間に充用すべき生産在庫品を構成するところの原料及び助成材たる不變流通資本に投ぜられ、一部的には又、可變流通資本に勞働そのものの購買に投ぜられる。不變流通資本に投ぜられた部分が、生産在庫品なる形態を以つて、存在し得る期間は同一ではない。例へば、全勞働期間分の原料を準備して置くことは不可能であらう。また石炭の如きは、二週毎に購買し得るのみである。だが此場合にも尙、信用は存在しないものとして考へるのであるから、斯樣な資本部分は、それが生産在庫品として利用し得べき狀態のもとに存在しない限り、貨幣として利用し得べき狀態のもとに置かれ、需要に應じて生産在庫品に轉化され得る位置に在ることを要する。この事實は、六週間に亙つて前貸された不變流通資本價値の大さに何等の變化をも與へるものではない。然るに（豫測すべからざる支出に充用すべき保藏貨幣即ち嚴密の意味の補償用準備金のことは暫らく措き）勞銀の方はヨリ短小の期間（大抵は一週毎）に支拂はれる。されば資本家がヨリ長期間に亙つて勞働前貸をなすやうに勞働者を强制する事なき限り、勞銀の支拂に充用すべき貨幣形態を採つた資本を準備して置く事が必要となつて來る。資本が回流する時、その一部は生産在庫品に轉化せられ得るけれども、他の一部は勞働の代價の支拂に充用すべき貨幣形態のまま保留されねばならぬこととなるのである。

追加資本は原資本と全く同樣に配分される。けれどもそれは、左の一點に於いて第一資本から區別される。即ち（信用事情のことは暫く措き）追加資本なるものは、それ自身の勞働期間に利用すべきものであつて、この目的上、自己の關與することなき第一資本の第一次勞働期間の全繼續中に早くも前貸されて居らねばならないといふ事がそれである。此期間の繼續中すでに、追加資本の少なくとも一部だけは、回轉期間の全部に對して前貸されるところの不變流通資本に轉化せられ得る。それが如何なる程度まで、斯樣な形態を採るか、又は右の轉化が必要となる時まで、如何なる程度に於いて追加貨幣資本なる形態を把持してゐるかといふ問題は、一部的には一定營業部門の特殊の生産條件に依つて定まり、一部的には地方的の事情、一部的には又原料その他の物の價格動搖に依つて左右される。社會的の總資本について言へば、斯かる追加資本の多かれ少なかれ顯著なる部分は絶えず長期間に亙り貨幣資本として存在してゐることとなる。反對に、第二資本中の勞銀として前貸される部分の方はヨリ短小なる勞働期間が終了され共用費

が支拂はれるに應じて、次第に勞働力に轉化されることを常とするものである。卽ち第二資本の此部分は、それが勞働力に轉化されることに依つて生產資本の機能を盡すやうになる迄の間、全勞働期間の進行中貨幣資本なる形態を把持してゐることとなるのである。

要するに、第一資本の流通期間を生產期間に轉化せしむるに必要なる追加資本の斯樣な出現は、單に前貸資本の量と、總資本が必然的に前貸されねばならぬ期間とを增大せしむるのみではなく、又特に、保藏貨幣として存在し、隨つて貨幣資本なる狀態を保ち、伏能的貨幣資本なる形態を有するところの前貸資本部分を增大せしむるものである。

生產在庫品竝びに保藏貨幣なる形態を採つた前貸について言ふ限り、第一次勞働期間に要する資本と流通期間に要する補償資本との分割——流通期間の存在に依つて必要となるところの——を齎らす原因が、放下資本の增大といふことではなく、寧ろ生產規模の縮小といふことに在る場合にも、右の事實は同樣に生じて來るのである。斯かる場合には、生產規模に比較して言へば、貨幣形態に拘束された資本の增大は更らに著しきものとなるのである。

資本が斯く本來の生產資本と追加資本とに分割されることに依つて達成されるところのものは、卽ち各勞働期間の間斷なき連續、換言すれば前貸資本の等量なる一部が生產資本として盡す不斷の機能である。

曩に揭げた第二例を考察して見よう。絕えず生產行程內に在留する資本は五百磅である。勞働期間は五週間であるから、この資本は一年（五週間と假定する）に十回生產上に運用される譯であつて、その生產物は——餘剩價値のことは暫らく措き——五百磅の十倍卽ち五千磅となる。かくて直接に絕え間なく生產行程の上に運用される資本（五百磅といふ資本價値）の立場から見れば、流通期間なるものは全く削除された形になつて來る。回轉期間は勞働期間と一致する。流通期間は零に等しいものとされるのである。

反對に若し、五百磅なる資本が五週間といふ流通期間に依つて其生產的活動を中斷されることが常則であつて、十週間といふ全回轉期間の終了後でなければ其生產能力を再取するものではないとすれば、斯かる場合には、一年卽ち五十週間に各十週間の回轉が五回行はれることとなる。此中には各五週間なる五つの生產期間が含まれてゐるゆゑ、生產期間は合計二十五週間となり、その生產物總額は五百磅の五倍卽ち二千五百磅となる。流通期間の方も各五週間のものが五回であるから、合計すると矢張り二十五週間となる譯である。此事實を若し、五百磅なる資本が年に五度び回轉したといふ風に解するとすれば、これ取りも直さず各回轉期間の半分に於いては右の五百磅なる資本が毫も生產資本として作用せず、卽ち總計的に言ふと、半年間だけ作用して他の半年間には毫も機能を盡さなかつたといふ意味を含むことは一目瞭然である。

第二例に於いては、右に揭ぐる五つの流通期間の繼續中に五百磅といふ補償資本が與へられるのであつて、これがため回轉は二千五百磅から五千磅に高められることとなる。然し前貸資本も亦、今や五百磅から一千磅となるのである。五千を一千で割れば五となる。卽ち回轉の度數は十でなくて五である。事實上にも矢張り斯く計算されてゐる。然るに一千磅なる資本が年に五度び回轉したと言ふ場合には、資本家の空虛な頭の中には流通期間に對する記憶は消え失せてしまつて、此資本は連續的な五回轉を通じて絕えず生產行程の內部に作用してゐたといふ混亂した觀念が生じて來る。然るに一千磅なる此資本が年に五度び回轉したと言ふ時には、流通期間と生產期間との雙方を含めて考へることとなるのである。實際のところ、一千磅なる資本が現實に於いて間斷なく生產行程內に活動してゐたものとすれば、上述の如き假定のもとに生ずる結果は五千磅とはならず、寧ろ一萬磅となるべき筈である。けれども生產行程の上に絕えず一千磅といふ額を存せしむる爲には、總じて二千磅といふ額を前貸せねばならぬこととなるであらう。

回轉の機構につき何等の明瞭なる觀念をも有せざることを常とする經濟學者たちは、絕えずこの重要事項（卽ち間斷なく生產を進行させる爲には、事實上つねに產業資本の一部分のみを生產行程內に拘束し得るに過ぎないといふこと）を見落してゐる。產業資本の一部が生產期間中に作用してゐる時、他の一部は常に流通期間中に在留して居らねばならぬ。別言すれば、產業資本の一部は他の部分が商品資本又は貨幣資本なる形態を採つて嚴密の意義における生產資本として作用し得るのである。この事實を見落すが故に、總じて貨幣資本の意義及び役割が見落されることとなるのである。

我々はこれより、回轉期間の兩部分たる勞働期間と流通期間とが相等しいか、又は勞働期間の方が流通期間よりも大であるか小であるかの如何に從つて、回轉の上に如何なる差異が生ずるか、更らに又、此事實が貨幣資本なる形態への資本拘束の上に如何なる影響を及ぼすかを攻究しなければならない。

毎週前貸すべき資本は何づれの場合にも一百磅であり、而して回轉期間は九週間、隨つて各回轉期間に前貸すべき資本は九百磅であると假定する。

（一）勞働期間が流通期間と等しい場合

此場合は現實的には偶然の異例に過ぎぬものではあるが、それにも拘らず玆に與へんとする考察の出發點として役立つべきである。なぜならば、それは事態を最も單純明瞭な形に表現してゐるからである。

第一次勞働期間に前貸される第一資本と、此資本の流通期間中に作用する第二（追加）資本との兩者は、その運動上錯交し合ふことなしに交代するものである。卽ち第一次の期間を除いて考へるならば、此等兩資本の各はそれ自身の回轉期間についてのみ前貸されたものとなる。左記の例解に示す如く、回轉期間は九週間隨つて勞働期間と流通期間とは夫々四週間半であると假定する。然る場合には左表の如き年計算が生じて來る。

表（I）

第一資本

回轉期間	勞働期間	前貸	流通期間
(一)第一週乃至第九週	第一週乃至第四週半	四五〇磅	第四週半乃至第九週
(二)第十週乃至第十八週	第十週乃至第十三週半	四五〇磅	第十三週半乃至第十八週
(三)第十九週乃至第二十七週	第十九週乃至第二十二週半	四五〇磅	第二十二週半乃至第二十七週
(四)第二十八週乃至第三十六週	第二十八週乃至第三十一週半	四五〇磅	第三十一週半乃至第三十六週
(五)第三十七週乃至第四十五週	第三十七週乃至第四十週半	四五〇磅	第四十週半乃至第四十五週
(六)第四十週乃至(第五十四週)	第四十六週乃至第四十九週半	四五〇磅	第四十四週半乃至 第五十四週)

（三十一）括弧に入れてあるものは、二年目の回轉に繰り入れられる週間を示す。

第二資本

回轉期間	勞働期間	前貸	流通期間
(一)第四週半乃至第十三週半	第四週半乃至第十三週半	四五〇磅	第十週乃至第十三週半
(二)第十三週半乃至第二十二週半	第十三週半乃至第二十二週半	四五〇磅	第十九週乃至第二十二週半
(三)第二十二週半乃至第三十一週半	第二十二週半乃至第三十一週半	四五〇磅	第二十八週至第乃三十一週半
(四)第三十一週半乃至第四十週半	第三十一週半乃至第四十週半	四五〇磅	第三十七週乃至第四十週半
(五)第四十週半乃至第四十九週半	第四十週半乃至第四十九週半	四五〇磅	第四十六週乃至第四十九週半
(六)第四十九週半乃至(第五十四週)	第四十九週半乃至(第五十四週半)	四五〇磅	第五十四週乃至八第五十八週半)

茲に一年を構成するものと假定した五十週間中に、第一資本の方は完全なる勞働期間を六度び通過して、四百五十磅の六倍即ち二千七百磅といふ價値ある商品を生産する。而して第二資本の方は完全なる勞働期間を五度び通過して四百五十磅の五倍即ち二千二百五十磅といふ價値ある商品を生産し、ほかに尙一年の最後の一週半（即ち第五十週の中半から第五十一週の終末迄）に百五十磅といふ價値ある商品を造り出すのである。かくて五十一週間中に造られる生産物の總價値は五千一百磅となる。そこで餘剩價値——それは勞働期間中にのみ生産されるものであるが——の直接的生産について言へば、九百磅なる總資本は五回と三分の二だけ（$5\frac{2}{3}\times 900=5100$磅）回轉したこととなるのである。けれども現實的回轉の立場から見ると、第一資本の方は五回と三分の二、また第二資本の方は五回と六分の一だけ回轉したこととなる。蓋し前者は、第五十一週末に第六次回轉期間の中一週間半を通過したに過ぎず、隨つて殘餘の七週間半は翌年に繰り入れられることとなるからである。$5\frac{1}{6}\times 45=232\frac{1}{2}$磅であるから、現實における回轉總額は四千八百七十五磅となる。

第一資本と第二資本とが相互に全く獨立した二資本であるとして見よう。此等の兩資本は共運動の上から見れば全く相獨立したものであつて、ただ其勞働期間と流通期間とが直接交代し合ふといふ理由に依つてのみ、兩者の運動は相互補充することとなるのである。此等の兩資本は、各異なつた資本家の有に屬する全く相獨立した二資本と見ることが出來る。

第一資本の方は、五回といふ完全なる回轉期間と、六回目の回轉期間の三分の二とを通過した。それは一年の終末には、通例の實現を遂ぐるに尙ほ三週間を要するところの商品資本として存在してゐる。この期間の繼續中、それは生產行程に入ることが出來ず、商品資本として作用し、流通してゐるのである。最終回轉期間の中では、其三分の二だけが通過されたに過ぎない。これは次ぎの形に言ひ現はされる。即ち回轉が三分の二回だけ行はれたのである。換言すれば、總價値の三分の二だけが完全なる回轉を成し了へたのである。四百五十磅は九週間に、隨つて三百磅は六週間に回轉を成し了へると言ふが、然し此言ひ現はしに於いては、回轉期間の特に相異つた兩部分間の有機的關係は無視されることとなる。四百五十磅なる前貸資本が五回と三分の二迄進んだといふことである意義は、要するに此資本が回轉を五回だけ完全に成し了へて、更らに第六次回轉の三分の二迄進んだといふことである。然るに回轉資本の五倍三分の二（即ち上例に依れば$5\frac{2}{3}\times 450=2550$磅）に等しいといふ言ひ現はしの中には、この四百五十磅なる資本が他の四百五十磅なる一資本に依つて補充されないとすれば、實際に於いて其一部は生產行程內に在留し、他の一部は流通行程內に在留せねばならぬことになるといふ正確な意義が含まれてゐる。回轉期間を回轉資本の量に依つて言ひ現はすべきであるとすれば、この期間は常に既存價値（實際のところ完成生產物の）量を以つて言ひ現はされ得るのみであらう。前貸資本が生產行程を新たに開始し得る狀態のもとに存在しないといふ事實は、前貸資本の一部のみが生產能力ある狀態のもとに置かれてゐるに過ぎないといふ事實、換言すれば資本を連續的生產の狀態のもとに置くには、之れを生產期間中に間斷なく存在する部分と流通期間中に間斷なく存在する他の部分とに分割する必要があるといふ事實に依つて言ひ現はされる。これら兩部分の大小は、生產期間と流通期間との相互比例の如何に準據するものであつて、これについては間斷なく作用しつつある生產資本の量をば、回轉期間に對する流通期間の比例に依つて決定せしむる所のものと、同一の法則が行はれることとなるのである。

第二資本について言ふと、茲に一年末として假定する所の第五十一週末に當り百五十磅なる部分は未完成生產物の生產に前貸されて居り、他の一部は流通不變資本（原料など）なる形態、換言すれば生產資本として生產行程內に作

用し得る形態を採つてゐる。然るに第三の部分は、貨幣形態を採つて對する勞銀——而もそれは各週末に初めて支拂はれるのであるが——の高だけは少なくとも、斯様な形態を採ることとなるのである。ところで此資本は、新たなる一年、換言すれば新たなる一回轉の初期に於いては生產資本なる形態を採ることなく、寧ろ其儘では生產行程に入ることの出來ない貨幣資本として存在するとはいへ、而も新たなる回轉の開始されるとき、流通可變資本たる生きた勞働力は生產行程の內部に活動してゐるのである。此現象は次の事實に起因するものである。卽ち勞働力なるものは、勞働期間の開始當時に、例へば一期間分づつ購買され消費されるものであるが、その代價は各週末に至り初めて支拂はれるといふことがそれである。この場合、貨幣は支拂要具として作用する。卽ちそれは一方から言へば、貨幣として尙ほ資本家の手に在留してゐるが、他方から言へば、それが轉化されるところの商品である勞働力は、既に生產行程內に活動してゐるのであつて、同一の資本は此場合二重に現はれることとなるのである。

單に勞働期間だけを觀察するならば、第一資本の生產した額は 6×450 卽ち二千七百磅、第二資本の生產した額は $5\frac{12}{13}\times450$ 卽ち二千四百磅であつて合計 $5\frac{12}{13}\times900$ 卽ち五千一百磅といふ生產物が生じたこととなる。つまり九百磅といふ前貸總資本は年に五回と三分の二だけ生產資本なる機能を盡した譯である。四百五十磅といふ資本が、絕えず交互に生產行程と流通行程との內部に作用するにしろ、又は九百磅といふ資本が初めの四週間半は生產行程內に作用し、次の四週間半は流通行程內に作用するにしろ、いづれにしても餘剩價値生產の立場から見れば異なる所はないのである。

反對に、回轉資本を觀察するならば、第一資本の回轉額は $5\frac{12}{13}\times450$ 卽ち二千四百磅、第二資本の回轉額は $5\frac{1}{6}\times450$ 卽ち二千三百二十五磅であつて、合計 $5\frac{5}{12}\times900$ 卽ち四千八百七十五磅といふ額が回轉したこととになる。

蓋し總資本の回轉（は、第一資本と第二資本との回轉額を此等兩資本の總額で割つた數に等しいからである。

玆に注意すべきことは、假りに第一資本と第二資本とが相互に獨立した資本であるとして考へても、これ等の兩資本は要するに、同一の生產部面に前貸された社會的資本の各異なつた獨立部分たるに過ぎない。隨つて同一生產部面の內部における社會的資本が專ら第一資本と第二資本とのみから成るものと假定すれば、この場合同一なる私資本の第一部分と第二部分とについて適用し得る計算は又、同一の生產部面に投ぜられた社會的資本總體の各部分も亦かく計ることとなるであらう。更らに總括して言へば、特殊の一生產部面における社會的資本の回轉について適用し得算されるものである。けれども究竟するところ、社會的資本總體の回轉數なるものは、種々異なつた生產部面の內部で回轉した資本の總額をば、此等の生產部面に前貸された資本の總額で割つたものに等しいのである。

更らに注意を要することは、この場合同一の私營業における第一資本と第二資本とは、嚴密に言へば相異つた回轉年を有するものであるが（なぜならば第二資本の回轉循環は、第一資本の回轉循環が始まつてから四週間半後に開始されるものであつて、第一資本の回轉年は第二資本のそれよりも四週間半早く終了することとなるから）、それと同樣に、同一の生產部面における種々異なつた私資本も亦、全く相異なつた時期に營業を開始し、隨つて一年間の種々異なつた時期に年回轉を終了する。曩に第一資本と第二資本とについて應用した平均計算は、此場合また社會的資本の各異なつた獨立部分の回轉年をば、全一的なる一回轉年に約元せしむるに足るものである。

（二）勞働期間が流通期間よりも大なる場合

第一資本及び第二資本の勞働期間と回轉期間とは、相互交代しないで錯交し合ふ。此場合には資本の遊離が同時的

に行はれるのであつて、斯かる現象は、曩に考察した場合には生じなかつた所である。

けれども（一）前貸總資本の勞働期間の數は依然として、兩前貸資本部分の齎らす年生産物の價値總額を前貸資本の總額で割つたものに等しく、又（二）總資本の回轉數は依然として、兩回轉額の總和を兩前貸資本の總額で割つたものに等しいといふ事實は、右の現象に依つて何等の變更をも與へられるものではない。此場合にも亦、兩資本部分は相互に全く獨立した回轉運動をなすものと見做さなければならないのである。

そこで此場合にも亦、毎週一萬磅なる資本が勞働行程の上に前貸さるべきであると假定する。勞働期間は六週間であつて、それが各六百磅づつの前貸を要するものとする（第一資本）。流通期間は三週間、隨つて回轉期間は上記の場合と同樣に九週間であると假定し、且つ三百磅なる第二資本が、三週間といふ第一資本の流通期間中に作用し始めるものと假定する。これの兩者を相互に獨立した資本として見れば、年回轉は左表の如くになる。

表（II）

第一資本、六百磅

回轉期間	勞働期間	前貸	流通期間
(一)第一週から第九週迄	第一週から第六週迄	六〇〇磅	第七週から第九週迄
(二)第十週から第十八週迄	第十週から第十五週迄	六〇〇磅	第十六週から第十八週迄
(三)第十九週から第二十七週迄	第十九週から第二十四週迄	六〇〇磅	第二十五週から第二十七週迄
(四)第二十八週から第三十六週迄	第二十八週から第三十三週迄	六〇〇磅	第三十四週から第三十六週迄
(五)第三十七週から第四十五週迄	第三十七週から第四十二週迄	六〇〇磅	第四十三週から第四十五週迄
(六)第四十六週から〔第五十四週迄〕	第四十六週から第五十一週迄	六〇〇磅	〔第五十三週から第五十四週迄〕

（追加）資本、三百磅

回轉期間	勞働期間	前貸	流通期間
(一)第七週から第十五週迄	第七週から第九週迄	三〇〇磅	第十週から第十五週迄
(二)第十六週から第二十四週迄	第十六週から第十八週迄	三〇〇磅	第十九週から第二十四週迄
(三)第二十五週から第三十三週迄	第二十五週から第二十七週迄	三〇〇磅	第二十八週から第三十三週迄
(四)第三十四週から第四十二週迄	第三十四週から第三十六週迄	三〇〇磅	第三十七週から第四十二週迄
(五)第四十三週から第五十一週迄	第四十三週から第四十五週迄	三〇〇磅	第四十六週から第五十一週迄

生産行程は一年中絶えず同一の規模を以つて進行する。而して第一資本と第二資本とは全く分離されてゐるのである。けれども此等の兩資本を斯く分離されたものとして表現する爲には、その現實における交叉及び錯綜を分解し、それに依つて回轉數を變化せしめることが必要となるであらう。蓋し右の表に依れば、回轉額は次の如くになるからである。

第一資本　$5\frac{2}{3} \times 60 = 340$ 磅

第二資本　$5 \times 300 = 1500$ 磅

合　計　$5\frac{4}{9} \times 900 = 4900$ 磅

けれども之れは事實と一致しない。なぜといふに、現實における生産期間並びに流通期間が、右の表に示すところと絶對的に一致するものでないことは後に說く通りであつて、右の表に於いては、第一資本と第二資本とを相互に獨立したものとして示すことが主なる目的となつてゐるからである。

即ち現實についていへば、第二資本は第一資本の勞働期間及び流通期間から分離された特殊の勞働期間及び流通期

間を有するものではない。勞働期間は六週間、流通期間は三週間である。第二資本は三百磅きりであるから、それは一勞働期間の一部分を充たし得るに過ぎない。事實に於いても其通り行はれてゐるのである。第六週末に六百磅といふ生産物價値が流通に入り、第九週末にはそれが貨幣となつて回流して來る。それから又、第七週目の初期に第二資本が活動を開始して、第七週から第九週に至る次の勞働期間の必要を充たすのである。ところが、曩の假定に依ると第九週末には勞働期間は半ば終了するに過ぎない。隨つて第十週の初期には、正に回流したばかりの六百磅といふ第一資本が再び活動を開始し、第十週から第十二週迄の期間の爲に必要な三百磅といふ前貸を與へる。かくして第二次勞働期間は完了することとなるのである。六百磅といふ生産物價値は流通内に在留し、第十五週末になると再び回流して來るであらう。けれどもそれと同時に、三百磅といふ最初の第二資本に等しい額が遊離されて、次の勞働期間の前半中（卽ち第十三週から第十五週まで）に作用し得るやうになる。この期間の終了後、再び六百磅といふ資本が回流して來る。勞働期間が終了する迄の間には、右の中三百磅だけあれば十分であり、殘餘の三百磅は次の勞働期間に使用すべく遊離されてゐることとなるのである。

卽ち事態は左の如くに進行する。

（I）回轉期間——第一週から第九週迄。

（一）勞働期間——第一週から第六週迄。六百磅なる第一資本が作用する。

（二）流通期間——第七週から第九週迄。第九週末に六百磅が回流する。

（II）回轉期間——第七週から第十五週迄。

（一）勞働期間——第七週から第十二週迄。

其前半——第七週から第九週迄。三百磅なる第二資本が作用する。第九週末に六百磅（第一資本）が貨幣となつて回流する。

其後半——第十週から第十二週迄。第一資本中の三百磅が作用し、殘餘の三百磅は遊離された儘になつてゐる。

（二）流通期間——第十三週から第十五週迄。第十五週末には、一半は第一資本から成り、一半は第二資本から成るところの六百磅といふ額が、貨幣となつて回流する。

（III）回轉期間——第十三週から第二十一週迄。

（一）勞働期間——第十三週から第十八週迄。

其前半——第十三週から第十五週迄。遊離されてゐた三百磅が作用を開始する。第十五週末には、六百磅が貨幣となつて回流する。

其後半——第十六週から第十八週迄。回流した六百磅の中、三百磅は機能を盡し、殘餘の三百磅は再び遊離される。

（二）流通期間——第十九週から第二十一週迄。第二十一週末には又、六百磅が貨幣となつて回流して來る。此六百磅の中には、今や第一資本と第二資本とが區別し得ざるやうに融合されてゐるのである。

かくして第五十一週末迄には、六百磅といふ一資本の完全な八つの回轉期間が（卽ち一、第一週から第九週迄。二、第七週から第十五週迄。三、第十三週から第二十一週迄。四、第十九週から第二十七週迄。五、第二十五週から第三十三週迄。六、第三十一週から第三十九週迄。七、第三十七週から第四十五週迄。八、第四十三週から第五十一週迄）

生することとなる。けれども第四十九週から第五十一週迄は第八次流通期間に屬するものであるから、その間に三百磅なる遊離資本が關與して來て、生産を進行せしめなければならない。かくして一年の終末には、回轉は次の如くになる。卽ち六百磅は八度び循環を完了して合計四千八百磅といふ額が回轉したこととなる。ほかに最後の三週間（第四十九週から第五十一週迄）の生産物が加はつて來る。尤も此生産物は九週間なる循環の三分の一を通過したに過ぎず、隨つて其價値の三分の一に相當した一百磅といふ額だけが、回轉總額の一部として算入される事となる。されば五十一週間に造られる年生産物の價値は五千一百磅であるとしても、實際に回轉した資本は四千八百磅と一百磅との總和、卽ち四千九百磅にしかならない。要するに、九百磅なる前貸總資本は五回と九分の四だけ（卽ち上記の第一場合におけるよりも幾分多く）回轉した事となるのである。

上例に於いては、勞働期間が回轉期間の三分の二に等しく、流通期間が回轉期間の三分の一に等しき場合、卽ち勞働期間が流通期間の單純倍數である場合を假定した。ところで實際この假定通りには行はれない場合にも、上述の如き資本遊離が生ずるか否かといふことが問題となる。

今、勞働期間は五週間、流通期間は四週間であつて、一週間分の資本前貸は一百磅に等しいと假定しよう。

（I）回轉期間——第一週から第九週迄。

（一）勞働期間——第一週から第五週迄。五百磅なる第一資本が作用する。

（二）流通期間——第六週から第九週迄、第九週末に五百磅が貨幣となつて回流する。

（II）回轉期間——第六週から第十四週迄。

（一）勞働期間——第六週から第十週迄。

其第一部分——第六週から第九週迄。四百磅なる第二資本が作用する。第九週末に、五百磅なる第一資本が貨幣となつて回流する。

其第二部分——第十週。回流した五百磅の中、一百磅だけが作用し、殘餘の四百磅は次の勞働期間に使用すべきものとして遊離されてゐる。

（二）流通期間——第十一週から第十四週迄。第十四週末には、五百磅が貨幣となつて回流する。

第十四週末に至る迄の間（第十一週乃至第十四週）、右の遊離された四百磅が作用する。次で回流する五百磅の中、一百磅は第三次勞働期間（第十一週から第十五週迄）の必要を充たす。かくて更らに、四百磅といふ額が第四次勞働期間に使用すべきものとして遊離されることとなる。これと同一の現象は、各勞働期間に反復されるものであつて、各勞働期間の開始される當時には、最初の四週間の必要を充たすに足る四百磅といふ額が豫め存在してゐるのである。而して第四週末には、五百磅が貨幣となつて回流するのであるが、其中最後の週に必要のものは一百磅きりであつて殘餘の四百磅は次の勞働期間の爲に遊離されてゐるのである。

更らに、七百磅といふ第一資本を要する七週間に亙つた勞働期間と、二百磅といふ第二資本を要する二週間に亙つた流通期間とを假定しよう。

此場合には、第一次回轉期間は第一週から第九週までに及び、この中、第一次勞働期間は第一週から第七週迄であつて七百磅なる前貸を要し、第一次流通期間は第八週からで第九週迄つづく。而して第九週末には、七百磅が貨幣となつて回流するのである。

第二次回轉期間（第八週から第十六週迄）は、第八週末から第十四週迄に及ぶ所の第二次勞働期間を含むものであ

つて、この中、第八週及び第九週分の必要は第二資本に依つて充たされる。第九週末には上記の七百磅が回流して來る。その中五百磅は、この勞働期間の終末迄の間（第十週から第十四週迄）に消費され、次の勞働期間に使用すべきものとして二百磅が遊離されることとなる。第二次回轉期間は第十五週から第十六週迄であつて、第十六週末にはまた七百磅が回流して來る。この時以後、各勞働期間中に同一の現象が反復されるのである。最初の二週間における資本需要は、其前の勞働期間の終末に遊離された二百磅に依つて充たされる。第二週末には七百週が回流して來る。然るに勞働期間は最早五週間のみであつて、五百磅を消費し得るに過ぎない。かくて絕えず二百磅といふ額が、次の勞働期間に使用すべきものとして遊離されることとなるのである。

以上說く所に依つて、次の事實が明かとなる。即ち、勞働期間が流通期間よりも大であると假定した上述の場合に於いては、如何なる事情の下にも流通期間に前貸された第二資本と等額の貨幣資本が各勞働期間末に遊離されてゐるといふ事がそれである。上記の三例における第二資本を見るに、第一例の分は三百磅、第二例の分は四百磅、第三例の分は二百磅であつた。之に應じて、勞働期間の終末に遊離される資本も亦、それ〳〵三百磅、四百磅及び二百磅であつた。

（三）勞働期間が流通期間よりも小なる場合

此場合にも亦、先づ九週間といふ回轉期間を假定し、その中、勞働期間は三週間であつて、それに利用し得べき第一資本は三百磅、流通期間は六週間であるとする。此六週間の爲には、六百磅といふ追加資本が必要である。此追加資本は又、三百磅づつの二資本に分割され得る。而して其各は、一勞働期間の必要を充たすのである。即ち三百磅づつの三つの資本が生ずる譯であつて、その中、三百磅は絕えず生產上の機能に從事し、六百磅は流通してゐるのである。

表（III）

第一資本

回轉期間	勞働期間	流通期間
（一）第一週から第九週迄	第一週から第三週迄	第四週から第九週迄
（二）第十週から第十八週迄	第十週から第十二週迄	第十三週から第十八週迄
（三）第十九週から第二十七週迄	第十九週から第二十一週迄	第二十二週から第二十七週迄
（四）第二十八週から第三十六週迄	第二十八週から第三十週迄	第三十一週から第三十六週迄
（五）第三十七週から第四十五週迄	第三十七週から第三十九週迄	第四十週から第四十五週迄
（六）第四十六週から（第五十四週迄）	第四十六週から第四十八週迄	第四十九週から（第五十四週迄）

第二資本

回轉期間	勞働期間	流通期間
（一）第四週から第十二週迄	第四週から第六週迄	第七週から第十二週迄
（二）第十三週から第二十一週迄	第十三週から第十五週迄	第十六週から第二十一週迄
（三）第二十二週から第三十週迄	第二十二週から第二十四週迄	第二十五週から第三十週迄
（四）第三十一週から第三十九週迄	第三十一週から第三十三週迄	第三十四週から第三十九週迄
（五）第四十週から第四十八週迄	第四十週から第四十二週迄	第四十三週から第四十八週迄
（六）第四十九週から（第五十七週迄）	第四十九週から第五十一週迄	（第五十二週から第五十七週迄）

第三資本

回轉期間	勞働期間	流通期間
(一)第七週から第十五週迄	第七週から第九週迄	第十週から第十五週迄
(二)第十六週から第二十四週迄	第十六週から第十八週迄	第十九週から第二十四週迄
(三)第二十五週から第三十三週迄	第二十五週から第二十七週迄	第二十八週から第三十三週迄
(四)第三十四週から第四十二週迄	第三十四週から第三十六週迄	第三十七週から第四十二週迄
(五)第四十三週から〔第五十一週迄〕	第四十三週から第四十五週迄	第四十六週から第五十一週迄

卽ち曩に揭げた第一の場合と全く反對の形を採るのであつて、ただ異なる所は今や二つの資本の代りに三つの資本が交代し合ふといふ一點のみである。この場合、各資本の進路は一年の終末に至るまで別々に辿り得るのである。隨つて、一勞働期間の終末に何等の資本遊離も生じないことは、第一の場合におけると同樣である。第一資本は第三週末に全く消費され、第九週末に全く回流し來たつて、第十週の初めに再び機能を開始するのである。第二資本及び第三資本についても同樣であつて、規則正しき完全な交代に依り一切の遊離は不可能とされるのである。

總回轉は左の如く計算される。

第一資本　300磅×5 2/3　卽ち一千七百磅
第二資本　300磅×5 1/3　卽ち一千六百磅
第三資本　300磅×5　卽ち一千五百磅
總資本　900磅×5 1/3　卽ち四千八百磅

次にまた、流通期間が勞働期間の嚴密に四倍ではない場合、例へば勞働期間が四週間であつて、流通期間が五週間である場合を例に採らう。これに應じて、各資本額は次の如くになるであらう。第一資本は四百磅、第二資本は四百磅、第三資本は一百磅。左に最初の三回轉だけを擧げる。

表（IV）

第一資本

回轉期間	勞働期間	流通期間
(一)第一週から第九週迄	第一週から第四週迄	第五週から第九週迄
(二)第九週から第十七週迄	第九及十週から第十二週迄	第十三週から第十七週迄
(三)第十七週から第二十五週迄	第十七及十八週から第二十週迄	第二十一週から第十五週迄

第二資本

回轉期間	勞働期間	流通期間
(一)第五週から第十三週迄	第五週から第八週迄	第九週から第十三週迄
(二)第十三週から第二十一週迄	第十三及十四週から第十六週迄	第十七週から第二十一週迄
(三)第二十三週から第二十九週迄	第二十一及十三週から第二十五週迄	第二十五週から第二十九週迄

第三資本

回轉期間	勞働期間	流通期間
(一)第九週から第十七週迄	第十九週	第十週から第十七週迄
(二)第十七週から第二十五週迄	第七週	第十八週から第二十四週迄
(三)第二十五週から第三十三週迄	第二十五週	第二十六週から第三十三週迄

この場合、第三資本――それは一週間だけは勞働行程内に留まつてゐるに過ぎず、何等の獨立した勞働期間をも有してゐないのである――の勞働期間が、第一資本の場合にも、第二資本の場合にも、勞働期間の終末になると、第三資本に等しき一百磅といふ額が遊離されることとなるのである。蓋し第三資本が第一資本の第二次以下の各勞働期間における第一週に充用されて、この第一週の終末に四百磅といふ第一資本の全部が回流するものとすれば、第一資本の勞働期間の自餘の部分については、もはや三週の期間と、それに照應した三百磅といふ放下資本とが殘存するに過ぎなくなるからである。かく遊離された一百磅は、第二資本の直接連續した勞働期間の第一週の必要を充たすに足るものであつて、此第一週の終末に四百磅といふ第二資本の全部が回流して來る。けれども新たに開始される勞働期間は、もはや三百磅を吸收し得るに過ぎないものであるから、其終末になると又一百磅といふ額が遊離されて來るといふ風に、絶えず一百磅が遊離されるのである。要するに流通期間が勞働期間の單純倍數でなくなるや否や、勞働期間の終末に資本が遊離して來るのであつて、この遊離資本は一つの勞働期間又は倍加勞働期間以上に出づる流通期間の超過分の必要に應ずべき資本部分に等しいのである。

以上攻究した一切の場合を通じて、勞働期間竝びに流通期間は、如何なる營業について考へても、終年不變であると假定した。この假定は、流通期間が回轉及び資本前貸の上に及ぼす影響を確認しようとする場合必要のことであつた。玆に假定する事は、現實に於いては無條件的に行はれるものではなく、且つ全然行はれない場合すら屢々ある。けれども斯かる事實は、問題の上に何等の變化をも與へるものではないのである

本節全體を通じて、我々は單に流通資本の回轉のみを考察し、固定資本の回轉は攻究しなかつたのであるが、それは要するに、本節に取扱ふ問題が固定資本とは何等關係する所がないためである。生產行程に充用される勞働要具其他の物は、その使用期間が流通資本の回轉期間以上に出づる限りに於いてのみ、換言すれば、不斷に反復される勞働行程內に勞働要具が連續して役立つ期間が流通資本の回轉期間よりも大であり、其n倍に等しい限りに於いてのみ、固定資本たるのである。流通資本の斯かるn回轉期間に依つて代表される總期間が大であるにしろ、小であるにしろ固定資本として此期間に前貸される生產資本部分は、此期間の持續中新たに前貸されるものではなく、舊來の使用形態を以つて作用をつづけるのであつて、ただ左の一點が異なるのみである。即ち流通資本の各回轉期間における個々の勞働期間の長短に從つて、固定資本が其原價値の中からこの勞働期間の生產物に移轉する部分の上にも大小の差を生じ、また各回轉期間における流通期間の長短に從つて、固定資本の中から生產物に移轉される價値部分が貨幣形態に再轉化される速度の上にも緩急の差を生じて來る點が異なるのである。本節に取扱ふ主題――生產資本の流通部分の回轉――の性質は、この流通資本部分それ自身の性質に基くものであつて、一つの勞働期間に充用された流通資本は、その回轉を終了して商品資本に轉化され、商品資本から更らに貨幣資本に轉化され、貨幣資本から又生產資本に再轉化される迄は、新たなる勞働期間に充用され得るものではない。されば第一次勞働期間の終了後直ちに第二次勞

働期間を連續せしむるためには、新らたに資本を前貸して之れを生產資本の流動要素に轉化することが必要となつて來る。而も此新たなる資本は、第一次勞働期間の爲に前貸された流通資本の流通期間に基く空隙を塡たすに十分の量を以つて、前貸されねばならないのである。流通資本の勞働期間の長短が、勞働行程の經營規模や、前貸資本の分割又は新たなる資本分の追加などの上に、影響を及ぼすこととなるのは之れが爲である。而して此問題こそ、本章に攻究せねばならなかつた所のものである。

（四）結　論

以上の攻究に依つて左の結論が生じて來る。

（A）資本が一方に於いて流通期間の內部に在留してゐるとき、他方に又絕えず勞働期間の內部にも在留し得るやうにするには、それを相異つた各部分に分割する事が必要になるのであるが、此等の資本部分は各獨立した私資本と同樣に、左の二つの場合には相互交代するものである。卽ち（一）勞働期間が流通期間に等しい場合、換言すれば、回轉期間が同じ長さの二つの部分に分割される場合、（二）流通期間が勞働期間よりも大ではあるが、同時に又その單純倍數を構成し、隨つて一つの流通期間がn倍（nは整數でなければならない）の勞働期間に等しい場合。以上二つの場合には、連續的に前貸された資本の如何なる部分も遊離されるものではない。

（B）反對に（一）流通期間が勞働期間よりも大であつて、而もその單純倍數を構成することなき場合と、（二）勞働期間が流通期間よりも大なる場合とに於いては、流通總資本の一部は第二次回轉以後たえず週期的に、各勞働期間の終末に際して遊離されることとなる。而して此遊離資本は、勞働期間が流通期間よりも大なる場合には、總資本中の流通期間に前貸された部分と相等しく、また流通期間が勞働期間以上に出づる流通期間の超過分の必要を充たすべき資本部分と相等しいのである。

（C）以上の事實に依つて次の結論が生じて來る。卽ち社會的總資本の流通部分について言へば、資本の遊離が常則であつて、生產行程內に連續して作用する資本諸部分間の單なる相互交代は、寧ろ例外たるべきであるといふ事がそれである。なぜならば、勞働期間と流通期間とが相等しく、又は流通期間が勞働期間の單純倍數に等しいといふ、回轉期間の兩組成部分間に存する規則正しい比例は、問題の性質の上には何等關係するところ無きものであつて、大體の所、ただ例外的にのみ見出され得るに過ぎないからである。

かくて、一年に幾度も回轉する社會的流通資本の極めて顯著なる部分は、回轉循環が年々進行しつつある間、週期的に遊離資本たる形態を採ることとなるであらう。

尙また、他の凡らゆる事情が不變であると假定すれば、勞働行程の範圍が大となり、生產の規模が擴められるに隨ひ、總括して言へば資本制生產の發達が進むにつれて、右の如き遊離資本の量が增大するに至ることは明かである。上記（B）の第二場合に於いては、前貸資本が增大した結果、又その第一場合に於いては、資本制生產の發達につれて流通期間が延長され、かくして——流通期間との間の規則正しき比例を伴ふことなくして勞働期間が擴大される所に在つては——回轉期間も亦延長される結果、遊離資本の量は增大することとなるのである。

此第一の場合には、每週例へば一百磅づつ投資しなければならなかつた。卽ち六週間なる勞働期間には六百磅、三週間なる勞働期間には三百磅、合計九百磅の投資を要したのである。この場合には、絕えず三百磅といふ額が遊離される。然るに每週三百磅づつ投資する場合には、勞働期間のためには一千八百磅、流通期間の爲には九百磅の投資を

要し、隨つて三百磅の代りに九百磅といふ額が時を切つて遊離されることとなる。

（D）例へば九百磅といふ總資本は、上例の勞働期間に使用すべき六百磅と流通期間に使用すべき三百磅との如き、二つの部分に分割されなければならぬ。これが爲、現實に於いて勞働行程に投ぜられる部分は、三分の一だけ減少して九百磅から六百磅となり、隨つて生産規模は三分の一だけ縮少されることとなる。他方に三百磅なる資本は、勞働期間を連續的のものにして、一年の間毎週一百磅づつ勞働行程の上に放下せしめ得るやうにする目的を以つてのみ、その機能を讓すのである。

六百磅なる資本が 6×8 即ち四十八週間（その生産物は四千八百磅）生産上に作用すると見るのも、又は九百磅なる全資本が六週間勞働行程の上に放下され、次いで三週間といふ流通期間の持續中休用狀態に置かれると見るのも、抽象的に言へば結局同じ事である。後の場合には、四十八週間の經過中、資本は $\frac{1}{8}\times 6$ 即ち三十二週間（其生産物は $\frac{1}{8}\times 900$ 即ち四千八百磅）生産上に作用し、而して十六週間休用狀態に置かれることとなるであらう。然し此十六週間に亙る休用狀態中に、固定資本がヨリ著しく惡化するといふ事實、竝びに一年の一部期間中に作用するだけであつて、而も其代價は全一年間に支拂はれねばならぬ勞働が騰貴を來たすといふ事實は暫く措き、右に述ぶる如き生産行程の規則正しき中絶は、近世大産業一般の經營とは一致し難い。勞働期間を上述の如く連續的たらしめることは、それ自身一つの勞働生産力たるのである。

今、上記の遊離されたる、實際に於いて作用を停止されたる資本をば、更らに立ち入つて觀察するならば、其著しき部分が絶えず貨幣資本なる形態を有して居らねばならぬことが知られる。上例に從つて、勞働期間は六週間、流通期間は三週間、而して毎週の投資は一百磅であると假定する。第二次勞働期間の中葉、即ち第九週の終末に、六百磅といふ額が回流して來る。この中、殘餘の勞働期間中に放下せられるべき分は三百磅に過ぎない。かくして第二次勞働期間の終末に、右の六百磅の中から三百磅だけ遊離されることとなる。所で此三百磅は如何なる狀態のもとに在るか？　今、勞銀に放下さるべき分が三分の一、原料及び助成材に放下さるべき分が三分の二であると假定しよう。然る場合、回流した六百磅の中、二百磅は勞銀に充用すべきものとして貨幣形態を採り、四百磅は生産在庫品なる形態、即ち生産上に充用すべき不變流通資本の要素なる形態を採つて存在する。然るに第二次勞働期間の後半に必要な分はこの生産在庫品の半分だけであるから、他の半分は三週の間、過剩の生産在庫品、換言すれば一勞働期間の必要を超過した生産在庫品といふ形態を採つて存在することとなる。けれども資本家は、回流資本の此部分（四百磅）の中、當座の勞働行程に必要な額は半分（二百磅）だけであることを知つてゐる。そこで、彼れが此殘餘の二百磅の全部又は一部をば即時過剩の生産在庫品に再轉化するか、それともヨリ有利なる市況の到來を期待しつつ貨幣資本として其全部なり一部なりを保留して置くかは、市況の如何に懸ることである。他方に又、勞銀の支拂に投ずべき二百磅といふ部分が貨幣形態のまま保留されてゐることは言ふ迄もない。蓋し資本家は、勞働力を購買した後、これを原料の如く倉庫内に保藏して置くことは出來ないからである。彼れは購買した勞働力を以つて生産行程に合體せしめなければならない。而して週末に其代價を支拂ふのである。かくて遊離された資本三百磅の中、この一百磅だけは必らず遊離貨幣資本、換言すれば勞働期間にとつては必要でない貨幣資本といふ形態を有することとなるであらう。即ち貨幣形態を以つて遊離された資本の額は、少なくとも、勞銀の支拂に投ぜられた可變資本部分に等しくなくてはならず、最も著しき場合を言へば、それは遊離資本の全部を包括し得るのである。が、現實に於いては、それは此最低限と最高限との間を絶えず動搖してゐる。

かくの如く回轉運動の單なる機構のみに依つて遊離される貨幣資本は（固定資本の逐次的回流に基く貨幣資本及び各勞働行程内に於いて可變資本の爲に必要となる貨幣資本と相竝んで）、信用制度が發達するや否や重要なる役割を演ぜねばならぬこととなる。同時に又、それは信用制度の一基礎とならねばならないのである。

上例に於ける流通期間が三週間から二週間に短縮されたと假定しよう。これは尋常の現象ではなく、例へば營業の好況や支拂期限の短縮などに伴ふ結果であるとする。勞働期間中に放下された六百磅といふ資本は、必要なる期間よりも一週間早く回流して來る。隨つてそれは此一週の間遊離されることとなるのである。尙また曩の場合と同樣に、勞働期間の中葉に當り三百磅といふ額（右の六百磅の一部）が遊離される。然し此遊離は、今や三週間ではなく四週間に及ぶのである。卽ち一週間に六百磅、また三週間ではなく四週間に三百磅といふ額が、貨幣市場に存在するのである。この事實は單に一資本家ばかりではなく、多數の資本家についても行はれるところであり、且つ種々なる時期に於いて種々なる營業部門の內部に生ずるものであるから、右に掲ぐるところよりも、ヨリ多くの利用し得べき貨幣資本が市場に出現することとなる。斯かる狀態が長期間持續すれば、生產は可能の場合には擴大される。また資本家が借受資本を以つて從業するやうになると、貨幣市場に向けられる需要は減じて來る。これがため、貨幣市場は貨幣供給の增大した場合と同一の程度に緩和される。或は又最後に、生產の機構上過剩となつた貨幣額は、終極的の意味で貨幣市場に放出される。

流通期間が三週間から二週間に、隨つて又回轉期間が九週間から八週間に短縮される結果、前貸總資本の九分の一は過剩となり、從前九百磅を以つて經營されてゐた六週間なる勞働期間は、今や八百磅を以つて同樣に間斷なく進行狀態に置かれ得るのである。かくて商品資本價值の一部たる一百磅は、一度び貨幣に再轉化されると、最早それ以上

生產行程に前貸された資本の一部たる機能を盡くすことなくして貨幣資本たる此狀態を維持することとなる。物價などの如き他の諸條件に變化がないとして、生產が同一なる規模のもとに持續されてゐるとき、前貸資本の價值高は九百磅から八百磅に低減する。而して最初に前貸された價值の殘額一百磅は貨幣資本の形態を以つて遊離され、貨幣資本として貨幣市場に入り、この市場に於いて機能を盡しつつある諸資本の追加分となるのである。

以上說くところに依つて、我々は貨幣資本の過充なるものが如何にして生じ得るかを知るのである。玆に貨幣資本の過充といふのは、貨幣資本の供給が需要を超過するといふ意味にのみ解すべきではない。斯かる意味の貨幣過充は、常に相對的の過充たるに過ぎないものであつて、これは例へば恐慌後に開始せらるべき新たなる循環の起點たる『憂鬱期』に生じて來る。寧ろ社會的再生產行程總體（流通行程をも含む）の經營上、前貸資本價值の一定部分が過剩となり、それが貨幣資本の形で遊離されるといふ意味に解すべきである。斯かる意味の貨幣過充は、生產の規模と物價とに變化なき限り、回轉期間の縮少にのみ基くものであつて、流通しつつある貨幣量の大小といふ事は、此點に些かの影響をも及ぼすものではない。

反對に、流通期間が例へば三週間から五週間に延長されたと假定しよう。この場合には、早くも次期の回轉に於いて前貸資本の回流は二週間後れることとなる。この勞働期間における生產行程の最終部分は、前貸資本の回轉そのものの機構に依つて、最早それ以上持續することは出來なくなる。斯かる狀態が長期間持續するとき、上述の場合には生產行程——卽ち生產行程の經營される範圍——の擴大が生じたのであるが、今や其縮小が生じ得るやうになるであらう。けれども同一なる規模のもとに生產行程を繼續せしめる爲には、流通期間の斯かる延長期間全部について前貸資本を九分の二卽ち二百磅だけ增大することが必要となるであらう。この追加資本は貨幣市場からのみ採り得るもの

である。故に若し流通期間の延長が、一つ又はヨリ多數の大なる營業部門に於いて行はれるとすれば、斯かる場合には、他の側からの反對作用に依つて相殺されない限り、貨幣市場の上に一つの逼迫が釀され得るのである。此場合にも亦右の過充と同樣に、斯かる逼迫が諸商品の價格なり現存流通要具の量なりの上に生ずる變化とは些かも關係するところないことは、明々白々の事實である。

「この章を上梓し得る迄に完成するには、少なからざる困難が伴つた。マルクスは代數には頗る熟達してゐたが、數字の計算、殊に商業上の數字計算には極めて不慣れであつた。尤も彼れは手づから、幾多の算例に依つて凡ゆる種類の商業上の計算を練習してゐたのであつて、此等の計算は厚い一冊の控帳に收められてある。けれども種々なる計算方法を心得てゐるといふ事と、商業上における日常の實地計算に熟練するといふ事とは、決して同一ではない。かくてマルクスは回轉に關する諸計算の中に絡み込まれてしまひ、計算が未了のまま中途で放擲されてゐる所もあれば、又完了された計算の中にも、終極に於いて不正確と矛盾とを含むものが少からず見出された程である。上記各表の中には、最も單純にして數學上正確なるもののみを保存することとした。それは主として、次の理由に依つたのである。

この骨の折れる計算の結果が不確實であつたため、私の見る所に依れば事實上左程に重要でない一事實が、マルクスに依つて不當の重要を附與されることとなつた。その事實といふのは、卽ち、彼れが貨幣資本の『遊離』と名づけた所のものである。曩に與へた假定のもとにおける現實の事態は左の通りである。

勞働期間と流通期間との、隨つて又第一資本と第二資本との分量比例の如何に關係なく、第一次回轉の終了したとき、規則正しく勞働期間だけの間斷を置いて、各勞働期間に必要な資本——卽ち第一資本に等しい額——が貨幣形態を採つて資本家の手に復歸して來る。

勞働期間が五週間、流通期間が四週間であつて、第一資本が五百磅に等しいとすれば、第九週、第十四週、第十九週、第二十四週、第二十九週等の終末に、各五百磅なる貨幣額が回流して來る。

また勞働期間が六週間、流通期間が三週間であつて、第一資本が六百磅に等しいとすれば、第九週、第十五週、第二十一週、第二十七週、第三十三週等の終末に、各六百磅といふ貨幣が回流して來る。

最後に、勞働期間は四週間、流通期間は五週間であつて、第一資本は四百磅に等しいとすれば、第九週、第十三週、第十七週、第二十一週、第二十五週等の終末に、各四百磅なる貨幣額が回流して來る。

この回流した貨幣の中、當座の勞働期間にとつて過剩となり、隨つて遊離されることとなるものがあるか否か、又その幾許が左樣になるかといふ問題は何れにしても異なる所はないのである。生產は間斷なく同一の規模を以つて進行するものと假定するのであつて、斯くあらしむるためには貨幣の存在を必要とする。卽ち『遊離』されるに至ると否とを問はず、貨幣の回流し來たる事を必要とするのである。生產が中絕されるとすれば、遊離も亦中絕される事となる。語を換へて言へば、貨幣形態を採つた伏能的資本（可能的たるに過ぎぬ資本）の成立が行はれることは事實であるが、然しそれは如何なる事情のもとにも生ずるものであつて、以上本文中に詳述した特殊條件のもとにのみ行はれるものではない。それは又、本文中に假定した所よりも大なる規模を以つて行はれるのである。第一の流通資本についていへば、各回轉の終末における產業資本家の位置は、營業開始當時における位置と毫も異ならない。卽ち此資本は全部一括して再び彼れの手に戻つて來るのであつて、彼れはただ漸次的にのみ、それを生產資本に再轉化せしめ得るのである。

本文中の重要なる點は、一方に於いて產業資本の顯著なる部分は常に貨幣形態を採つて居らねばならないが、他方

に於いて其ヨリ顯著なる部分は漸行的に貨幣形態を採らねばならないといふ事實を論證したことにある。この論證は茲に私が揭げるところの追記に依つて寧ろ强調されることとなるのである。――F・E・」

(五)　價格變動の影響

以上の說明に於いては、一方に價格及び生產規模が不變であつて、他方に流通期間が伸縮すると假定した。そこで今度は反對に、回轉期間の大小に變化なく生產規模も不變であるが、他方に價格が變動するものと假定しよう。卽ち原料、助成材竝びに勞働の價格、又は此等三要素中の前二者の價格が變動するものと假定するのである。今、原料及び助成材の價格、竝びに勞働賃銀が二分の一の低落を來たしたとすれば、上例に於ける毎週の前貸資本は一百磅から五十磅となり、九週間なる回轉期間の前貸資本は九百磅から四百五十磅となるであらう。前貸資本價値の中から、先づ四百五十磅といふ額が貨幣資本として遊離される。けれども生產行程は、從前と同一の規模、同一の回轉期間及び同一の回轉期間分割を以つて持續される。一年間の生產物量も同樣に不變であるが、ただ其價値は二分の一の低減を來たすこととなるのである。この變化は又、貨幣資本の需給の變動をも伴ふものであつて、それは流通速度の增進に基くものでもなければ、流通貨幣量の變化に基くものでもない。寧ろ反對に、生產資本要素の價値又は價格が二分の一低減した結果、先づ從前と同一の規模を以つて持續される所のXなる營業に前貸される資本價値は半ば減じて、このXなる營業から市場に投ぜらるべき貨幣も半ば減することとなるであらう。蓋しこのXなる營業は、右の資本價値をば先づ貨幣形態を以つて、換言すれば貨幣資本として前貸するからである。生產諸要素の價格が低落したので、その結果、流通內に投ぜられる貨幣量は減少することとなる。之れは第一に生ずるであらう所の結果である。

第二に又、最初前貸された九百磅といふ資本價値の半額四百五十磅は、(a)貨幣資本、生產資本及び商品資本なる形態を交々通過し來たつたものであり、又(b)間斷なく、同時に相竝んで、一部分は貨幣資本、一部分は生產資本、一部分は又商品資本なる形態を採つたものであるが、この四百五十磅はXなる營業の循環中から遊離せしめられ、追加貨幣資本として貨幣市場に入り、追加部分として貨幣市場の上に影響を及ぼすこととなるであらう。この遊離せしめられた四百五十磅なる貨幣が貨幣資本として作用するのは、それがXなる營業の執行上過剩となつた貨幣であるからではなく、寧ろそれが原資本價値の組成部分であつて、資本たる機能を持續するものであり、單なる流通要具として支出せらるべきものではないからである。この遊離貨幣をば資本として作用せしむる最も直接の形態は、それを貨幣資本として貨幣市場に投ずることである。他方に於いて、生產の規模を(固定資本のことは暫く措き)二倍に擴大することも出來る。斯かる場合には、九百磅なる同一の前貸資本を以つて、從前に二倍する範圍の生產行程が經營されることとなるであらう。

反對に、生產資本の流動要素の價格が二分の一だけ昂騰したとすれば、毎週の前貸資本は一百磅から一百五十磅となり、隨つて回轉期間に要する資本は九百磅から一千三百五十磅となるであらう。從前と同一の規模を以つて營業を繼續するには、四百五十磅なる追加資本が必要となり、それだけ又、貨幣市場は其狀況の如何に從つて大なり小なりの壓迫を受けることとなるであらう。貨幣市場における一切の利用し得べき資本が旣に約定濟みとなつた場合には、利用し得べき資本について激烈なる競爭が生ずるであらう。又この資本の一部が休用狀態にあるとすれば、斯かる資本部分はそれだけ活動狀態に置かれることとなるであらう。

第三に又、生產の規模が一定してゐて、回轉速度と生產資本の流動要素の價格とが不變である場合にも、Xなる營

業の生産物の價格は昂騰又は低落し得るのである。若しXなる營業に依つて供給される商品の價格が低落するとすれば、この營業が絕えず流通内に投じてゐた六百磅なる商品資本の價格は、例へば五百磅に低減する。かくて前貸資本價値の六分の一は、流通行程の中から回流することなく（商品資本中に含まれる餘剩價値のことは、この場合問題外に置く）寧ろ流通行程の内部で失はれてしまふのである。然るに生産諸要素の價値又は價格は不變であるから、回流した五百磅を以つてしては、絕えず生産行程内に留置されてゐる六百磅といふ資本の六分の五を補償し得るに過ぎない。そこで從前と同一の規模を以つて生産を繼續する爲には、一百磅といふ追加貨幣資本の支出が必要となるであらう。

反對に若しXなる營業の生産物の價格が昂騰したとすれば、その場合六百磅といふ商品資本の價格は、例へば七百磅に增進する。この價格の七分の一即ち一百磅は、生産行程から來るものではない。それは寧ろ、流通行程の内部から來るのである。然し生産要素を更新するには六百磅を要するだけであるから、終極に於いて一百磅といふ額が遊離されることとなる。

右の第一の場合には何故、回轉期間が伸縮され、第二の場合には何故、原料竝びに勞働の價格が騰落し、第三の場合には何故、供給生産物の價格が騰落するかを究めることは、當面の研究範圍に屬するものではない。

此場合の研究範圍に屬するものは、寧ろ左の諸事項である。

（一）　生産規模に變化なく、生産物諸要素竝びに生産物の價格も亦不變であつて、流通期間隨つて回轉期間の上に變化の生ずる場合。

上例に假定した所に依れば、流通期間が短縮される結果、前貸總資本は九分の一だけ減少する。即ちそれは九百磅から八百磅に低減し、一百磅といふ貨幣資本が遊離されることとなるのである。

Xなる營業は、從前通り六百磅の價値ある六週間分の生産物を供給する。而して其從業は一年間を通じて不斷に持續されるものであるから、五十一週間には五千一百磅の價値ある從前と同一量の生産物が供給されることとなる。即ちXなる營業に依つて流通内に投ぜられる生産物の分量及價格の上には何等の變化も生ぜず、また此生産物が市場に投ぜられる期限も何等變化を受けることがないのである。それにも拘らず、一百磅といふ價格が遊離せしめられるのは、流通期間が短縮された結果、從前九百磅の前貸資本を必要とした生産行程が今や八百磅を以つて必要を充たされることとなるからである。一百磅といふ遊離資本は、貨幣資本の形を採つて存在する。然しそれは決して、絕えず貨幣資本なる形態を以つて作用せねばならぬ前貸資本部分を代表するものではない。六百磅なる第一前貸流通資本中の五分の四なる四百八十磅は、絕えず生産材料の購買に投ぜられ、五分の一即ち一百二十磅は勞銀の支拂に投ぜられるものと假定しよう。即ち每週について計算すれば、八十磅といふ資本が勞銀の支拂に投ぜられることとなる。三百磅なる第二資本も亦、生産材料の購買に投ぜられ、二十磅といふ資本が勞銀に投ずべき五分の一即ち六十磅とに分割されなければならぬ。勞銀に投ぜられる資本は、常に貨幣形態を以つて前貸されることを要するのである。六百磅なる價値の商品生産物が販賣されて、貨幣形態に再轉化されるや否や、其中の四百八十磅は生産材料（生産在庫品）に轉化され得るが、殘餘の一百二十磅は六週間分の勞銀支拂に使用すべきものとして貨幣形態を保持してゐる。この一百二十磅は、六百磅なる回流資本の中、つねに貨幣資本なる形態を以つて更新代置される所の、隨つて又常に、貨幣形態を以つて作用する前貸資本部分として存在せねばならぬ所の最小限たるものである。

所で定期的に三週間遊離される三百磅――これもまた、二百四十磅なる生産在庫品と、六十磅なる勞銀とに分割さ

れ得るものであるが――の中、流通期間が短縮された結果、一百磅といふ額が貨幣として遊離され、回轉の機構中から全く放出されることになるとすれば、かかる場合この一百磅に相當する貨幣は抑も何處から來るものであらうか？其五分の一だけは、回轉の內部に於いて定期的に遊離される所の貨幣資本から成るのであるが、殘餘の五分の四即ち八十磅は、同一なる價値の追加的な生產在庫品に依つて既に代置されてゐるのである。この追加的生產在庫品は如何にして貨幣に轉化され、又かかる轉化に必要な貨幣は何處から來るものであらうか？

流通期間の短縮が一度び事實となつて現はれるや否や、上記六百磅の中生產在庫品に再轉化される分は、四百八十磅から四百磅に低減する。而して殘餘の八十磅は貨幣として保持され、勞銀支拂に使用すべき上記の二十磅と相合して一百磅なる遊離資本を形成することとなる。この一百磅は六百磅なる商品資本の購買を通して流通から來たつたものので、今や勞銀及び生產諸要素に再放下されることとなるが故に流通內部から引き上げられることとなるのであるが、然し玆に忘るべからざることは、右の一百磅が現在採つてゐる所の貨幣形態は、それが最初流通內部に投ぜられたときの形態その儘であるといふ一點である。最初・九百磅なる貨幣が生產在庫品と勞銀に投ぜられた。同一の生產行程を執行するためには、今や八百磅だけで十分である。かくして一百磅といふ額が貨幣として遊離されることとなるのであるが、この遊離貨幣は今や投資口を求めつつある新たなる一成分となるのである。この一百磅は從前にも定期的には、遊離貨幣資本及び追加生產在庫品なる形態を採つてゐたことは事實であるが、然し此等の伏能的狀態はそれ自身また生產行程の執行竝びに連續の條件たるものであつた。然るにそれは、今では最早この目的のために必要のものではなくなり、かくして新たなる貨幣資本、即ち貨幣市場の新たなる一成分となるのである。尤も此一百磅は決して、現存せる社會的保藏貨幣の追加要素たるものではなく（なぜならば、それは營業開始當時にも存在してゐたものであつて、營業に依り流通に投入されたものであるから）、また新たに蓄積された退藏貨幣たるものでもない。

今や此一百磅なる貨幣額は、それが最早同一の營業に充用されることなき、前貸貨幣資本の一部である限り、實際に於いて流通內部から引き上げられてゐるのである。然しそれを斯く引き上げることは、商品資本を貨幣に轉化せしめ、これを更らに生產資本に轉化せしむる W—G—W なる轉形が、一週間だけ其進行を速められ、かくして此行程に充用されてゐる貨幣の流通も亦、同樣に進行を速められたといふ理由に依つてのみ可能となるのである。右の一百磅は、最早Xなる資本の回轉に必要なものではなくなつたので、そのため流通內部から引き上げられることとなつたのである。

右の場合、前貸資本は共充用者の所有に屬するものと假定したのであるが、充用者がそれを他から借り受けたものとしても、問題の上には何等の變化も生じない。流通期間が短縮される結果、彼れの借受資本は九百磅から八百磅に減少するであらう。そこで一百磅を貸附者の手に返還するとすれば、この一百磅は上記の場合と同樣に新たなる貨幣資本となるのであつて、ただXなる人の手に在つたものが、今やYなる人の手に在るといふ一點が異なるのみである。又もしXなる資本家が四百八十磅の價値ある生產要素を掛けで買ひ、かくして勞働に充用すべき一百二十磅だけを自分自身の懷ろから前貸すれば可いといふことになると、彼れが今や掛けで買ふべき生產要素は八十磅だけ減少することとなるであらう。かくて此八十磅なる生產要素は、掛け賣りする資本家にとつては超過商品資本となるであらう。

一方またXなる資本は、二十磅をば貨幣として遊離せしめたこととなるであらう。

追加的の生產在庫品は今や三分の一だけ減少した。それは從前、三百磅なる追加第二資本の五分の四、即ち二百四

十磅であつたが、今や一百六十磅に過ぎなくなる。換言すれば、三週間分のものが二週間分に減少するのである。從前三週毎に更新された追加的在庫品は、今や二週毎に、而も三週間分としての代りに二週間分として更新されるのである。例へば棉花市場に行はれる購買は、少量づつ頻々と反復される。生産物の量は不變であるから、市場より引き上げられる棉花の量には變化がない。然し此同一量の棉花の時間的配分は異なつて來る。卽ちそれはヨリ長期に亙つて配分されることとなるのである。例へば三ケ月と二ケ月とが問題であつて、一年間の棉花消費は一千二百梱であると假定する。然る時は、三ケ月の場合における販賣は次の如くになるのであらう。

一月一日	三〇〇梱	（在庫殘餘　九〇〇梱）
四月一日	三〇〇梱	（在庫殘餘　六〇〇梱）
七月一日	三〇〇梱	（在庫殘餘　三〇〇梱）
十月一日	三〇〇梱	（在庫殘餘　　〇梱）

然るに、二ケ月の場合における販賣は左の通りである。

一月一日	二〇〇梱	（在庫殘餘一〇〇〇梱）
三月一日	二〇〇梱	（在庫殘餘　八〇〇梱）
五月一日	二〇〇梱	（在庫殘餘　六〇〇梱）
七月一日	二〇〇梱	（在庫殘餘　四〇〇梱）
九月一日	二〇〇梱	（在庫殘餘　二〇〇梱）
十一月一日	二〇〇梱	（在庫殘餘　　〇梱）

かくの如く、二ケ月の場合には、棉花の購買に投じた貨幣は一ケ月後れて完全に回流して來る。卽ち十月に回流したものが、十一月に回流することとなるのである。故に流通期間隨つて又回轉期間が短縮される結果、前貸資本の九分の一に相當する一百磅といふ額が貨幣として遊離され、而して此一百磅が週賃銀の支拂に充用すべき定期的に遊離される貨幣資本二十磅と、定期的に過剩となる一週間分の生産在庫品八十磅とから成るものとすれば、この八十磅について言ふ限り、製造業者の側における過剩生産在庫品の減少は、棉花販賣業者の側における在庫商品の增大を伴ふものである。生産在庫品として製造業者の手に保存される期間の短縮した棉花は、それだけヨリ長期間に亙り、商品として棉花販賣業者の手に保藏されることとなる。

以上の說明に於いては、その商品がヨリ急速に販賣されて、代價の支拂を受けることがヨリ急速となつた結果であるか、或は又――掛け賣りが行はれる場合について言へば――支拂期間が短縮された結果であると假定した。かくて流通期間の短縮は、商品資本が貨幣資本に轉化される行程の短縮、換言すれば流通行程の第一段たる W—G の短縮に基くものとなつたのである。然るに流通期間の短縮なるものは又、流通行程の第二段たる G—W にも起因し得るであらう。隨つて又それは、X なる資本家の手に彼れの流通資本の生產要素を供給する YZ 其他の資本の勞働期間なり流通期間なりの上に生ずべき、右の短縮と同時的な變化にも起因し得るであらう。

例へば棉花、石炭等が、その生產場所又は保藏場所から、X なる資本家の生產場所の所在點に到著する迄の間、舊來の運輸を以つてすれば三週間を要するものとする。然る場合、新たなる供給が到著する迄の間必要なる X の生產在庫品は、少なくとも三週間分に亙らなくてはならない。棉花及び石炭は、それが運輸の途上に在る間は生產機關とし

て役立ち得るものではない。この場合、それは寧ろ運輸業と運輸業に充用されてゐる資本との勞働對象たるものであつて、石炭生産者又は棉花販賣業者の立場から見れば、流通行程中に在る商品資本を代表するものである。今、運輸が改善された結果、運輸上の期間が二週間に低減したとすれば、生産在庫品は三週間分から二週間分に轉化され得る。かくて此方面に前貸された八十磅なる追加資本は遊離されることとなる。而して勞銀に充用すべき二十磅なる資本も同樣に遊離される。六百磅なる回轉資本は一週間早く回流することとなるからである。

他方に於いて、例へば、原料を供給する資本の勞働期間が短縮され（これが例解は前數章に與へた通りである）、かくしてヨリ短期間內に原料を更新する可能が與へられるやうになると、生産在庫品は減少を來たして、一つの更新期間から他の更新期間に到る間隔は縮小され得ることとなる。

反對に、流通期間隨つて又回轉期間が延長されると、追加資本の前貸が必要になつて來る。この追加資本は、それが當該資本家の所有に屬する場合には彼れ自身の懷ろから來る。けれども彼れが斯く自ら資本を有してゐる場合にはそれは既に貨幣市場の一部として何等かの形に放下されてゐるであらう。そこで之れを利用し得べきものとする爲には、舊來の形態から引き離すことが必要となる。例へば、株を賣つたり、預金を引き出したりすることが必要になつて來る。隨つて此場合にも、貨幣市場は間接の影響を受けることとなるのである。或は又、右の追加資本は之れを他から借り受くるの外はない。勞銀に充用すべき追加資本部分について言へば、通例の事情の下に於いては、それは常に貨幣資本として前貸されねばならない。この點に於いて、Xなる資本家は其持分だけ、貨幣市場の上に直接の壓迫を與へることとなる。生産材料に投ずべき追加資本部分について言へば、之れを右の如く貨幣資本として前貸することの避け難くなるのは、現金で其代價を支拂はねばならぬ場合に限られるのである。生産材料を掛けで買ひ得る場合には、貨幣市場は何等の影響をも受けるものでない。然る場合には、追加資本は生産在庫品として直接に前貸されるものであつて、貨幣資本として直接に前貸されるものではないからである。尤も此生産材料を掛け賣りする人がXから受け取つた手形の如きを直接また貨幣市場に投じて割引させるやうな事になると、斯かる場合には貨幣市場は間接に、即ち中間階段を經て、影響を受けることとなるが、この手形を例へば、後に及んで辨濟すべき債務の償却に利用するといふ段になると、貨幣市場はこの追加的に前貸された資本に依つて、直接にも間接にも影響を受くることはないのである[22]。

（二）他の凡ゆる事情に變化なく、生産材料の價格のみが變動する場合。

九百磅なる總資本の五分の四（七百二十磅）が生産材料に投ぜられ、五分の一（一百八十磅）が勞銀に投ぜられることは、上段に假定した所である。

生産材料の價格が二分の一だけ低減するとすれば、六週間なる勞働期間に必要なる生産材料は、四百八十磅から二百四十磅に減じ、また追加第二資本について要する分は、二百四十磅から一百二十磅に減ずることとなる。これがため、第一資本は六百磅から三百六十磅（＝240＋120磅）に低減し、第二資本は三百磅から一百八十磅（＝120＋60磅）に低減する。かくして九百磅なる總資本は五百四十磅（＝360＋180磅）となり、終極に於いて三百六十磅といふ貨幣額が遊離されることとなる。

この遊離された、そして今や不使用狀態に置かれてある、換言すれば、貨幣市場に投資口を求めつつある貨幣資本は、最初貨幣資本として前貸された九百磅なる資本の一斷片に外ならないものであつて、それが定期的に再轉化されてゆく生産諸要素の價格が低落したために過剩となつたものである。（それが斯く過剩となり得る爲には、營業が擴大

されず舊來の規模を以つて持續されることを必要とする)。かかる價格低下が偶然の事情（特に豐作や過剩供給など）に基くものではなく原料を供給する生產部門における生產力の增進に基くものであるとすれば、右の貨幣資本は、貨幣市場に對する、總じて又貨幣資本なる形態のものに利用し得べき資本に對する、絶對的の一追加となるであらう。蓋し、斯かる場合それは最早、既に充用されてゐる資本の何等の組成分たるものでもないからである。

(三)　生產物そのものの市場價格が變動する場合。

生產物の價格が低落したとすれば、資本の一部は喪失されることとなり、貨幣資本の新たなる前貸に依つて補充されねばならなくなる。販賣者側における此損失は、購買者に依つて回復され得る。この回復は、生產物の市場價格が市場に於ける單なる偶然の動搖に依つてのみ低落し、やがて再び平常の水準に昂騰する場合には直接に行はれ、また舊生產物に反應作用する所の價値變動に依つて斯くの如き價格動搖が生じ、而して斯かる生產物が更らに生產要素となつて他の生產部面に入り、それだけこの生產部面の資本を遊離せしめる場合には間接に行はれるのである。Xなる資本家は、彼れの喪失した資本を償ふため、貨幣市場を壓迫することとなるのであつて、この資本は右の何づれの場合にも、彼れの營業仲間に依り新たなる追加資本として供給され得るのである。

これに反して、生產物の價格が昂騰する場合には、前貸されなかつた資本部分が流通の內部から占有されることとなる。この資本部分は、生產行程に前貸された資本の何等の有機的部分でもない。隨つて、生產を擴大することなき限り、それは遊離された貨幣資本となるのである。この場合、生產物諸要素の價格は、生產物が商品資本として市場に入る以前すでに與へられてゐるものと假定するのであるから、玆に生產物の價格昂騰が生じて來るのは、現實的の價値變動が生じて、それが溯行的に作用し、かくして例へば後發的に原料の價格が昂騰せしめられた結果であると言ひ得るであらう。斯かる場合、Xなる資本家は、商品資本として流通しつつある彼れの生產物、及び現存せる彼れの生產在庫品に就いて、利得する所があるであらう。この利得に依つて彼れは、生產諸要素の新たなる昂騰した價格を以つて營業を繼續する爲に今や必要となる所の、追加資本を供給されるであらう。

或は又、價格昂騰が一時的の現象に過ぎない場合もある。斯かる場合、Xなる資本家の側に追加資本として必要となる所のものは、彼れの生產物が他の營業部門に使用さるべき生產要素たる限り、他の資本家側に於いて遊離される。一方の失ふところは、他方の得るところとなるのである。